山形県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

志戸田縄遺跡

第2・3次発掘調査報告書

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

第２次調査区遺構検出状況全景（南西から）

ＳＧ３河川跡出土遺物

巻頭図版２

北側掘立柱建物跡群（北東から）

ＳＤ302から出土した墨書土器（底部）『福有南』

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、平成10・11年度の発掘調査を実施した、志戸田縄遺跡の調査成果をまとめたものです。

志戸田縄遺跡は、山形市北西部、ＪＲ左沢線東金井駅の西方0.5㎞の水田地帯に位置しています。地目は水田・畑地で、稲作・果樹・花木苗栽培が行われています。

この度東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に伴い、工事に先だって緊急調査を実施しました。

調査では、古墳出現期の土器を多量に出土した河川跡や、墨書土器を含む溝跡、北側に区画溝を伴って配置された掘立柱建物群も検出されています。これらの遺構・遺物は当時の生活の一端を示す貴重な資料と言えます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫に伝えていくことが、私たちの重要な責務と言えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　木　村　　宰

例　　言

1　本書は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に係る「志戸田縄遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は、日本道路公団山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	志戸田縄遺跡	遺跡番号	平成10年度登録
所　在　地	山形県山形市大字陣馬字志戸田縄		
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調 査 期 間	平成10年４月１日～平成11年３月31日(第２次調査)		
現 地 調 査	平成10年10月27日～平成10年11月27日		
調査担当者	調査第一課長	佐藤　庄一	
	主任調査研究員	佐藤　正俊	
	調査研究員	氏家　信行(調査主任)	
	調査研究員	渡部　利之	
	調査員	衣袋　忠雄	
調 査 期 間	平成11年４月１日～平成12年３月31日(第３次調査)		
現 地 調 査	平成11年４月19日～平成11年７月22日		
調査担当者	調査第四課長	名和　達朗	
	調査研究員	押切　智紀(調査主任)	
	調査員	黒沼　幹男	

4　発掘調査及び本書を作成するに当たり日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力いただいた。また、出土遺物等について、平川南氏(国立歴史民俗博物館)、水澤幸一氏（新潟県中条町教育委員会)、江川隆氏（山形市教育委員会）から御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成･執筆は、渡部利之が担当した。編集は須賀井新人が担当し、全体については名和達朗が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	株式会社日本テクニカルセンター
遺物理化学的分析	パリノ・サーヴェィ株式会社
遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所

7　出土土器、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物跡	ＳＡ…柵(柱)列	ＳＫ…土坑
ＳＤ…溝跡・溝状遺構	ＳＧ…河川跡	ＳＥ…井戸跡
ＳＰ…ピット	ＳＸ…性格不明遺構	ＳＨ…墳墓
ＥＢ…柱穴掘方	ＲＰ…登録土器・陶磁器	ＲＭ…登録金属製品
ＲＱ…登録石器・石製品	ＲＷ…登録木製品	ＸＯ…出土地点不明遺物
Ｐ……土器・陶磁器	Ｓ……石	

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。なお、２次調査と３次調査の番号が同じ遺構もあるが、本文中では例えば「３次調査のＳＧ２」と扱い、混同しない配慮をしている。

3　報告書の基準は次の通りである。

（1）　遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）　グリッドの南北軸はN―20°―Eを測る。南北軸をＹ軸、東西軸をＸ軸とし、Ｙ軸を南から、Ｘ軸を西からアラビア数字を付した。

（3）　遺構実測図は、１/20・１/30・１/40・１/60・１/80・１/100・１/125・１/200・１/400・１/500縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

（4）　遺物実測図･拓影図は、土器については１/３を標準として採録し、それ以外の場合は、個々に表示した。器形が想定できるものは、残存１/４以下でも図上復元した。

（5）　遺物図版については任意の縮尺とした。

（6）　遺物実測図・拓影図の土器は、土師器・赤焼土器・及び中近世陶磁器については白抜き、須恵器については黒塗りで表示した。土器内外面の網点は黒色処理を表している。砂目は漆付着、粗いドットの網点は藍鉄鋼を表している。

（7）　本文中の遺物番号は遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

（8）　本文中のグリッド番号は北西グリッドを使用し、「○―△Ｇ」とのみ表記した。

（9）　遺物について本文中で取り上げる場合は、「第○図△番」を「○―△」または(△)と略記した。

(10)　出土遺物観察表中の(　)内の数値は、図上復元による推定値であり、破片での現存値は省略している。なお、残存率を付記しておいた。

(11)　観察表中の出土地点欄の「Ｆ」は覆土内出土を示し、その後に付く数字は上層からの層位を表している。

(12)　基本層序および遺構覆土の色調の記載については、1998年版農林水産業農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

(13)　樹種同定と骨同定の分析結果については、付編にて言及しているので、本文中での詳細な樹種などの記載は避け、理化学的分析に譲ることとした。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の概要 …… 1
Ⅱ　立地と環境
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺跡の概観
　1　基本層序 …… 7
　2　遺構と遺物の分布 …… 7
Ⅳ　第２次調査
　1　検出された遺構 …… 8
　2　出土した遺物 …… 16
Ⅴ　第３次調査
　1　検出された遺構 …… 27
　2　出土した遺物 …… 53
Ⅵ　まとめと考察
　1　調査のまとめ …… 75
　2　古墳時代の土器様相 …… 76

報告書抄録 …… 78

付編
　「志戸田縄遺跡から出土した骨の同定」
　「山形県志戸田縄遺跡出土木製品の樹種調査結果（１）」
　「山形県志戸田縄遺跡出土木製品の樹種調査結果（２）」

表

表１　第２次調査出土遺物観察表 ……26
表２　掘立柱建物跡観察表 ……38
表３　第３次調査出土遺物観察表（１）……72
表４　第３次調査出土遺物観察表（２）……73
表５　第３次調査出土遺物観察表（３）……74

挿　　図

第２次調査

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡概要図 …… 4
第３図　遺構配置図 …… 5
第４図　基本層序 …… 7
第５図　ＳＧ３河川跡 …… 9
第６図　ＳＧ３河川跡遺物出土状況 …… 10
第７図　ＳＤ２溝跡 …… 11
第８図　ＳＤ２溝跡遺物出土状況 …… 12
第９図　ＳＫ４・５・10・12 …… 14
第10図　ＳＫ22・23・24・25 …… 15
第11図　遺物実測図（１） …… 17
第12図　遺物実測図（２） …… 18
第13図　遺物実測図（３） …… 19
第14図　遺物実測図（４） …… 20
第15図　遺物実測図（５） …… 21
第16図　遺物実測図（６） …… 22
第17図　遺物実測図（７） …… 23
第18図　遺物実測図（８） …… 24
第19図　遺物実測図（９） …… 25

第３次調査

第20図　ＳＧ２河川跡 …… 28
第21図　ＳＧ３河川跡 …… 29
第22図　ＳＧ３河川跡東側遺物出土状 … 30
第23図　ＳＧ３河川跡西側遺物出土状 … 31
第24図　ＳＫ329・330土坑 …… 32
第25図　ＳＨ410墳墓 …… 33
第26図　ＳＤ302溝跡 …… 35
第27図　ＳＤ302溝跡東側遺物出土状…… 36
第28図　ＳＤ302溝跡西側遺物出土状…… 37
第29図　ＳＢ14掘立柱建物跡 …… 39
第30図　ＳＢ32掘立柱建物跡 …… 40
第31図　ＳＢ81掘立柱建物跡 …… 41
第32図　ＳＢ116掘立柱建物跡…… 42
第33図　ＳＢ125掘立柱建物跡
　　ＳＡ412柵列跡…… 43
第34図　ＳＢ170掘立柱建物跡…… 44
第35図　ＳＢ181掘立柱建物跡
　　ＳＡ411柵列跡…… 45
第36図　ＳＥ７・８・11・12・59
　　井戸跡 …… 48
第37図　ＳＥ199・208・209井戸跡
　　ＳＫ198・336土坑 …… 49
第38図　ＳＤ４溝跡 …… 50
第39図　ＳＤ４溝跡遺物出土状況 …… 51
第40図　ＳＸ195・342性格不明遺構…… 52
第41図　遺物実測図（１） …… 56
第42図　遺物実測図（２） …… 57
第43図　遺物実測図（３） …… 58
第44図　遺物実測図（４） …… 59
第45図　遺物実測図（５） …… 60
第46図　遺物実測図（６） …… 61
第47図　遺物実測図（７） …… 62
第48図　遺物実測図（８） …… 63
第49図　遺物実測図（９） …… 64
第50図　遺物実測図(10) …… 65
第51図　遺物実測図(11) …… 66
第52図　遺物実測図(12) …… 67
第53図　遺物実測図(13) …… 68
第54図　遺物実測図(14) …… 69
第55図　遺物実測図(15) …… 70
第56図　遺物実測図(16) …… 71

図　　版

巻頭図版１　第２次調査区遺構検出状況全景
　　ＳＧ３河川跡出土遺物
巻頭図版２　北側掘立柱建物跡群
　　ＳＤ302から出土した墨書土器
　　(底部)『福有南』

第２次調査

図版１　調査区設定概観ほか
図版２　ＳＧ３河川跡Ｔ２トレンチ深堀り作業状況ほか
図版３　ＳＤ２溝跡⑦ベルト断面ほか
図版４　ＳＤ２溝跡ＲＷ11(下駄)出土状況ほか
図版５　ＳＧ３河川跡土師器・木製品出土状況ほか
図版６　出土遺物(１)
図版７　出土遺物(２)
図版８　出土遺物(３)
図版９　出土遺物(４)
図版10　出土遺物(５)

第３次調査

図版11　調査区空中写真ほか
図版12　基本層序Ｄほか
図版13　ＳＧ３器台出土状況ほか
図版14　ＳＫ329土層断面ほか
図版15　ＳＤ302土層断面ほか
図版16　北側掘立柱建物跡群ほか
図版17　ＳＢ81検出状況ほか
図版18　ＳＥ11完掘状況ほか
図版19　ＳＤ４ａ－ａ′土層断面ほか
図版20　ＳＸ342ほか
図版21　出土遺物(１)
図版22　出土遺物(２)
図版23　出土遺物(３)
図版24　出土遺物(４)
図版25　出土遺物(５)
図版26　出土遺物(６)
図版27　出土遺物(７)
図版28　出土遺物(８)
図版29　出土遺物(９)
図版30　出土遺物(10)
図版31　出土遺物(11)
図版32　出土遺物(12)
図版33　出土遺物(13)
図版34　出土遺物(14)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

志戸田縄遺跡の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)の建設工事に伴って行われた。これにより、山形県教育委員会では、平成10年７月に工事予定区内の遺跡の所在や性格を調べる分布調査を実施した。溝状遺構が検出され、土師器の一括出土地点も認められた。その結果を受けて県埋蔵文化財センターが、記録保存する遺跡内の遺構数や深さなどを調べる予備調査(第１次調査)を行った。古墳時代の河川跡からは土師器片が多く出土し、奈良・平安時代の須恵器・赤焼土器片も数点見られた。また、路線内に設けられたトレンチからは河川跡・井戸跡・溝状遺構が検出された。トレンチ内の遺構検出の状況から遺跡範囲が北側と東側に広がった。

2　調査の概要

今回の発掘調査は、遺跡の南東部が工事区となるため平成10・11年度の２回に分けて行われた。

第２次調査は、北西側側道部分1,150㎡の調査を先行して実施した。期間は10月27日から11月27日までの実質22日間である。調査はまず、道路の路線図に基づいて調査区を設定して、次いで遺構・遺物の検出面までの深さを再確認するためのトレンチを入れた。その結果に基づいて重機械を用いて表土除去を行った。その後、調査を効率的に進めるため５ｍ×５ｍを一区画とするグリッドを道路予定のセンター杭を基準として設定し、基準杭とした。グリッド番号は、東西軸は西から東へ、南北軸は南から北へ、１から順にアラビア数字をあてた。次に、ジョレンで繰り返し表土を削る面整理を行い、周りとの土の違いを良く見ながら遺構を検出して、白線をマーキングした。遺構を埋めている土を観察するために、半分だけ掘ったり、帯状にベルトを設定して、移植篦などで注意深く掘り下げをする遺構精査をした。発見された遺構・遺物については、写真や図面などに記録した。遺物の取り上げは、グリッド単位で行い、遺構内出土の場合は遺構毎に番号を付した。11月26日に関係者のみの説明会を実施した。

第３次調査は、路線内に係る残りの本線・側道部分4,550㎡の調査を実施した。期間は４月19日から７月22日までの実質63日間である。グリッドは２次調査の基準杭を踏襲し、調査内容は２次調査と同様に実施した。当初調査面積4,000㎡の予定で重機械による表土除去並びにジョレンによる面整理を行ったが、北側から検出された溝状遺構が北に延びるために調査区北側550㎡について拡張した。その結果コの字状の区画溝が検出された。また調査区南西部において河川跡が検出され、南側残土置場とした部分を除いて数カ所のトレンチを設定して河川跡の流路確認を行った。その結果、南東部方向へ延びる流路を確認した。調査結果を踏まえて、７月19日に現地説明会を実施して、地元の方々の参加を多く得た。７月22日に現地の調査を終了した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

本遺跡は、山形市の北西部、馬見ヶ崎川の扇状地前縁部に位置している。東に奥羽脊梁山脈の一部の蔵王、龍山、雁戸山の山陵が連なり、馬見ヶ崎川水系が東から西に幾筋にも分かれて流れ、流路延長24㎞にも及ぶ。また、本遺跡から３㎞西に須川が南北に流れ流路沿いに自然堤防が形成されている。本遺跡周辺にも自然堤防状の微高地が見られ、遺跡の多くはこの微高地に立地している。遺跡の標高は、102mを測り、遺跡範囲は東西80m、南北200mにわたる。付近は水田の他、果樹、畑作、花木苗栽培に利用されている。検出された遺構の精査を行うと常時地下水がわき出て、昔から豊富な湧水に恵まれていた地域であることが分かる。「ドッコスイ」と呼ばれる井戸を掘っており、本調査でも最近まで使用された井戸跡が確認されている。昭和36年に実施された土地改良事業によって遺構面が削平されている箇所もあったが、多くは残存して、主に古墳時代前期の土師器や、奈良・平安時代の須恵器・赤焼土器、中世の陶磁器や木製品が出土した。また、地山層が灰黄褐色砂質シルトでややグライ化している。

2　歴史的環境

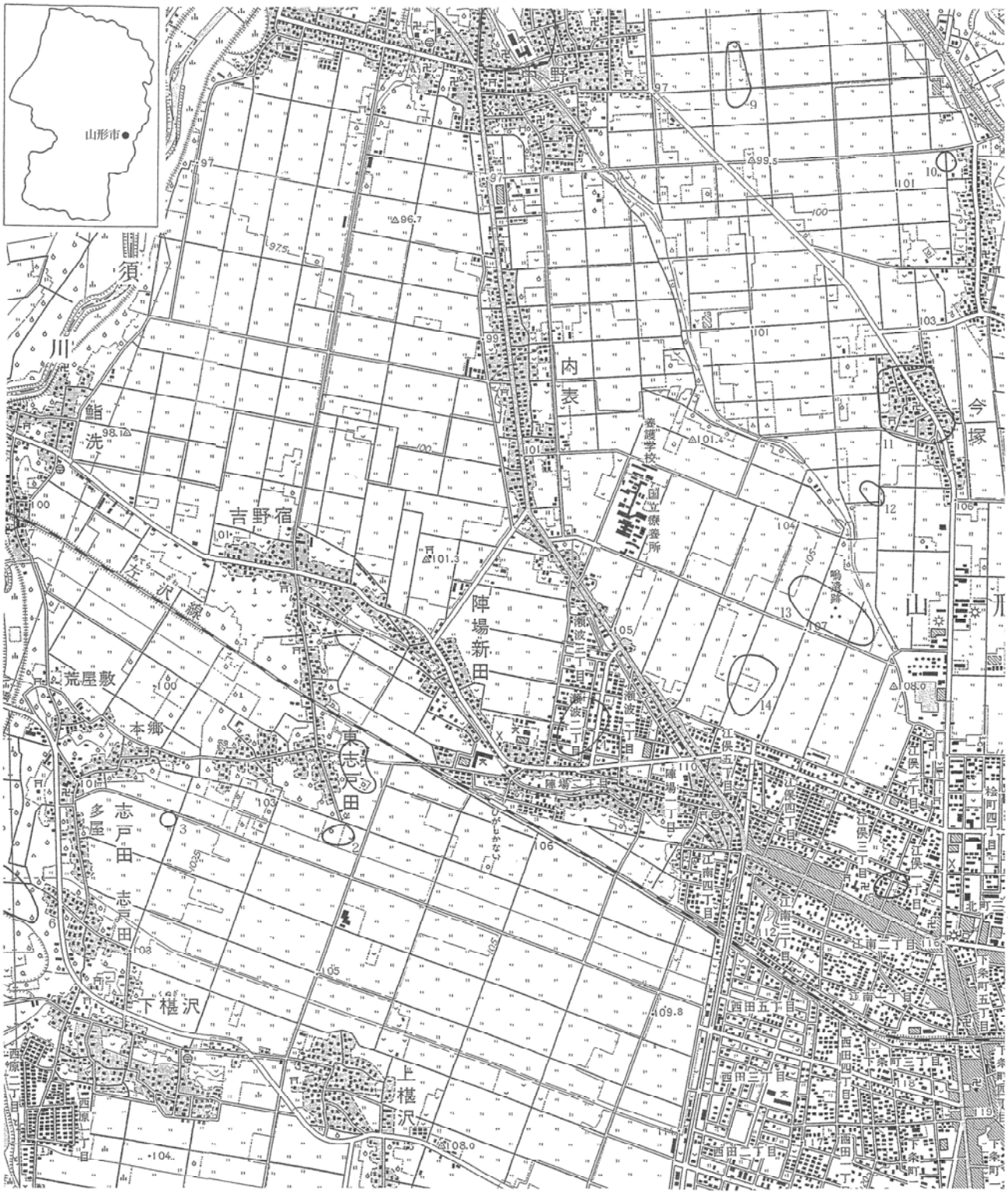
周辺の自然堤防上に多くの遺跡が立地しており、発掘調査の成果が年々集積している。

弥生時代の集落・墓域では、本遺跡の北東側2.5㎞離れて河原田遺跡があり、弥生時代の住居跡や６基の墓坑などが検出された。土師棺甕が１基、木棺墓もしくは木槨墓が５基確認され、壺や浅鉢、高坏などがまとまって出土した。

北東側2.6㎞から北北東側４㎞までで今塚遺跡や服部遺跡、藤治屋敷遺跡、馬洗場遺跡が位置しており、古墳時代前期の良好な遺構・遺物が確認されている。今塚遺跡では、塩釜式の土師器が出土している竪穴住居跡30棟が検出された。藤治屋敷遺跡では、ＳＧ213から古墳時代前期の土師器と共伴する木製品が多数出土し、二又鋤などの農耕具が出土している。馬洗場Ｂ遺跡では、日本海側最北の内行花文鏡(破鏡)が出土しており、その他４世紀前半代の土師器が出土している。また、東側２㎞離れて国指定史跡嶋遺跡があり古墳時代後期の倉庫跡や住居跡などが確認され農耕遺跡として知られている。本遺跡西側・南側には、古墳時代後期の去手路古墳群や栗囲式の土器が出土している塚田遺跡が位置する。当時周辺では、古墳時代全体を通じて集落が点在していたと思われる。

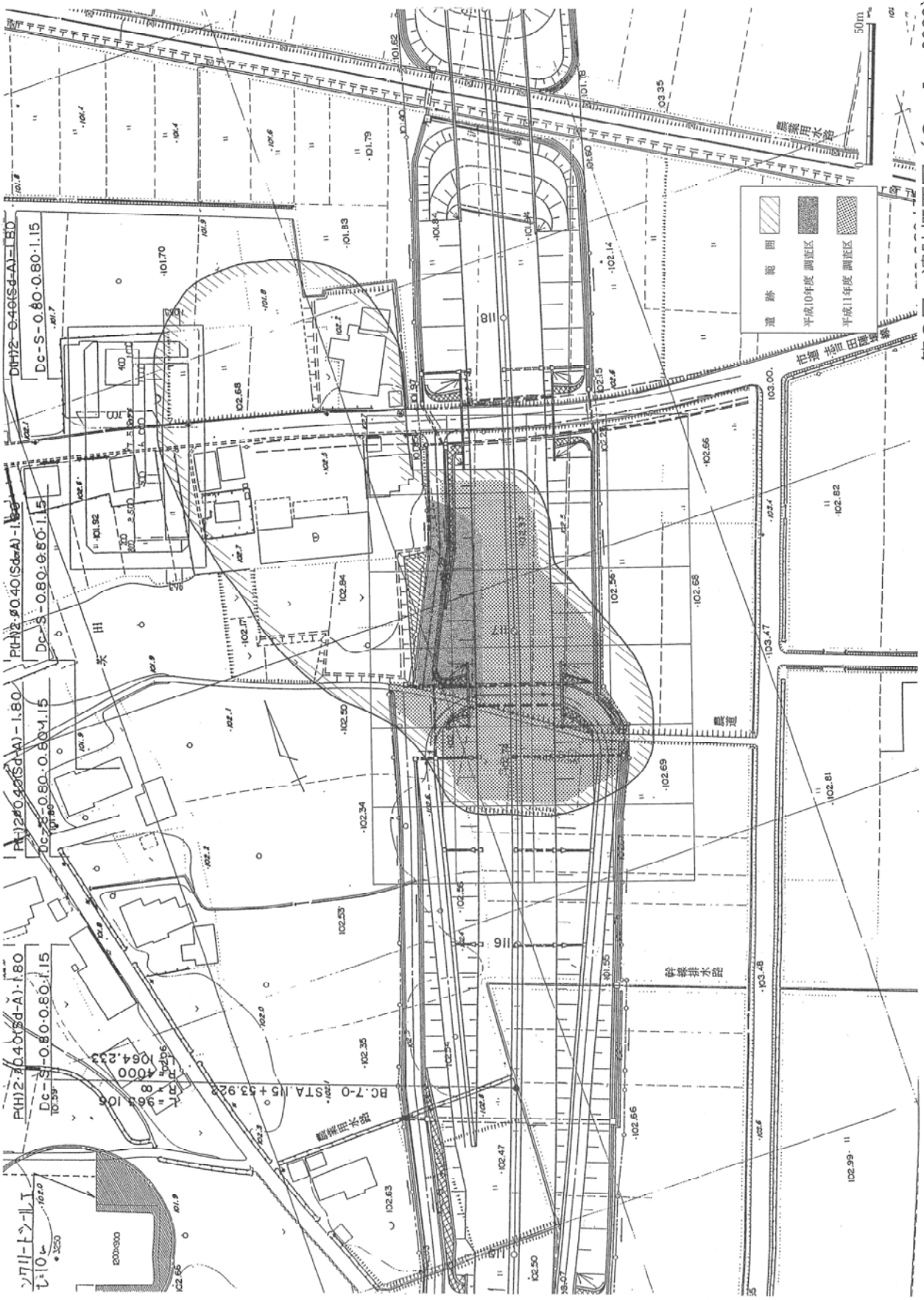
奈良・平安時代では、前述した今塚遺跡で本遺跡と同時期の９世紀代の土器が出土する遺構が確認されている。溝跡から「『□為』仁寿参年六月三日」と表記された木簡が出土している。仁寿３年は西暦853年で土器の編年代と一致する。

また、本遺跡周辺には椹沢楯、飯塚楯、椹沢楯ノ内遺跡などの中世城館跡がある。中近世を通して交通の要所で周辺に「宿」の付く地名がある。また、本調査で確認された区画溝などの痕跡を昭和初期の字限図で確認したが見あたらなかった。

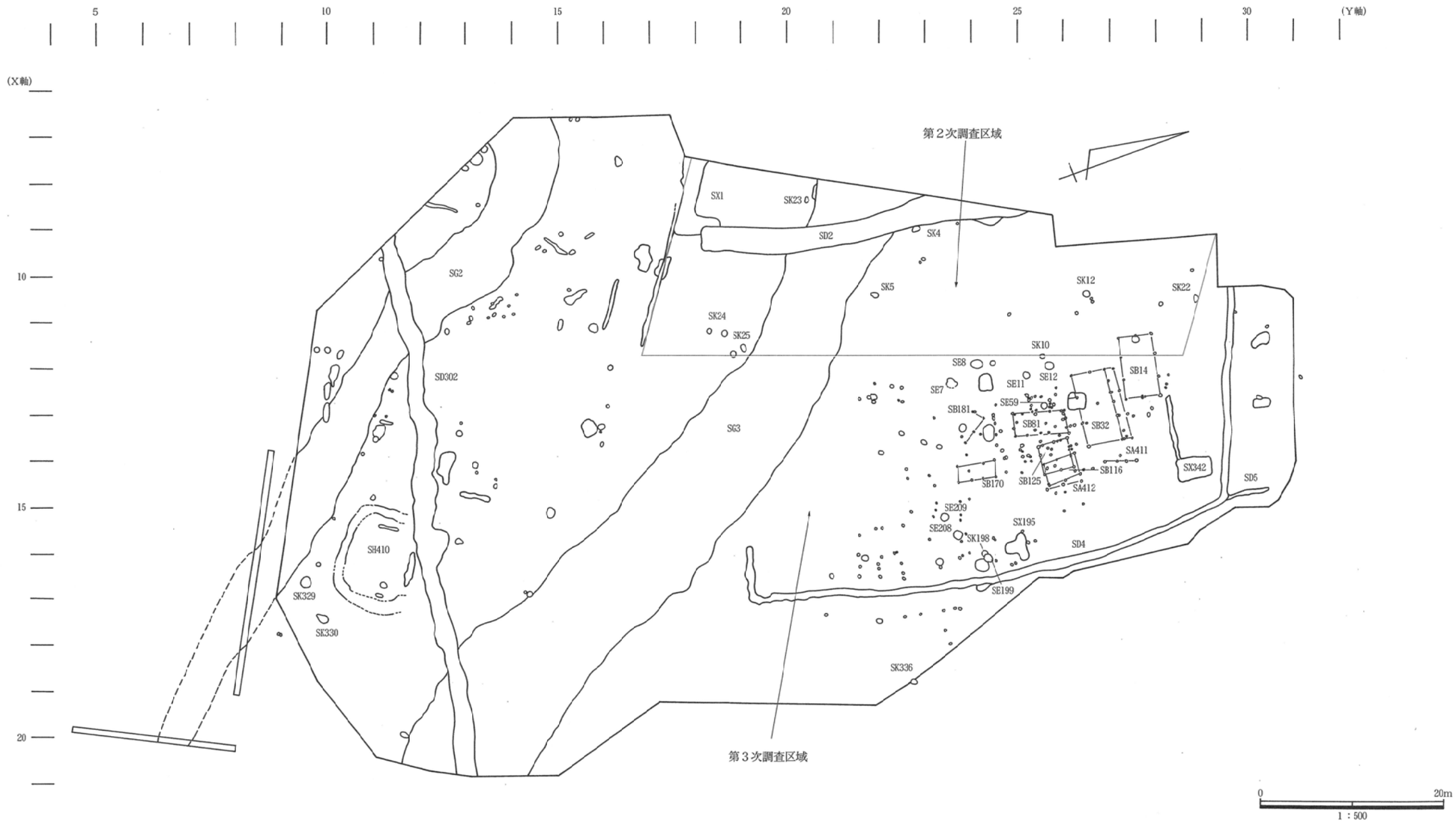


1　志戸田縄遺跡　2　塚田遺跡　3　志戸田遺跡　4　陣場遺跡　5　江俣遺跡　6　堪沢楯ノ内遺跡
7　去手路古墳群　8　中野館遺跡　9　服部遺跡　10　見崎遺跡　11　今塚遺跡　12　河原田遺跡
13　嶋遺跡（国指定史跡）　14　梅野木前２遺跡

第１図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「山形北部」を使用）

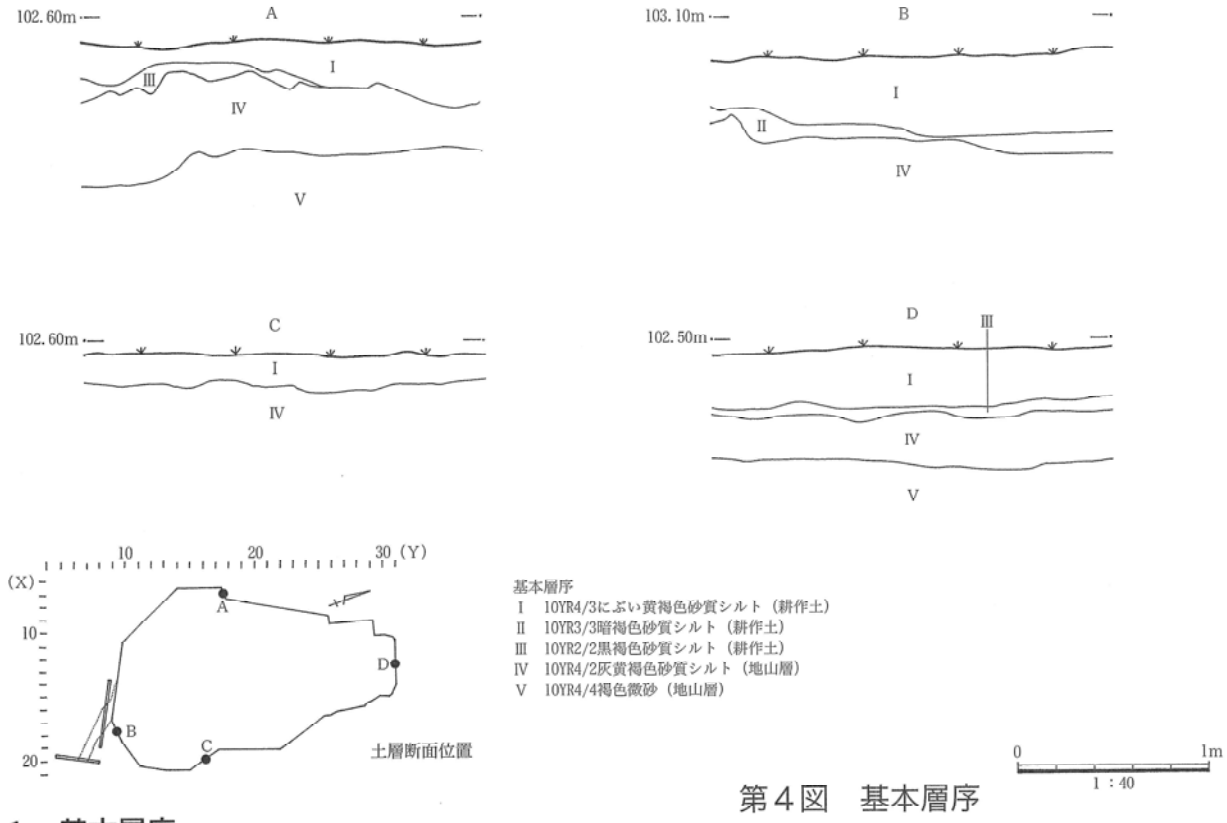


第2図 遺跡概要図（S＝1：2000）


5
10
15
20
25
30
(Y軸)
(X軸)
10
15
20
第２次調査区域
第３次調査区域
SX1
SK23
SD2
SK4
SK5
SK12
SK22
SG2
SK24
SK25
SK10
SD302
SE8
SE7
SE11
SE12
SB14
SE59
SB181
SB81
SB32
SG3
SA411
SB116
SX342
SD5
SB170
SB125
SA412
SE209
SE208
SX195
SK198
SD4
SE199
SH410
SK329
SE330
SK336
0
20m
1：500

第３図　遺構配置図

Ⅲ　遺跡の概観



第４図　基本層序

１　基本層序

基本層序は、１層目がにぶい黄褐色砂質シルトの耕作土、２層目が暗褐色砂質シルトもしくは黒褐色砂質シルトの耕作土である。３層目が灰黄褐色砂質シルトのややグライ化した地山層で、その下層に褐色微砂が広がる。表土下層に黒褐色の遺物包含層が入る所もある。古墳時代の土師器が出土する。

２　遺構と遺物の分布

調査で検出された主な遺構は、掘立柱建物跡７棟、柵列跡２基、井戸跡８基、河川跡２条、溝状遺構29条、墳墓１基、土坑30基、その他多数の性格不明遺構やピットが検出されている。これらの遺構は、古墳時代・平安時代・中世に大別される。古墳時代は、南側に河川跡が検出され、塩釜式段階の土師器が多数出土している。特に中央部を東西に貫流するＳＧ３において、やや西側に偏って土器出土量が多い。今回の調査では路線内の調査に限られているが、北西方向に遺跡範囲が広がるものと思われ、集落が西側に展開することが予想される。

平安時代の遺構は、ＳＤ302のみである。オリーブ褐色微砂の覆土中に９世紀代の須恵器・赤焼土器が出土している。「㊤」と墨書された須恵器坏が出土している。なお、今塚遺跡においても４点の「王」と書かれた須恵器が出土している。

中世は、本遺跡の大半を占めており、掘立柱建物跡を中心として、コの字に区画する溝を巡らした屋敷跡と推測される。また区画溝から多数の塔婆などの木製品と12世紀後半代の内面に劃花文のある青磁碗破片が出土している。その他、屋敷に付設された深さ１ｍ内外の井戸跡が検出された。

Ⅳ　第２次調査

１　検出された遺構

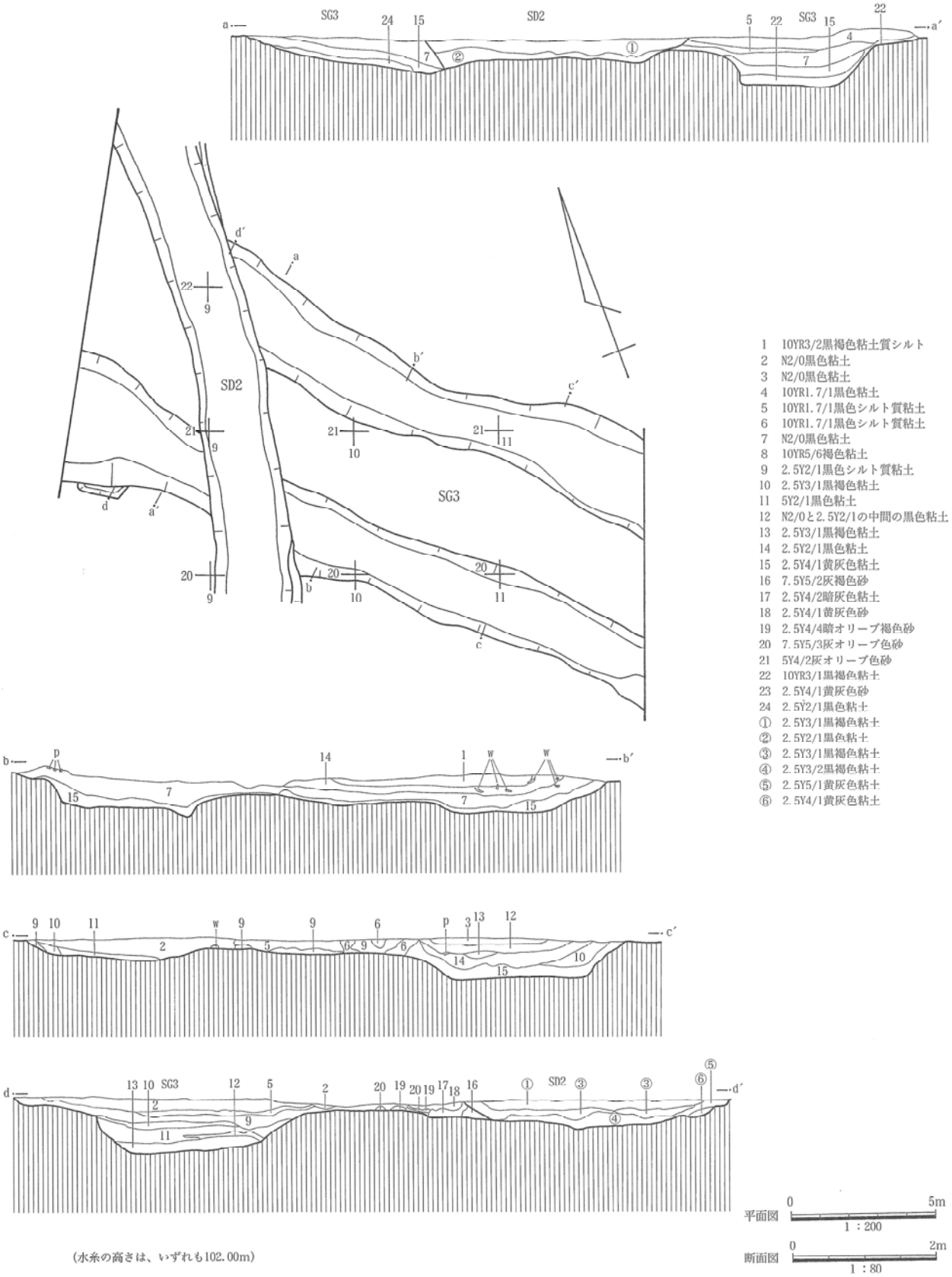
ＳＧ３(遺構：第５・６図、遺物：11―1～15―38)

12―21～９―23Ｇで検出された。西側をＳＤ２から南北に切られ、上層はほ場整備のために削平を受けている。調査区南側で検出され、東西に貫流する河川跡である。幅７～９ｍ、現存長21ｍで深さ60㎝を測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、中央部が盛り上がり中州状になっている。底面直上に植物の腐植物と河床礫が多量に確認された。覆土上層は黒色ないし黒褐色土で粘性が強い。中層に黄色系の砂層を挟んでいる。下層は灰白色の砂粒の混入している黒褐色粘土が堆積している。覆土中にも腐植性の未分解有機物が混じっている。

遺物の大半が古墳時代の古式土師器で、登録遺物は11点である。古式土師器が662点、須恵器７点、赤焼土器３点、近世陶器５点、棒状や部材と見られる不明木製品５点が出土している。遺物は１・２層目で多く出土され、古式土師器の器種は坏・器台・壺・甕がある。特に器台が４点出土して、外面ミガキ調整を行い、赤彩を施している。口唇部が外反し(11－7)脚部に透孔(11―９・10)を穿っている。また、小型または中型の壺があり、体部中位から外反する器形で口頸部が長いもの(11－14)や体部上位から屈曲するもの(12―17)がある。大型で口縁部が複合状になるもの(13―24)もある。甕の大方の器形は体部が球胴形で胴張りのもので、やや体部が膨らむものもある。土器様式の層位間の違いが余り認められず、時期差の無い廃棄と考えられる。土器様相は、器台の円孔の有無や小型化になる点や壺の体部が球胴形から扁平に変化する点から辻編年のⅢ－３～４(辻 1995)に該当すると思われる。なお、１層目の黒色粘土層より上層に黄色褐色微砂が残存する所があり、近世(18世紀後半)の国産陶磁器小片が確認されている。３次調査でＳＧ３上層の調査で出土した近世の農具(エボリ)との関連で、当地区の近世灌漑地業に係わるものと思われる。

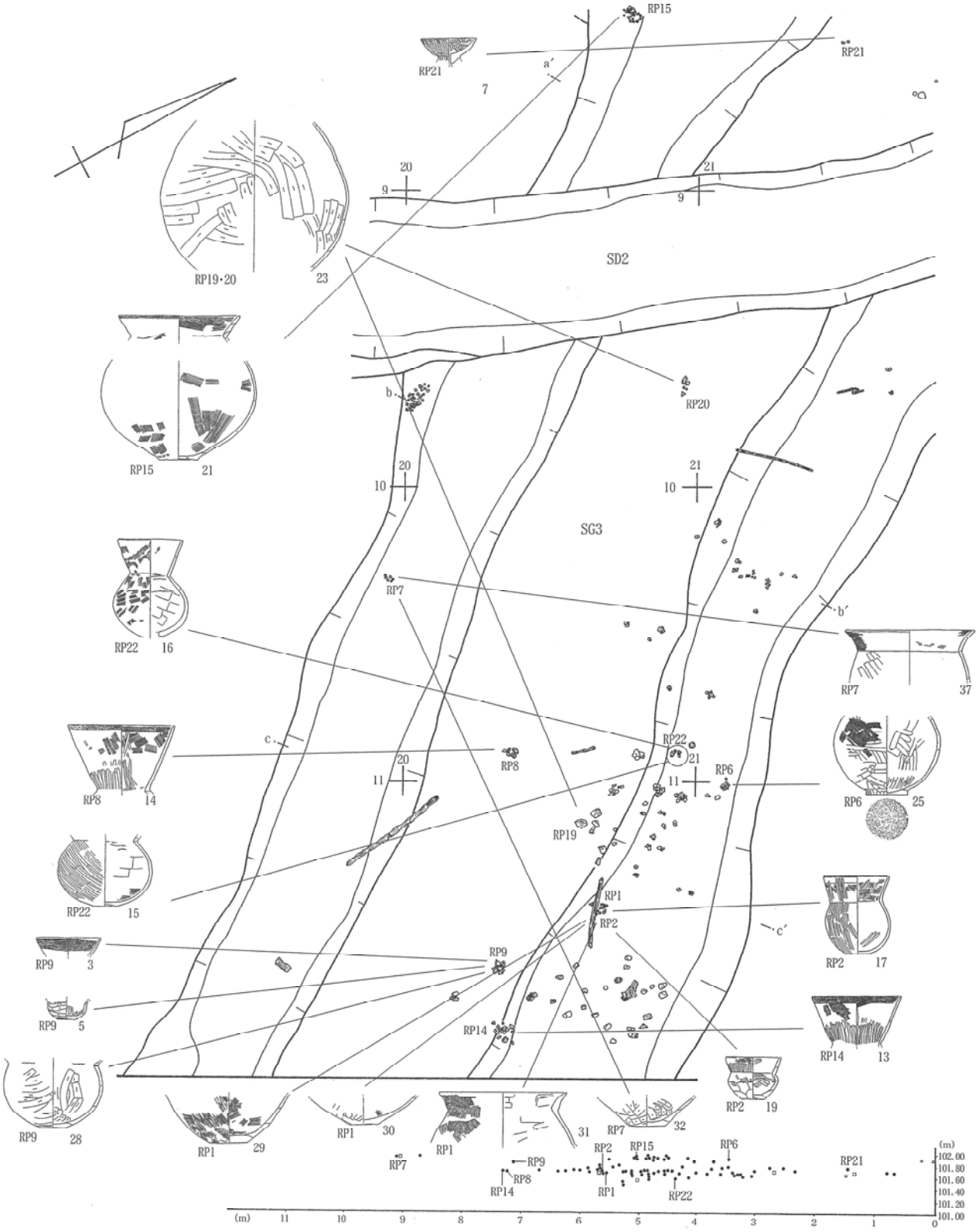
ＳＤ２(遺構：第11・12図、遺物：15―39～18―54)

９－24～10―19Ｇで検出された。調査区の設定で北西部が未調査である。南側でＳＧ３を切る。南北に直線的に延びる溝跡である。幅2.2～3.3ｍで、現存長で36ｍ、深さ40㎝を測る。壁の立ち上がりがやや緩やかで、底面はほぼ平坦である。覆土上層は、黒褐色粘土ないしシルト質粘土で泥炭層である。下層は黄灰色土ないし灰色粘土である。主体となる遺物は下駄などの木製品･刀子のような金属製品である。流れ込みと思われる磨石１点や古式土師器30点、須恵器２点の他、石鉢１点や漆器１点、下駄７点、刀子１点が出土している。遺構が北西部に延びていることから、３次調査で検出されたＳＤ４と同一遺構の可能性がある。漆器は漆器皿(16―46)１点のみで、内外面に黒色漆が塗られている。出土した下駄は、すべて差歯下駄である。使用した際の指圧痕が、明確に残っている。(16―47)歯部、(16―48)台後部のみの資料に炭化している部位があり、若干の被熱を認める。先端部が欠損している刀子と組になるような刀鞘が３次調査ＳＤ４で出土している。



（水糸の高さは、いずれも102.00m）

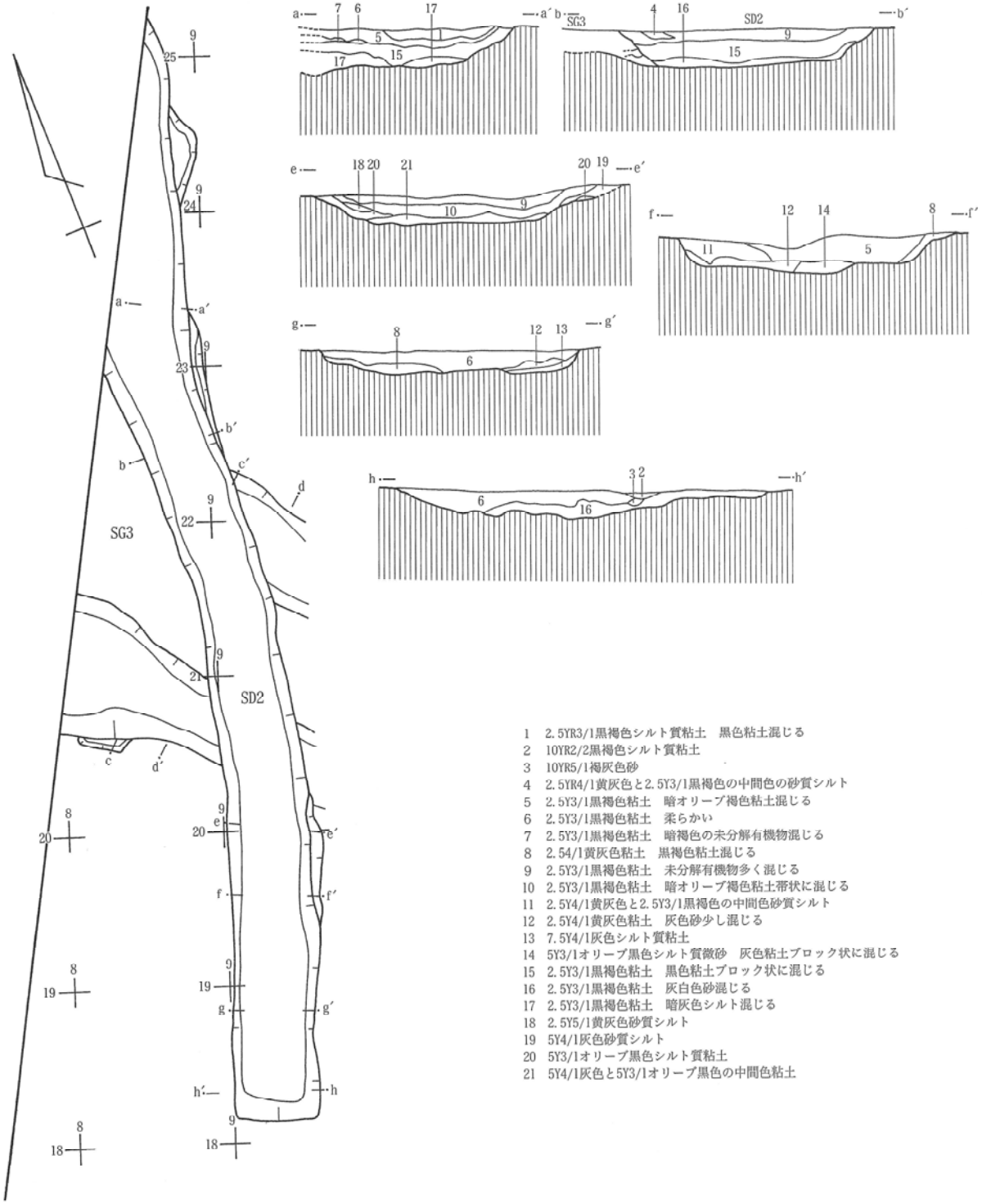
第５図　ＳＧ３河川跡



出土遺物垂直分布（・：P、□：W、△：S）

0　5m
1：100

第６図　ＳＧ３河川跡遺物出土状況



1　2.5YR3/1黒褐色シルト質粘土　黒色粘土混じる
2　10YR2/2黒褐色シルト質粘土
3　10YR5/1褐灰色砂
4　2.5YR4/1黄灰色と2.5Y3/1黒褐色の中間色の砂質シルト
5　2.5Y3/1黒褐色粘土　暗オリーブ褐色粘土混じる
6　2.5Y3/1黒褐色粘土　柔らかい
7　2.5Y3/1黒褐色粘土　暗褐色の未分解有機物混じる
8　2.54/1黄灰色粘土　黒褐色粘土混じる
9　2.5Y3/1黒褐色粘土　未分解有機物多く混じる
10　2.5Y3/1黒褐色粘土　暗オリーブ褐色粘土帯状に混じる
11　2.5Y4/1黄灰色と2.5Y3/1黒褐色の中間色砂質シルト
12　2.5Y4/1黄灰色粘土　灰色砂少し混じる
13　7.5Y4/1灰色シルト質粘土
14　5Y3/1オリーブ黒色シルト質微砂　灰色粘土ブロック状に混じる
15　2.5Y3/1黒褐色粘土　黒色粘土ブロック状に混じる
16　2.5Y3/1黒褐色粘土　灰白色砂混じる
17　2.5Y3/1黒褐色粘土　暗灰色シルト混じる
18　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
19　5Y4/1灰色砂質シルト
20　5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土
21　5Y4/1灰色と5Y3/1オリーブ黒色の中間色粘土

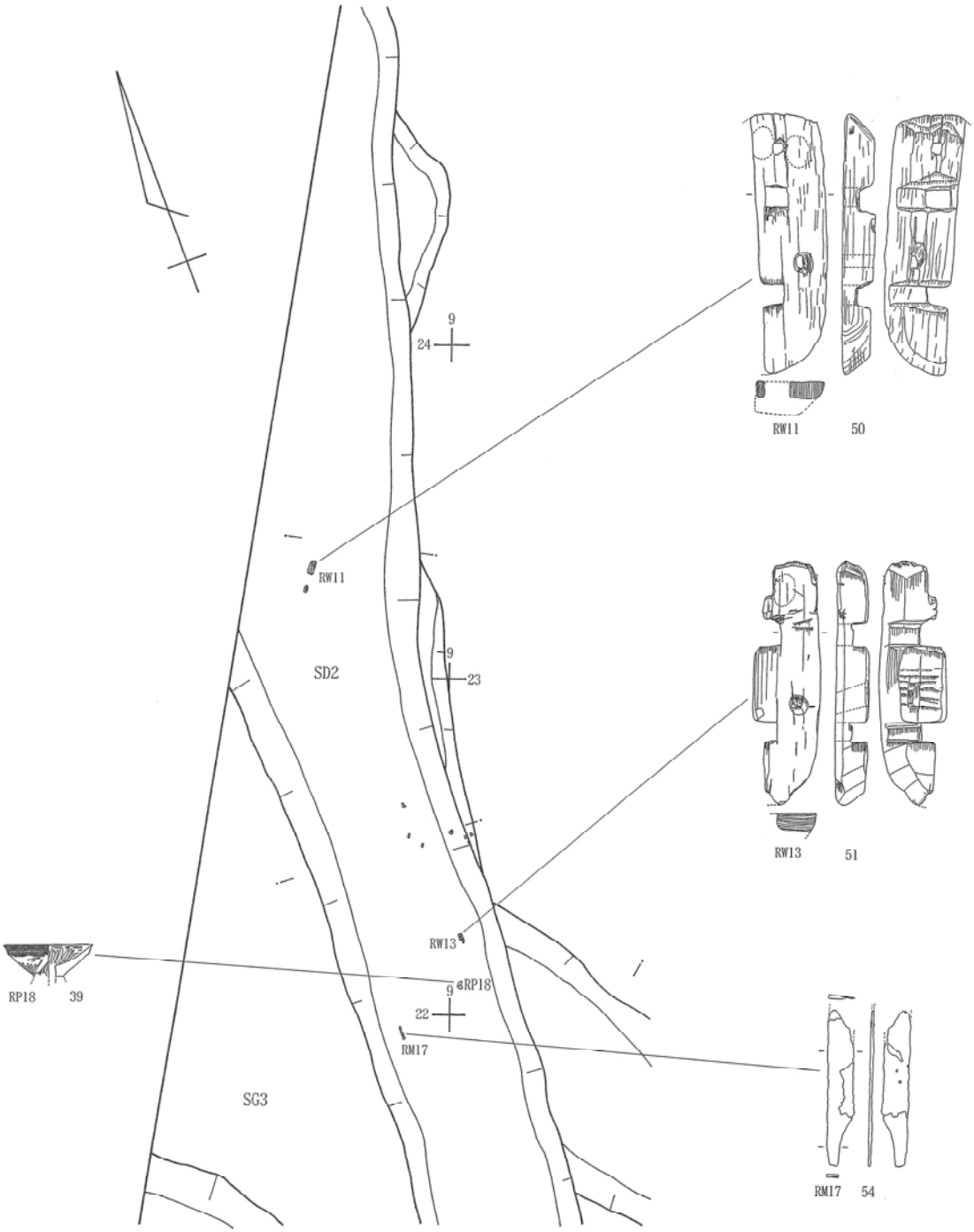
※ｃ－ｃ′、ｄ－ｄ′断面図は、それぞれ、第５図の
　ｄ－ｄ′、ａ－ａ′断面図に対応する。

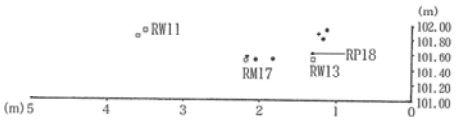
（水糸の高さは、いずれも102.10m）

平面図　0　5m　1：200

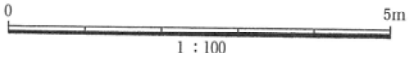
断面図　0　1m　1：60

第７図　ＳＤ２溝跡





出土遺物垂直分布（・：P、□：W、○：M）



第８図　ＳＤ２溝跡遺物出土状況

ＳＫ４(遺構：第９図)

10―23Ｇで検出された。平面形はやや東側に張り出す楕円形で、長径102cmで短径58cm、深さ7cmと浅い掘り込みで底面がやや窪む。覆土は黒色ないし黒褐色粘土である。出土遺物は古式土師器小破片14点である。

ＳＫ５(遺構：第９図、遺物：19―55～57)

11―22Ｇで検出された。平面形は不整形である。長径81cmで短径67cm、深さ38cmを測る。断面形が下層でやや膨らむフラスコ状を呈する。覆土上層は暗褐色粘土質シルトで下層は黒色粘土質シルトである。出土遺物は、古式土師器16点である。上層包含層で古式土師器が散乱している。

ＳＫ10(遺構：第９図)

12―26Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径60cmで短径50cm、深さ25cmを測る。断面形はレンズ状で、覆土は黒色粘土で黒褐色砂質土がブロック状に混じる。

ＳＫ12(遺構：第９図)

11―27Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径82cmで短径75cm、深さ20cmを測る。擂鉢状に掘り込まれ、立ち上がりがやや緩やかである。覆土上層は、黒色粘土を基調とし、下層は黒褐色土を基調とする。

ＳＫ22(遺構：第10図)

11―29Ｇで検出された。平面形は、西側がやや張り出す不整方形である。長径88cmで短径40cm、深さ8cmを測る。浅い掘り込みで、底面で若干の起伏がある。覆土は、単層で黒色粘土を基調とする。

ＳＫ23(遺構：第10図)

９―21Ｇで検出された。平面形は、南東側に張り出した不整方形を呈する。長径53cmで短径42cm、深さ14cmを測る。南東側が緩やかに立ち上がり、やや北西側に底面が窪む。覆土は、黒色粘土を基調とする。

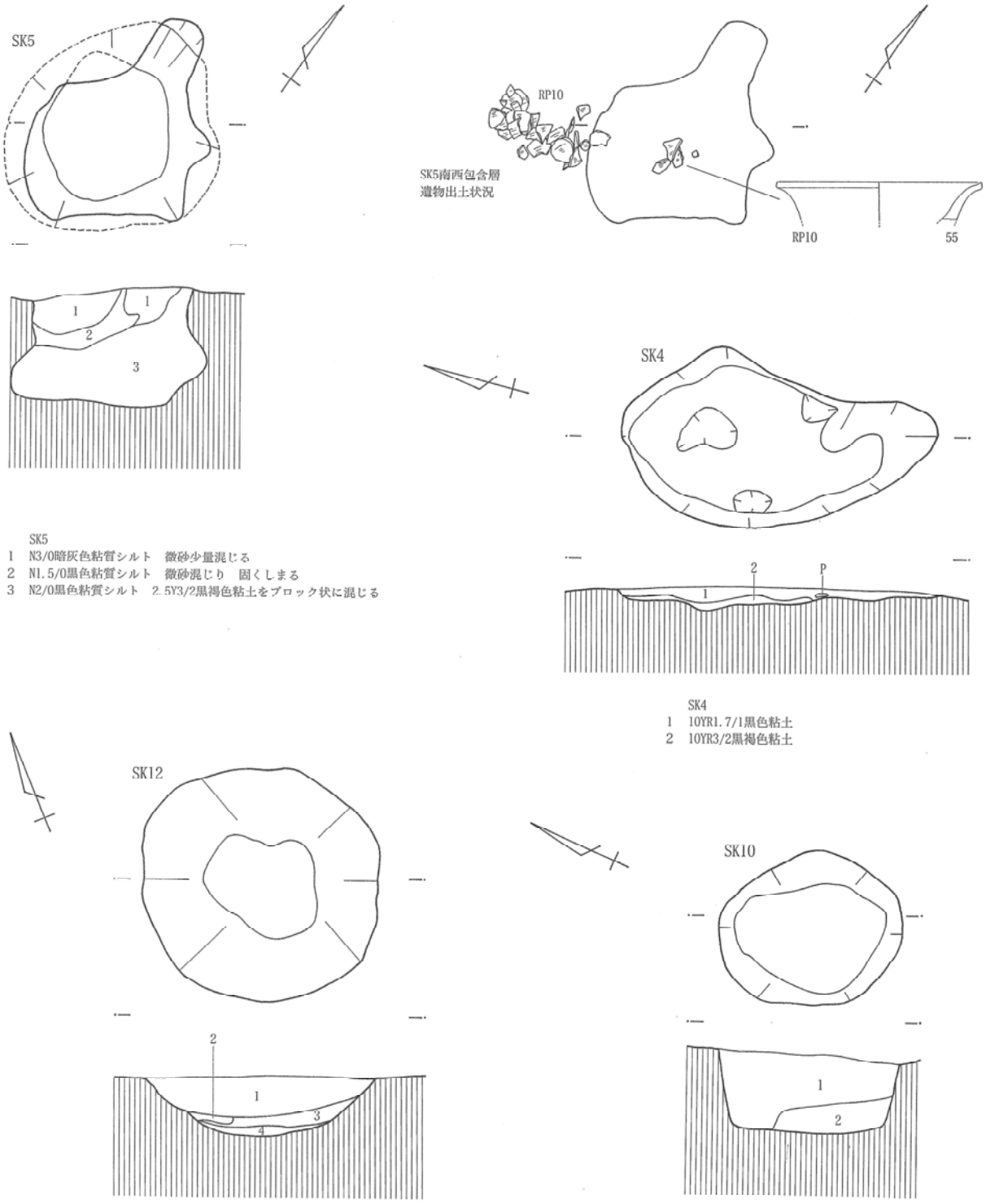
ＳＫ24(遺構：第10図)

12―19Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径72cmで短径52cm、深さ18cmを測る。壁の立ち上がりが緩やかで、底面に起伏がある。覆土は、黒褐色砂質粘土を基調とする。

ＳＫ25(遺構：第10図)

12―20Ｇで検出された。平面形は、東西にやや長い楕円形である。長径82cmで短径55cm、深さ14cmを測る。壁の立ち上がりが緩やかで、西側底面に窪みがある。覆土は、上層が黒色粘土で、下層が黒褐色砂質シルトを基調とする。

なお、ＳＫ17については、３次調査で全容が判明したＳＢ14に関連する施設と思われ、遺物以外は３次調査の中で言及した。また、遺物も上層からで少なく、磨石や多条の擂鉢で積極的に土坑の時期決定に係るとは思えず、掘立柱建物跡との関連は、若干の検討を要する。



SK5
1　N3/0暗灰色粘質シルト　微砂少量混じる
2　N1.5/0黒色粘質シルト　微砂混じり　固くしまる
3　N2/0黒色粘質シルト　2.5Y3/2黒褐色粘土をブロック状に混じる

SK4
1　10YR1.7/1黒色粘土
2　10YR3/2黒褐色粘土

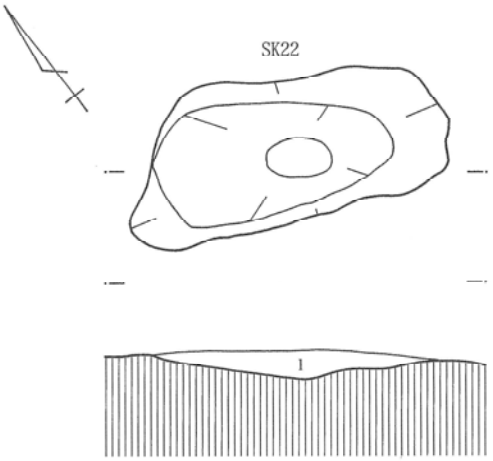
SK12
1　7.5YR1.7/1黒色粘土
2　7/5YR1.7/1黒色粘土　10YR3/1黒褐色粘土ブロック状に10%混じる
3　2.5YR3/2黒褐色砂質シルト
4　10YR3/1黒褐色粘土　微砂少量混じる

SK10
1　7.5YR1.7/1黒色粘土　2.5Y3/2黒褐色砂質粘土ブロック状に30%混じる
2　10YR1.7/1黒色粘土

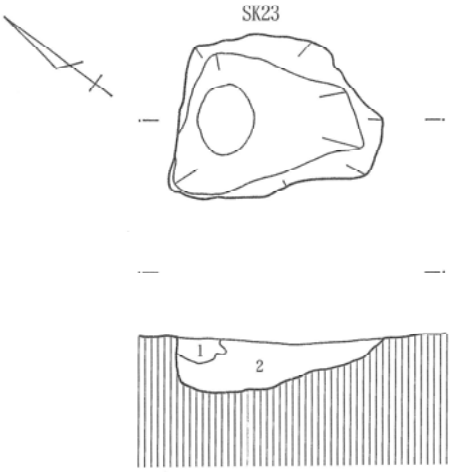
（水糸の高さは、いずれも102.10m）

0　1m
1：20

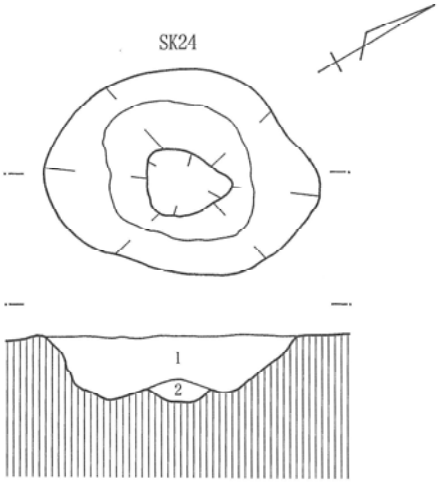
第９図　ＳＫ４・５・10・12土坑



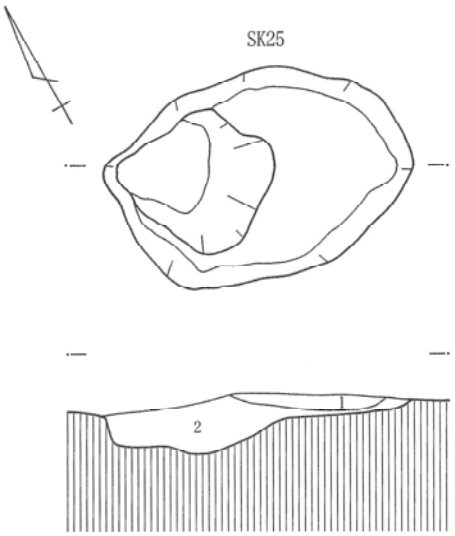
SK22
1　7.5YR1.7/1黒色粘土



SK23
1　10YR2/1黒色粘土
2　10YR2/1黒色粘土　10YR3/1黒褐色粘土３％混じる

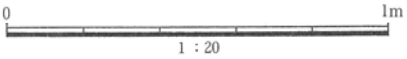


SK24
1　10YR3/1黒褐色粘土　10YR2/1黒色粘土ブロック状に１％混じる
2　2.5Y3/1黒褐色砂質粘土　10YR2/1黒色粘土ブロック状に３％混じる



SK25
1　2.5Y2/1黒色粘土　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト20％混じる
2　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト　2.5Y2/1黒色粘土30％混じる

(水糸の高さは、いずれも102.10m)



第10図　ＳＫ22・23・24・25土坑

２　出土した遺物

ここでは、２次調査で出土した主な遺物について概略していく。なお、詳細な点については、「第２次調査出土遺物観察表」に記載している。

ＳＧ３(遺物：11―１～15―38)

古式土師器坏については、体部上位で口縁部が屈曲するもの(11―１)、やや膨らむ体部に短い口縁部が付くもの(11―２)、手づくねで体部が直線的に延びる器形(11―４)や内弯する器形(11―５)がある。なお、外反する口縁部のみのもの(11―３)もある。器台は、受部のみで口唇部が直線的に立つもの(11―７)、３方に透孔があり、丁寧なミガキ調整があるもの(11―９・10)がある。高坏は、坏部のみのもので、体部下位で弱く屈曲する器形がある(11―６)。壺は、口頸部が長く、球形の体部が付く器形(11―13・14・15・16)、中型で口頸部が短く、縦長な体部が付く器形(11―11・12・17)がある。また、大型でやや外反する複合口縁をもつ器形(13―24)、大型で縦長な体部をもつもの(13―23)がある。また、小型の半球形に近い体部をもち、口縁部がやや外反する鉢(12―19)、頸部がやや狭く、なで肩の器形(12―20)がある。甕は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(12―21)、口縁部がやや直立し、体部中位が胴張りのもの(12―18・14―34・35)、口縁部が外反し、なで肩のもの(12―22・15―37)、体部上半に最大径のあるもの(13―28)がある。他にやや内弯する体部をもつ須恵器坏(15―38)、直立する体部をもつ赤焼土器鉢(15―41)がある。

ＳＤ２(遺物：15―39～18―54)

古式土師器の器台受部で口唇部が鋭いもの(15―39)、須恵器で甕の口唇部が上方につまみ出すもの(15―40)や体部で外面タタキ・内面アテ痕調整を施すもの(15―42)、やや扁平な磨石(15―43)がある。以上は出土状況から流れ込みと思われる。２面に使用痕がありノミ状工具の研磨痕がある砥石(15―44)や直行する体部をもつ石鉢(15―45)がある。漆器は成形がロクロ挽きで黒色漆で全面を塗っている漆器皿(16―46)一点のみである。(16―47～18―53)は差歯下駄である。歯部(16―47)、台後部(16―48)の一部に被熱した箇所がある。

その他歯部が欠損しているが、ほぼ同じ形態をしている。すべて露卯である。平面形態は前台部が方形で台後部がやや尖った半円形を呈する。円形の緒穴を斜めまたは直線的に穿たれている(16―49～18―53)。先端部の欠損した刀子の刀身(18―54)がある。

ＳＫ５(遺物：19―55～57)

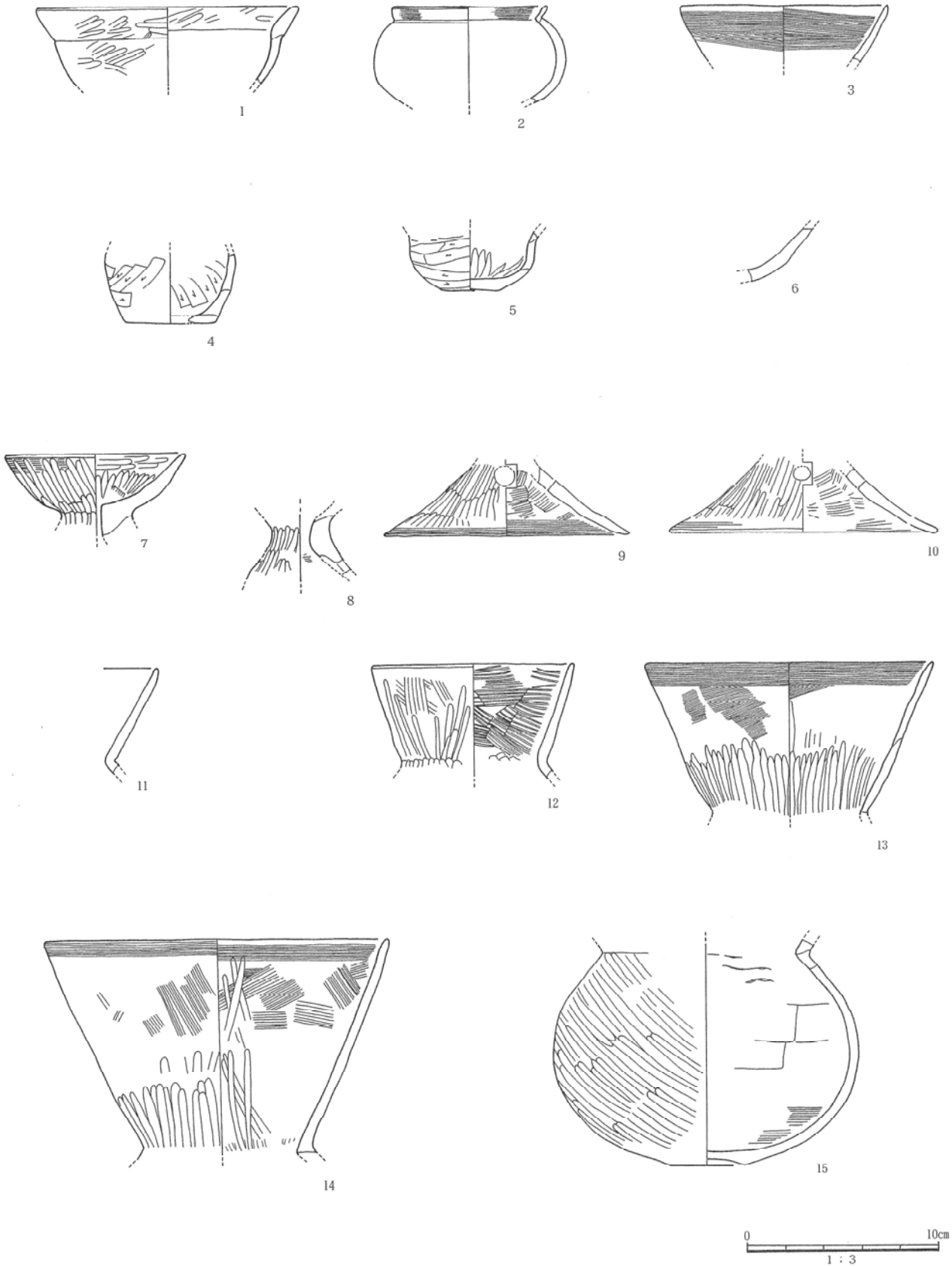
古式土師器壺で口縁部が外反するもの(19―55)、甕で短い口縁部がやや直立するもの(19―55)や口縁部が直立した後外反するもの(19―57)がある。

ＳＫ17(遺物：19―58・59)

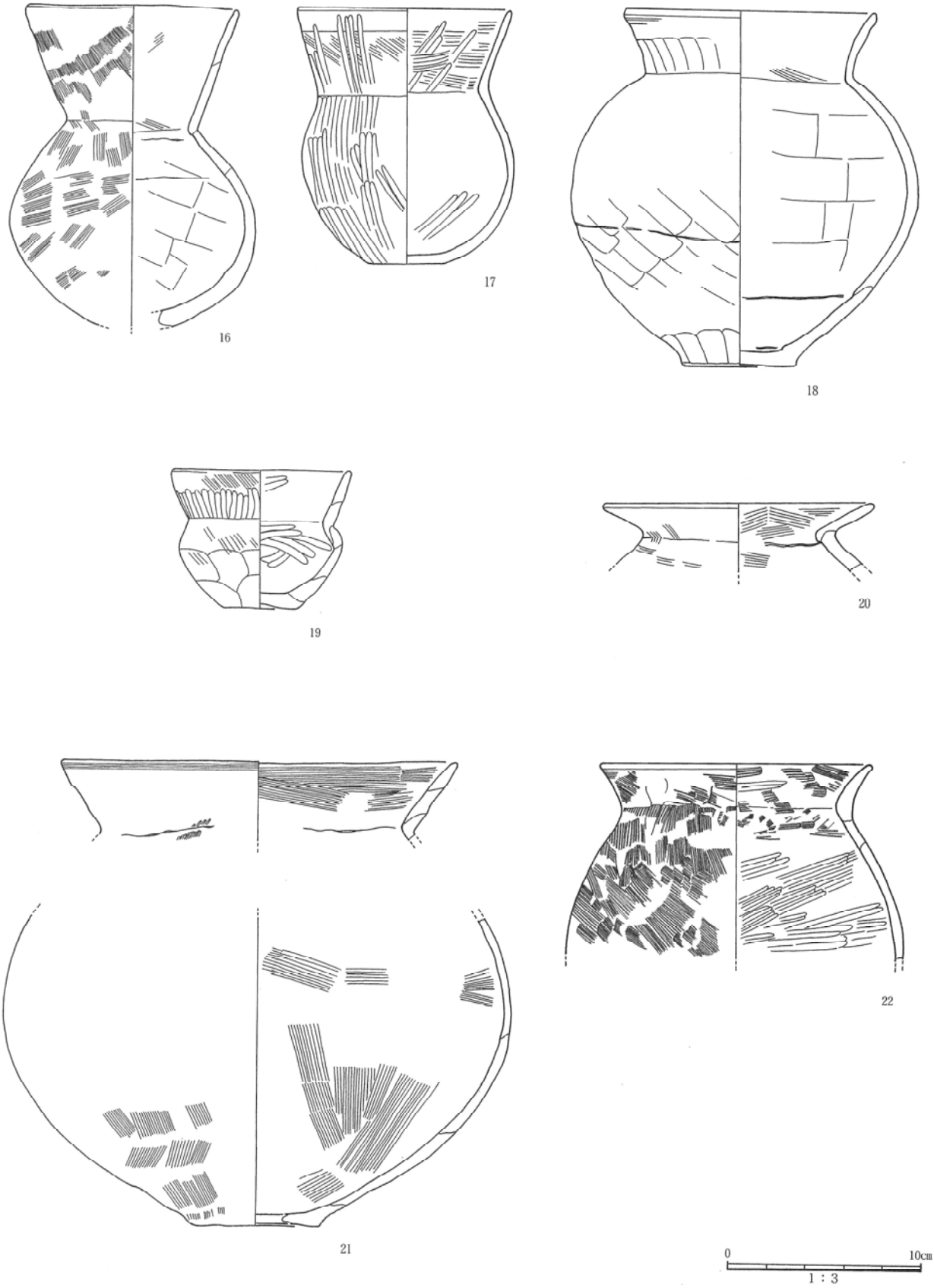
細かい卸目を刻んでいる擂鉢底部から体部までの破片(19―58)や流れ込みで磨石(19―59)が出土している。

グリッド(遺物：19―60～65)

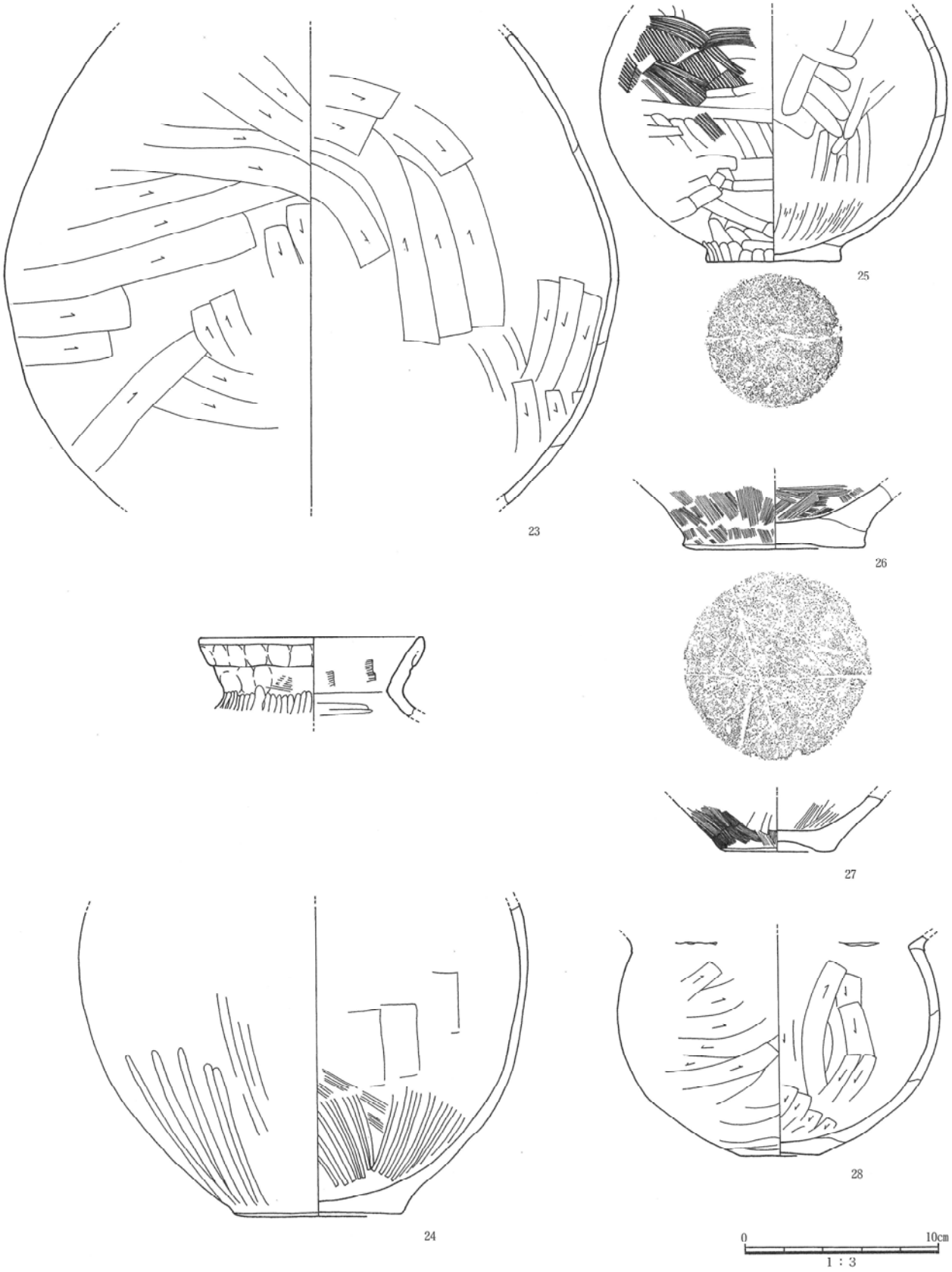
土師器は、体部上位で屈曲する坏(19―60)、透孔が認められない器台脚部(19―62)、頸部に突帯を巡らしている壺(19―63)、外反する口縁部をもつ甕(19―64・65)がある。



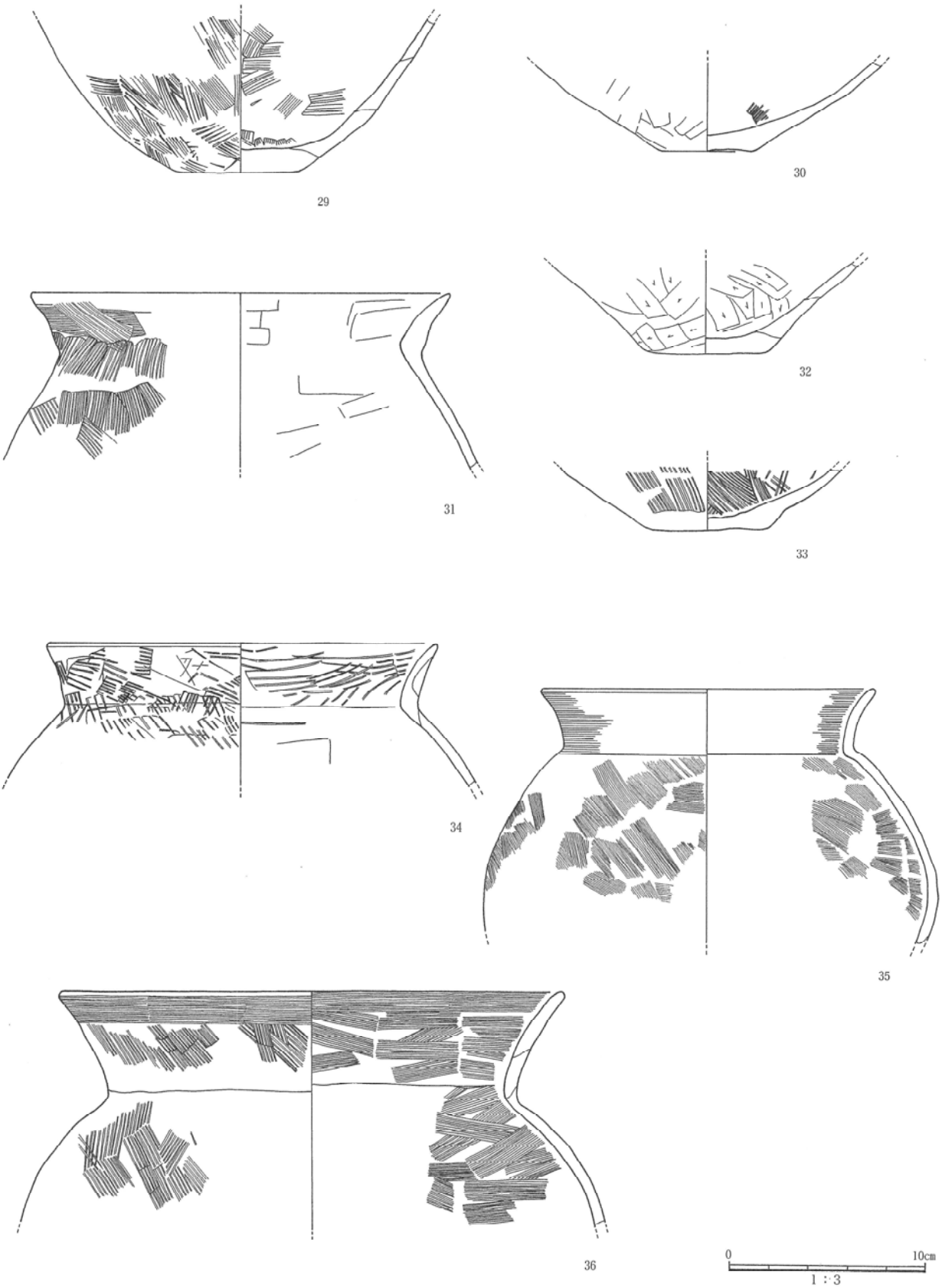
第11図　遺物実測図（１）



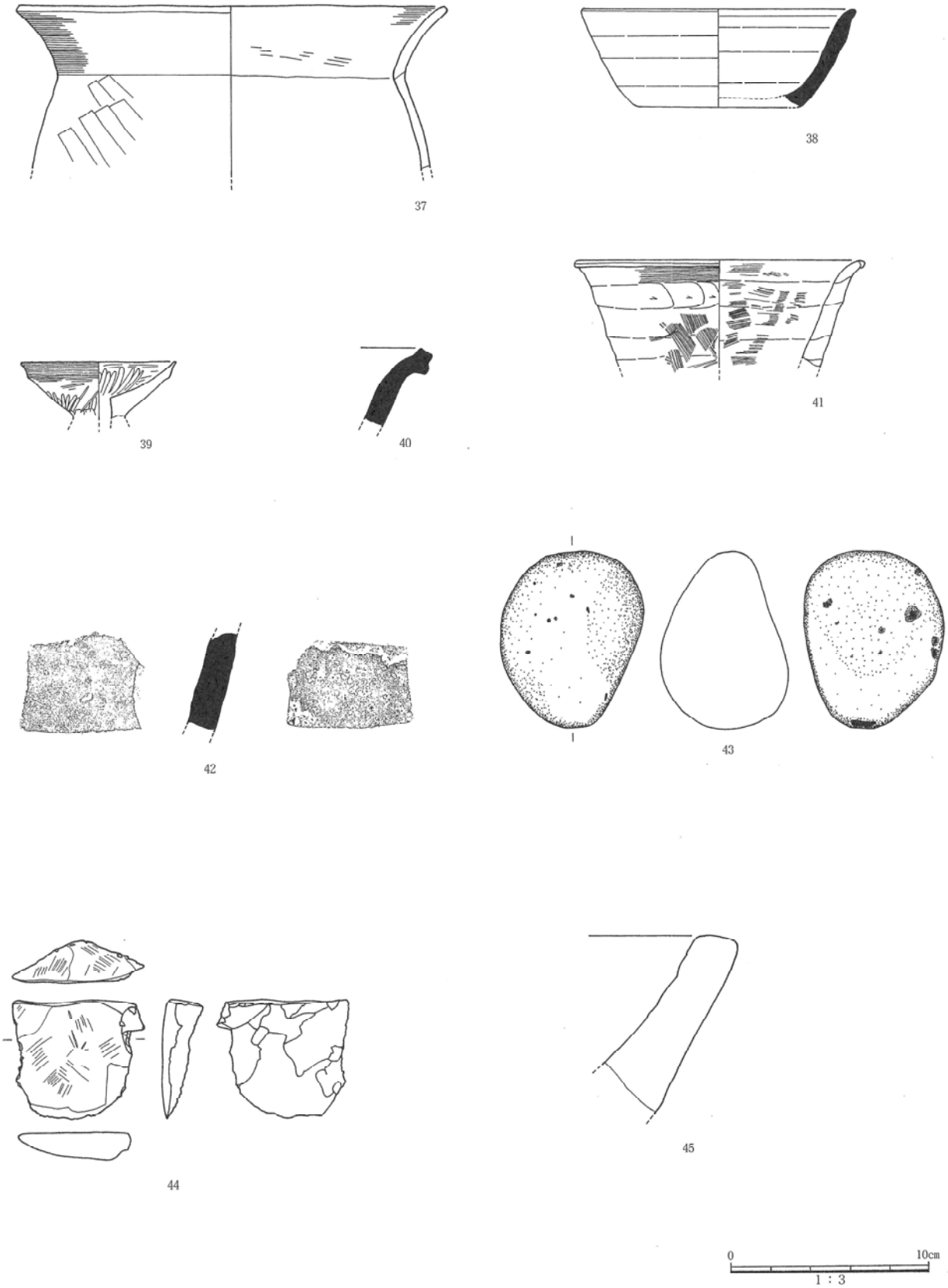
第12図　遺物実測図（２）



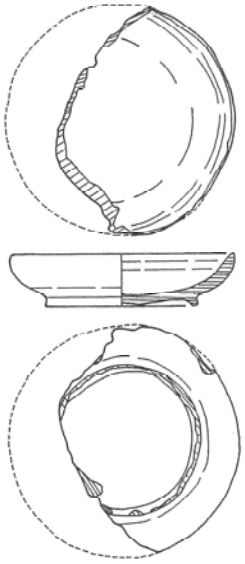
第13図　遺物実測図（３）



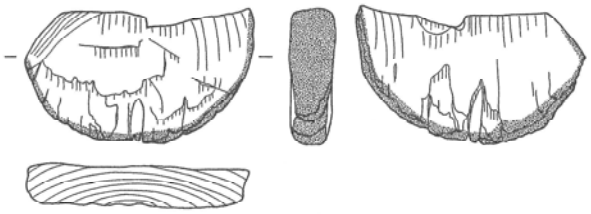
第14図　遺物実測図（４）



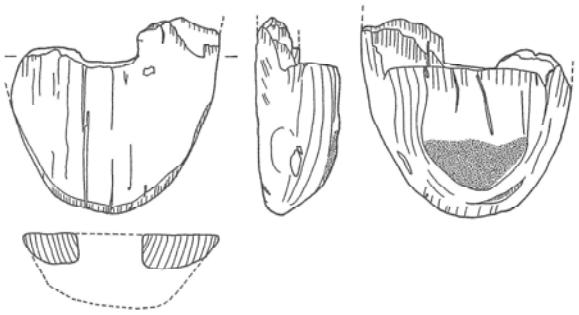
第15図　遺物実測図（５）



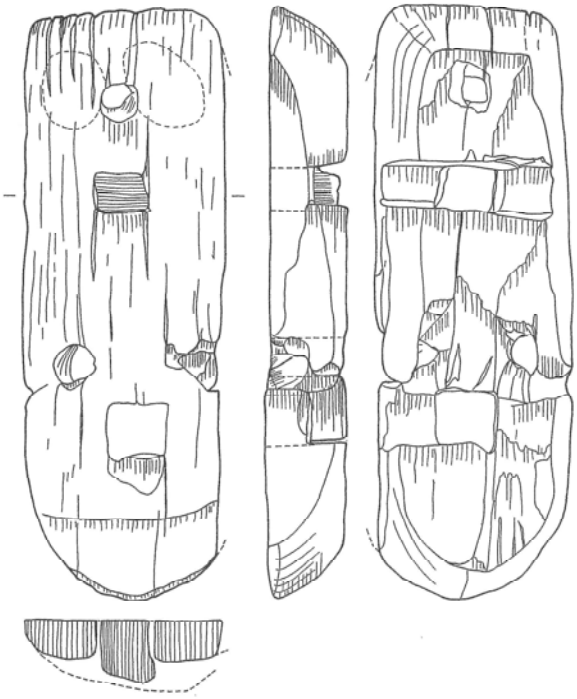
46



47



48

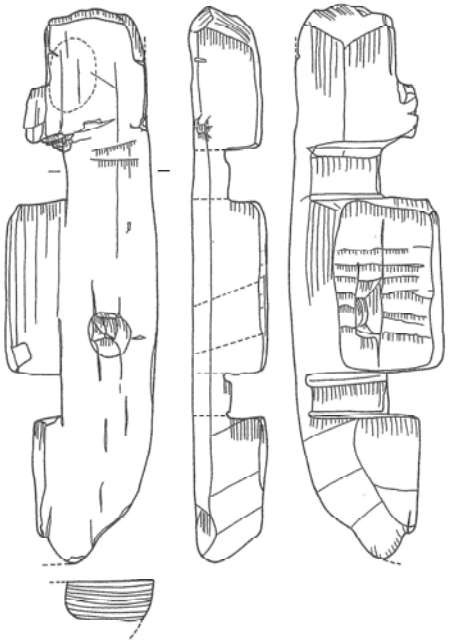


49

0　10cm
1：3

第16図　遺物実測図（６）

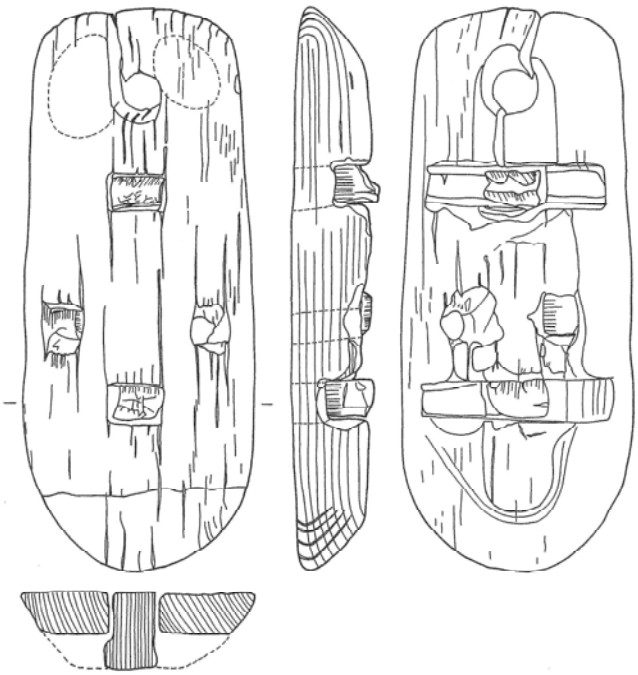
50



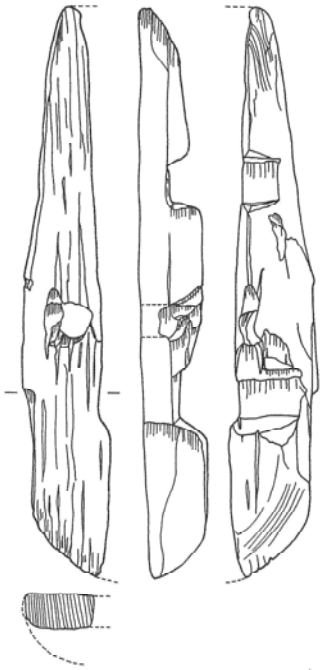
51

0　10cm
1：3

第17図　遺物実測図（７）



52

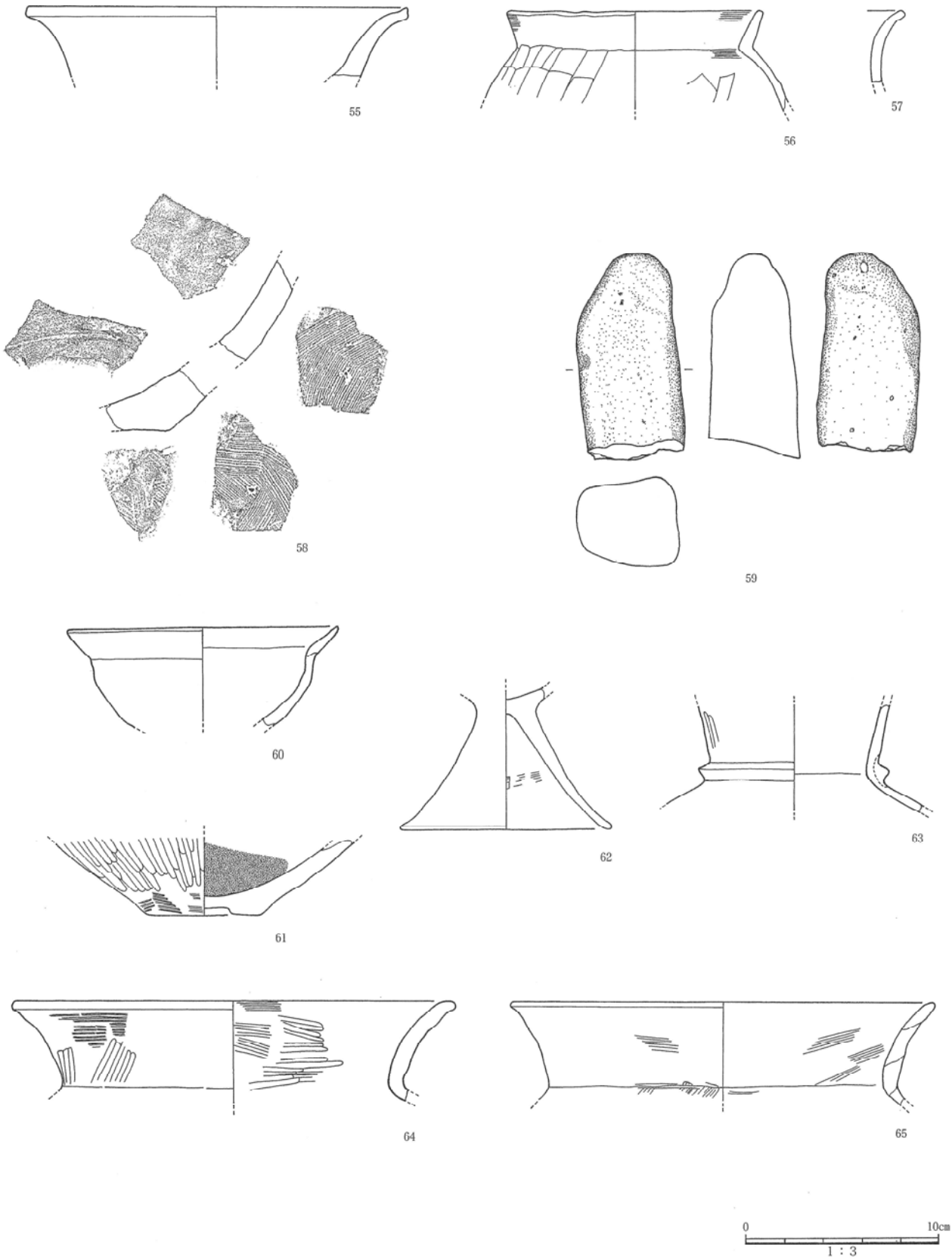


53

54

0　10cm
1：3

第18図　遺物実測図（８）



第19図　遺物実測図（９）

表－１　第２次調査出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(m/m) 口径	底径	器高	器厚	底部	調整技法 外面	内面	出土地点	登録番号	残存	備考
第11図	1	土師器	坏	(136)			5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ１		1/4以下	赤彩、煤付着、細砂混
	2	土師器	坏	(80)			5		ナデ	ナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/4	赤彩、細砂混
	3	土師器	坏	(108)			4		ナデ	ナデ	ＳＧ３Ｆ２	RP9	1/4以下	粗砂痕
	4	土師器	坏		48		5	平底	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ＳＧ３Ｆ１		1/3	赤彩、緻密
	5	土師器	坏		30		4	平底	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２	RP9	2/3	手ずくね、粗砂混
	6	土師器	高坏				6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２～３		1/4以下	緻密
	7	土師器	器台	(94)			7		ナデ→ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	ＳＧ３Ｆ２	RP21	1/3	赤彩、緻密
	8	土師器	器台				5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	赤彩、細砂混
	9	土師器	器台		(128)		6		ナデ→ミガキ	ナデ→ハケ目	ＳＧ３Ｆ３		1/4以下	赤彩、細砂混
	10	土師器	器台		(140)		5		ナデ→ヘラミガキ	ナデ→ハケ目	ＳＧ３Ｆ３		1/4	赤彩、緻密
	11	土師器	壺				5		ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ１		1/4以下	細砂混
	12	土師器	壺	(160)			4		ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目	ＳＧ３Ｆ３		1/4以下	赤彩、細砂混
	13	土師器	壺	(150)			4		ナデ→ヘラミガキ	ナデ→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２	RP14	1/4以下	赤彩、細砂混
	14	土師器	壺	180			5		ナデ、ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２	RP8	1/2	赤彩、細砂混
	15	土師器	壺		40		6		ヘラミガキ	ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ２	RP22	1/3	赤彩、緻密
第12図	16	土師器	壺	110			5	丸底カ	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ナデ・ヘラミガキ、ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ１	RP22	ほぼ完形	赤彩、緻密
	17	土師器	壺	110	40	132	6	平底	ナデ→ヘラミガキ、ハケ目→ナデ・ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ、ナデ→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ１	RP2	ほぼ完形	赤彩、緻密
	18	土師器	甕	(116)	59	183	7	平底	ヘラケズリ→ナデ	ハケ目→ナデ、ヘラケズリ→ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ２		2/3	粗砂混
	19	土師器	鉢	93	38	71	6	平底	ハケ目→ヘラミガキ、ヘラケズリ→ハケ目→ナデ・ミガキ	ナデ→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ１	RP2	ほぼ完形	赤彩、緻密
	20	土師器	壺	(140)			7		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	粗砂混
	21	土師器	甕	(204)	(68)	(240)	5	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＧ３Ｆ２	RP15	1/2	粗砂混
	22	土師器	甕	(140)			5		ナデ→ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	粗砂混
第13図	23	土師器	壺				6		ハケ目→ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ１・２	第19・20	1/4	外面炭化物付着、粗砂混
	24	土師器	壺	118	86	(298)	7	平底	ヘラミガキ、口縁部指オサエ	ハケ目→ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/4	細砂混
	25	土師器	甕		70		6	平底	ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ１	RP6	2/3	細砂混
	26	土師器	甕		95		12	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	細砂混
	27	土師器	甕		56		7	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	緻密
	28	土師器	甕		40		6	平底	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ＳＧ３Ｆ２	RP9	1/4以下	粗砂混
第14図	29	土師器	甕		63		6	平底	ハケ目	ハケ目、ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ１・２	RP1	1/4以下	粗砂混
	30	土師器	甕		48		7	平底	ヘラナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ１・２	RP1	1/4以下	煤付着、細砂混
	31	土師器	甕	(114)			5		ハケ目→ナデ	ナデ	ＳＧ３Ｆ１	RP1	1/4以下	粗砂混
	32	土師器	甕		(60)		6	平底	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ＳＧ３Ｆ１	RP7	1/4以下	粗砂混
	33	土師器	甕		60		6	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	細砂混
	34	土師器	甕	(202)			5		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	粗砂混
	35	土師器	甕	(170)			6		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ２・３		1/4以下	煤付着、細砂混
	36	土師器	甕	(260)			6		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/3	粗砂混
第15図	37	土師器	甕	(220)			5		ナデ、ヘラナデ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３Ｆ１	RP7	1/4以下	粗砂混
	38	須恵器	坏	(140)	(82)	50	8		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/3	細砂混
	39	土師器	器台	(78)			5		ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ→ナデ	ＳＤ２Ｆ３	RP18	1/4以下	赤彩、緻密
	40	須恵器	甕				9		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ２Ｆ２		1/4以下	細砂混
	41	土師器	鉢	(146)			9		ハケ目→ミガキ、ナデ	ハケ目	ＳＧ３Ｆ３		1/4以下	細砂混
	42	須恵器	甕				15		タタキ目	アテ痕	ＳＤ２Ｆ３		1/4以下	細砂混
	43	石製品	磨石	長90	短70		厚64				ＳＤ２Ｆ１	RQ12	欠損ナシ	打痕穴数カ所有り
	44	石製品	砥石	長65	短59		厚20				ＳＤ２		欠損有り	２面使用痕、ノミ状工具研磨痕
	45	石製品	石鉢	長90	短54		厚36				ＳＤ２		欠損有り	工具痕若干残る
第16図	46	木製品	漆器皿	長88	幅66	高20	厚５	高台付	ロクロ成形	ロクロ成形	ＳＤ２		2/3	内外面黒色漆塗り
	47	木製品	下駄	長50	幅87		厚16				ＳＤ２		歯部のみ	歯部炭化
	48	木製品	下駄	長75	幅80		厚29				ＳＤ２		台後部	台部炭化
	49	木製品	下駄	長231	幅77		厚29				ＳＤ２		歯部欠損	指圧痕有り
第17図	50	木製品	下駄	長227	幅61		厚26				ＳＤ２Ｆ１	RW11	欠損有り	指圧痕有り
	51	木製品	下駄	長216	幅60		厚29				ＳＤ２Ｆ１	RW13	欠損有り	指圧痕有り
第18図	52	木製品	下駄	長221	幅91		厚32				ＳＤ２		歯部欠損	指圧痕有り
	53	木製品	下駄	長223	幅31		厚25				ＳＤ２		欠損有り	
	54	金属製品	刀子	長140	幅22		厚1.5				ＳＤ２Ｙ	RM17	先端欠損	腐植有り
第19図	55	土師器	壺	(200)			9		ナデ	ナデ	ＳＫ５	RR10	1/4以下	細砂混
	56	土師器	甕	(130)			4		ヘラケズリ→ナデ	ナデ、ヘラナデ	ＳＫ５Ｆ２		1/4以下	外面多量に煤付着、粗砂混
	57	土師器	甕				5		ナデ	ナデ	ＳＫ５Ｆ２		1/4以下	細砂混
	58	中世陶器	擂鉢				15		ハケ目	卸目カ	ＳＫ17Ｆ２		1/4以下	細砂混
	59	石製品	磨石	長106	幅52		厚42				ＳＫ17Ｆ２		欠損有り	
	60	土師器	坏	(154)			4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	10－12G		1/4	赤彩、細砂混
	61	土師器	甕		60		9	平底	ヘラミガキ→ヘラケズリ		９－22G		1/4以下	内面煤付着
	62	土師器	器台		(120)		6		ヘラミガキ	ハケ目→ナデ・ヘラミガキ	10・11－20G		1/4以下	赤彩、緻密
	63	土師器	壺				6		ヘラミガキカ	ナデ	10・11－20G		1/4以下	粗砂混
	64	土師器	甕	(230)			9		ハケ目→ヘラミガキ	ヘケ目→ヘラミガキ	10・11－20G		1/4以下	粗砂混
	65	土師器	甕	(220)			9		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	９－22G		1/4以下	細砂混

Ⅴ　第３次調査

１　検出された遺構

古墳時代の遺構

ＳＧ２(遺構：第20図、遺物：46―38～45)

７―13～20―７Ｇで検出された。西側でＳＤ302から切られ、調査区の設定で東西流路については不明。幅3.6～7.5mで現存長は80m、深さ105cmである。河川南西部についてはトレンチによる範囲確認のみとした。壁途中に段のある箇所もあるが、やや垂直な立ち上がりである。覆土上層は黒色粘土、下層はオリーブ黒色粘土を基調とする。遺物は、古式土師器120点、土製品１点、上層から須恵器２点、白磁碗１点や染付皿１点、近世磁器１点が出土している。遺物は覆土上層から出土し、河床付近からの出土がなかった。

ＳＧ３(遺構：第21図～23図、遺物：41―１～45―37)

13―21～19―12Ｇで検出された。第２次調査で検出された箇所の東側にあたる。調査区中央を東西に貫流する。幅９～14mで現存長60m、深さ90cmを測る。壁の立ち上がりや覆土の状況は２次調査と同様であった。出土遺物の大半は古式土師器で450点を数え、その他覆土中に板状木製品１点が出土している。上層の須恵器小片５点、近世陶磁器16点、近世の金属製品２点、近世の農耕具関係の木製品11点がある。

ＳＫ329(遺構：第24図、遺物：46―46・47)

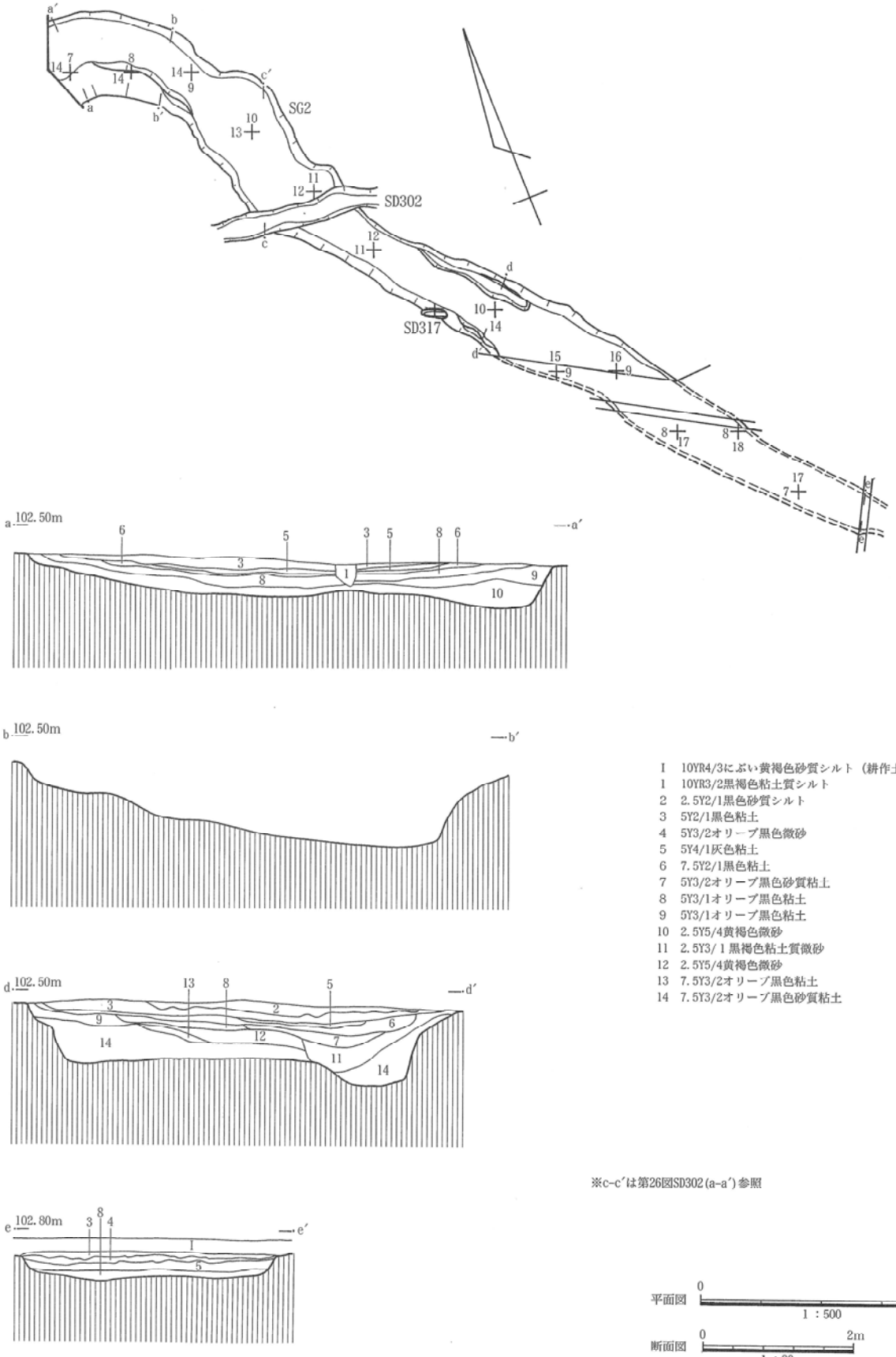
17－10Ｇで検出された。平面形は北側がやや張り出す円形である。長軸112cmで短軸110cm、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりで途中に段をもち、開口部で外側に広がる。覆土上層は、黒褐色砂質粘土を基調とし、下層は黒褐色ないし黒色土でＳＧ３覆土同様に腐植物を含む堆積を見せている。出土遺物は、古式土師器30点を数える。古式土師器甕が底面直上から出土している。

ＳＫ330(遺構：第24図)

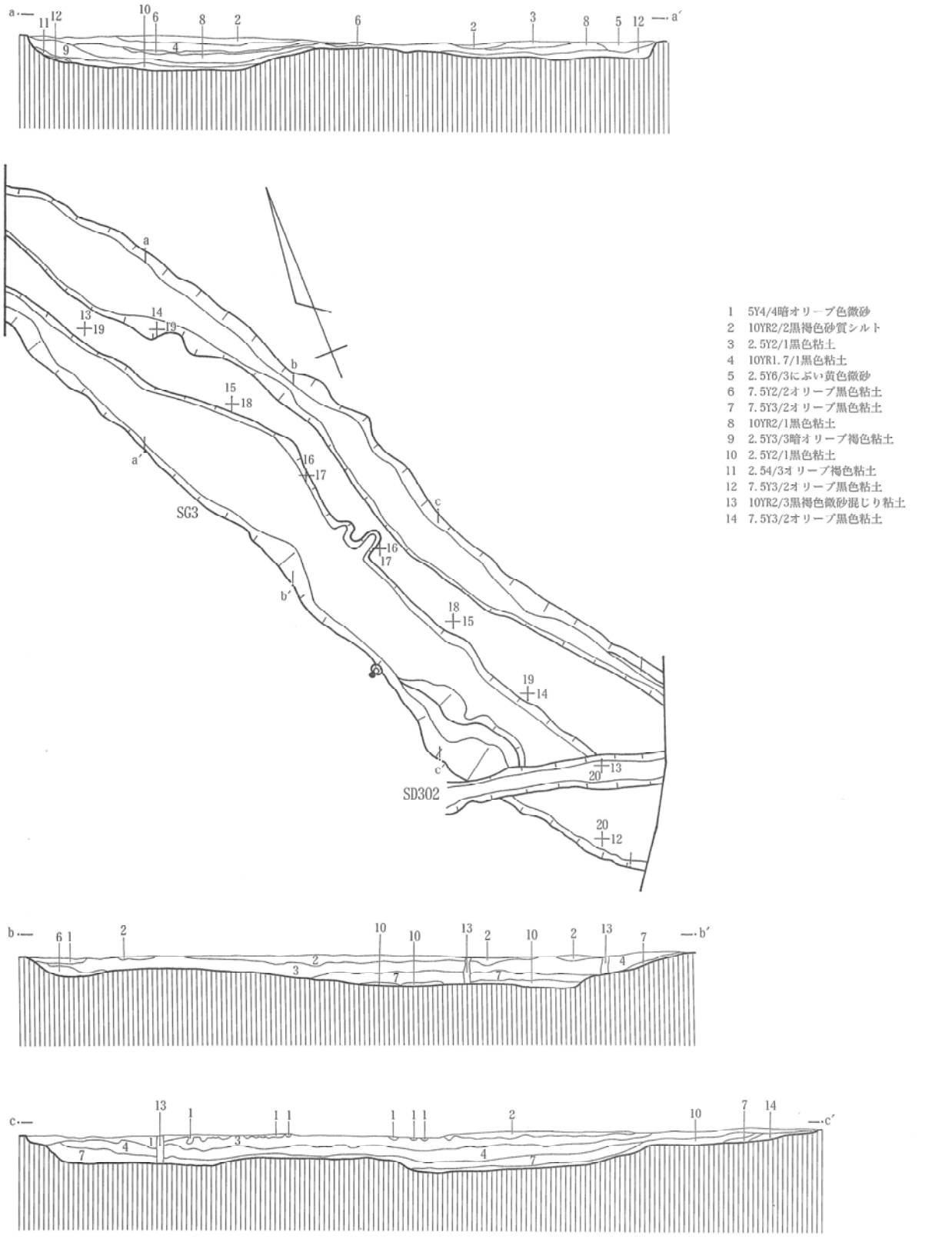
18―10Ｇで検出された。平面形は南西部が張り出した楕円形を呈している。長軸138cmで短軸90cm、深さ57cmを測る。壁がやや垂直に立ち上がり、開口部が外側に広がる。覆土上層が、黒色ないし黒褐色土でシルト性強い。下層は微砂を多く含む粘土で腐植物が多量に混じる。堆積状況がＳＫ329とほぼ同じのため同時期の遺構の可能性がある。

ＳＨ410(遺構：第25図、46―48・49)

18―10～16―11Ｇで検出された。ほとんど近年の攪乱により破壊され、わずかに周湟を残すのみである。南側ブリッジの他３箇所の残存があり、南側に向かって隅丸方形に巡る様子が窺える。北側の部分が削平され、主体部も破壊されている。幅0.8～1.6m、深さ10cmを計る。墳墓全体の東西長は10.8mである。上層が削平されており、壁の立ち上がりが不明である。底面は平坦である。覆土はオリーブ黒色砂質シルトでグライ層である。遺物は、南側ブリッジ付近から古式土師器小片が25点、流れ込みの陶磁器小片２点が出土している。

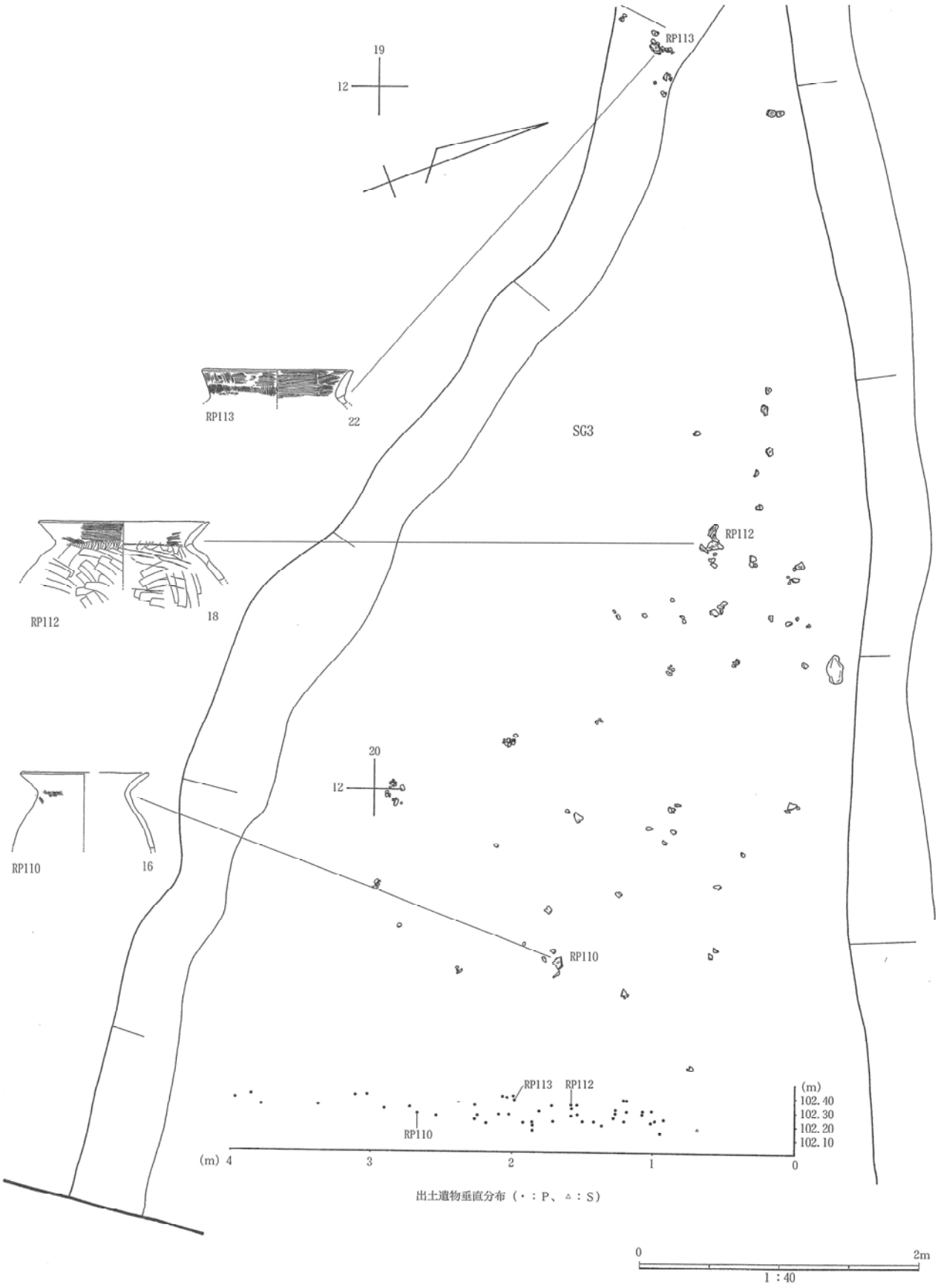

SG2
SD302
SD317
a.102.50m
b.102.50m
d.102.50m
e.102.80m
I　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（耕作土）
1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト
2　2.5Y2/1黒色砂質シルト
3　5Y2/1黒色粘土
4　5Y3/2オリーブ黒色微砂
5　5Y4/1灰色粘土
6　7.5Y2/1黒色粘土
7　5Y3/2オリーブ黒色砂質粘土
8　5Y3/1オリーブ黒色粘土
9　5Y3/1オリーブ黒色粘土
10　2.5Y5/4黄褐色微砂
11　2.5Y3/1黒褐色粘土質微砂
12　2.5Y5/4黄褐色微砂
13　7.5Y3/2オリーブ黒色粘土
14　7.5Y3/2オリーブ黒色砂質粘土
※c-c′は第26図SD302(a-a′)参照
平面図　0　20m　1：500
断面図　0　2m　1：80

第20図　ＳＧ２河川跡

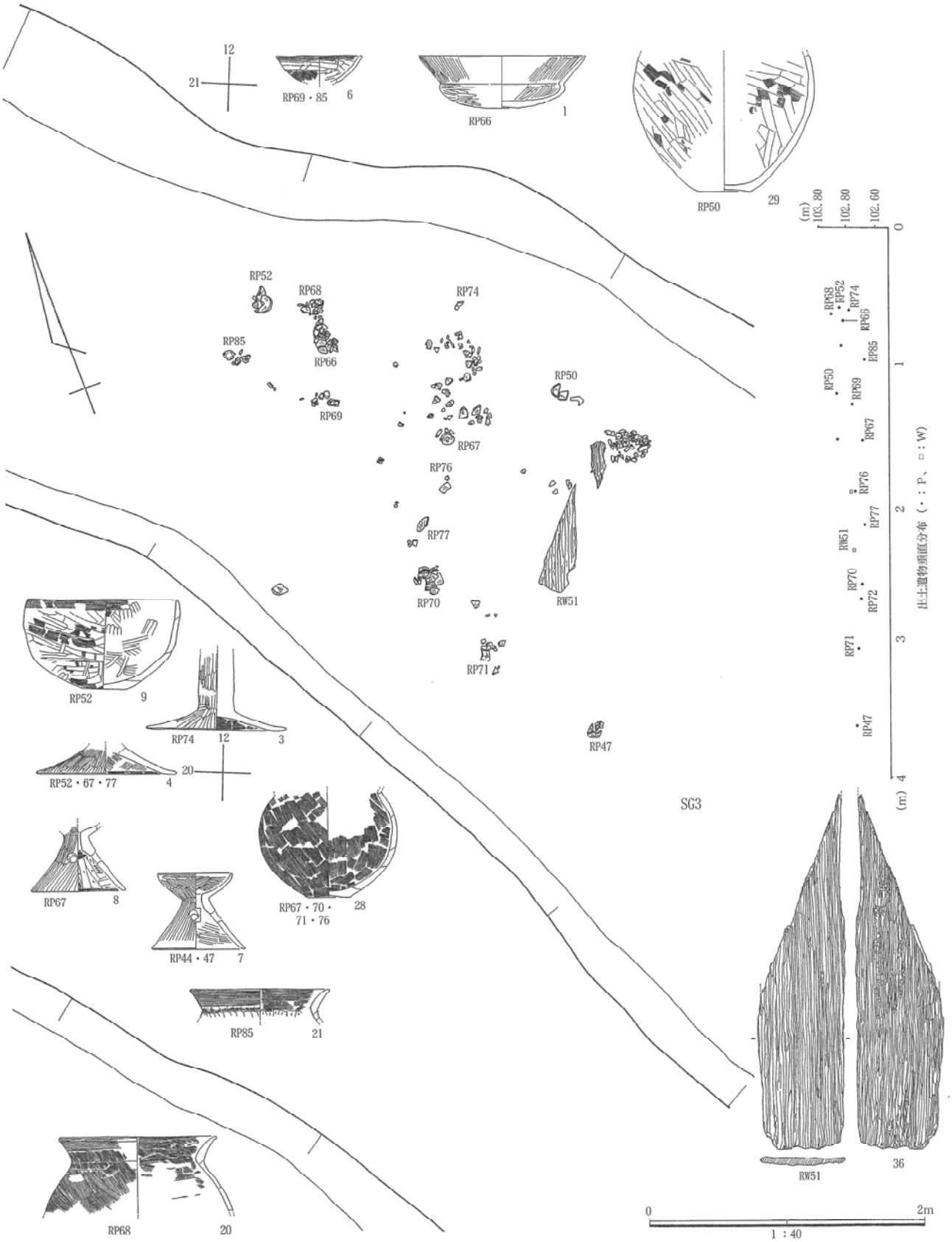


（水糸の高さは、いずれも102.50m）

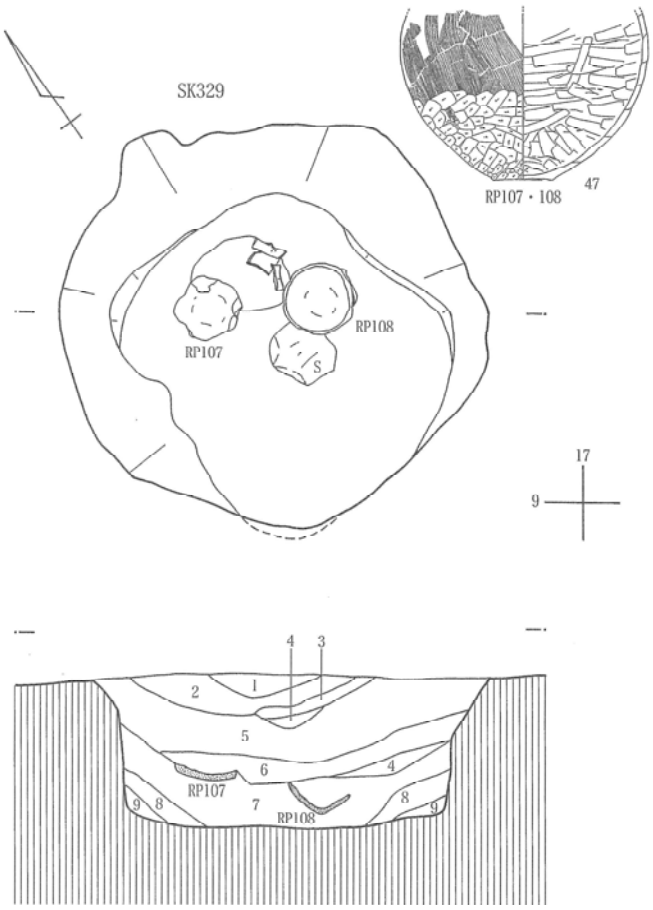
第21図　ＳＧ３河川跡

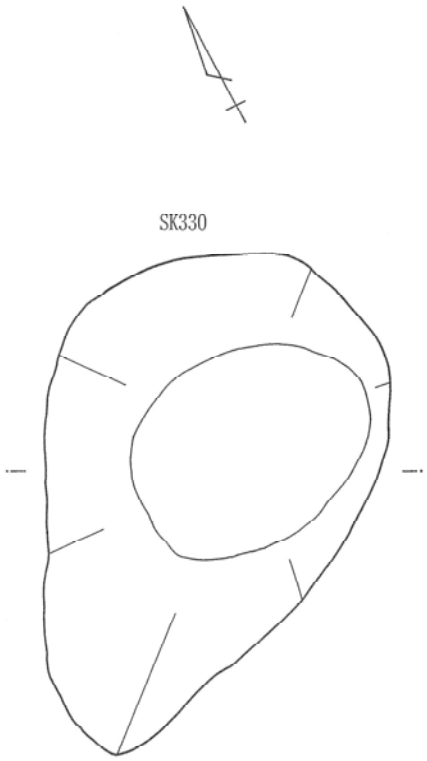


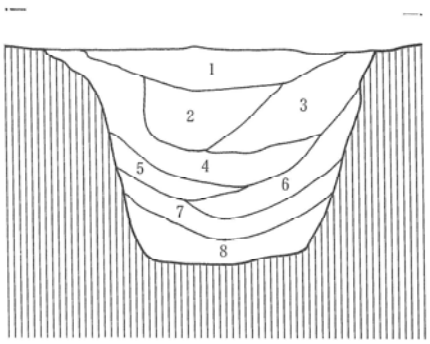
第22図　ＳＧ３河川跡東側遺物出土状況



第23図　ＳＧ３河川跡西側遺物出土状況







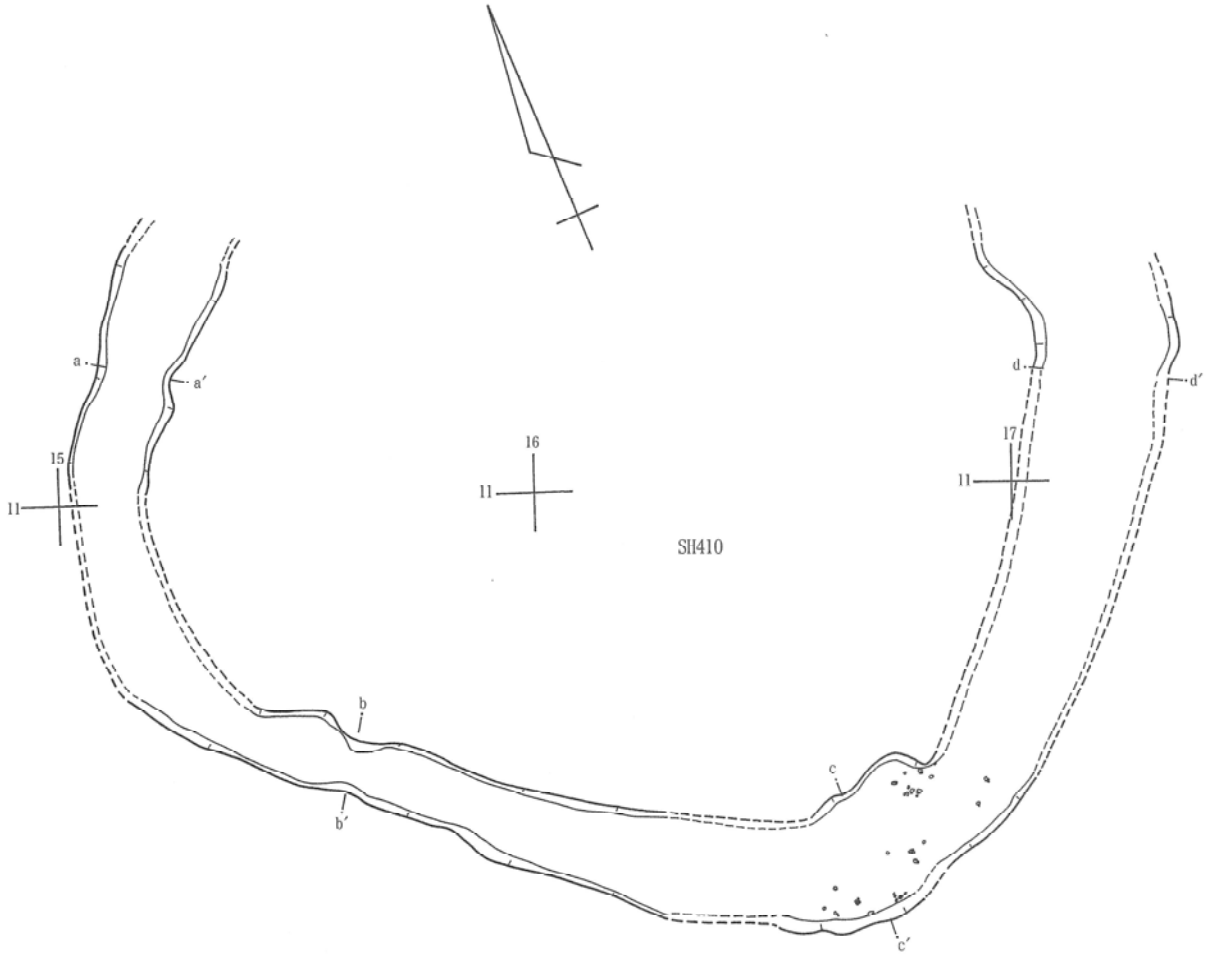
SK329
1　10YR3/1黒褐色砂質粘土　白微砂少し混じる
2　10YR2/3黒褐色砂質粘土　白微砂少し混じる　粘性強い
3　10YR2/1黒色砂質粘土　粘性強い
4　10YR1.7/1黒色粘土　粘性強い
5　10YR2/2黒褐色砂質粘土　10YR4/6褐色微砂粒状に５％混じる
6　10YR2/3黒褐色シルト質微砂　10YR4/6褐色微砂粒状に５％混じる
7　10YR3/1黒褐色微砂　未分解有機物少量混じる
8　10YR2/2黒褐色粘土質微砂　未分解有機物多量に混じる
9　10YR2/1黒色粘土　未分解有機物多量に混じる

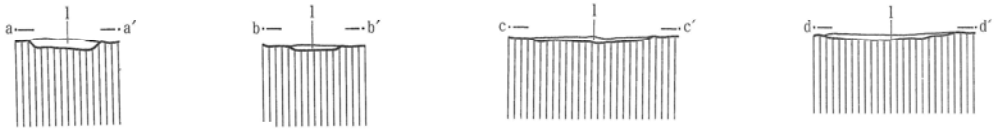
SK330
1　10YR2/1黒色砂質シルト　灰白色微砂混じる
2　10YR3/2黒褐色微砂　１層を10％混じる
3　10YR3/1黒褐色砂質シルト　１層を10％混じる
4　10YR2/2黒褐色砂質粘土　２層を５％混じる
5　10YR3/1黒褐色砂質粘土　４層を５％混じる
6　10YR2/1黒色砂質粘土　未分解有機物混じる
7　10YR1.7/1黒色砂質粘土　未分解有機物混じる
8　10YR1.7/1黒色粘土　未分解有機物多量に混じる

(水糸の高さは、いずれも102.50m)

0　1m
1：20

第24図　ＳＫ329・330土坑





(水糸の高さは、いずれも102.50cm)

1　5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト　5Y2/1黒色シルトブロック状に10%混じる　グライ化

0　2m
1：80

第25図　ＳＨ410墳墓

奈良・平安時代の遺構

ＳＤ302(遺構：第26図～28図、遺物：47―52～50―109)

21―14～10―12Ｇで検出された。東側でＳＧ３を、西側でＳＧ２を切っている。東西に貫流する。規模は幅2.4～3.6mで現存長60m、深さ65cmを計る。断面形は、ややＵ字形で、覆土上層はオリーブ褐色微砂、下層で暗オリーブ色微砂が堆積する。遺物は、須恵器350点、赤焼土器・土師器400点、木製品３点・石製品１点出土している。須恵器坏は、底径がやや小さく体部が直線的に立つ器形(47―52･53)や底径が小さくなる器形(47―54)、体部が直線的に立った後口唇部が外反する器形(47―58～63)がある。底部の切り離しは回転糸切りである。なお、墨書土器が21点出土しており、その他双耳坏や赤焼土器有台坏・皿・鉢、土師器坏・高台付坏・甕、挽物大盤、砥石、近世陶器擂鉢が出土している。

中世の遺構

北側掘立柱建物跡群(遺構：第29図～35図)

調査区北側に集中して検出された建物跡について概略的に述べていく。

ＳＢ14(遺構第29図)

13―28～12―28Ｇで検出された。棟方向は、磁北から75度西に傾く。規模は、梁行２間×桁行３間の側柱建物である。

ＳＢ32(遺構第30図)

14―28～13―27Ｇで検出された。棟方向は、磁北から80度西に傾く。身舎の規模は、梁行２間×桁行３間で、北側片面のみ庇を付設している。

ＳＢ81(遺構第31図)

14―28～14―27Ｇで検出された。棟方向は、磁北から20度東に傾く。規模は、梁行３間×桁行４間の側柱建物である。柱穴の形状はほぼ円形である。

ＳＢ116(遺構第32図)

15―27～14―26Ｇで検出された。棟方向は、磁北から80度西に傾く。規模は、梁行２間×桁行３間の側柱建物である。

ＳＢ125・ＳＡ412(遺構第33図)

15―27～15―26Ｇで検出された。棟方向は、磁北から10度東に傾く。規模は、梁行１間×桁行２間の側柱建物である。東側にＳＡ412が付設される。

ＳＢ170(遺構第34図)

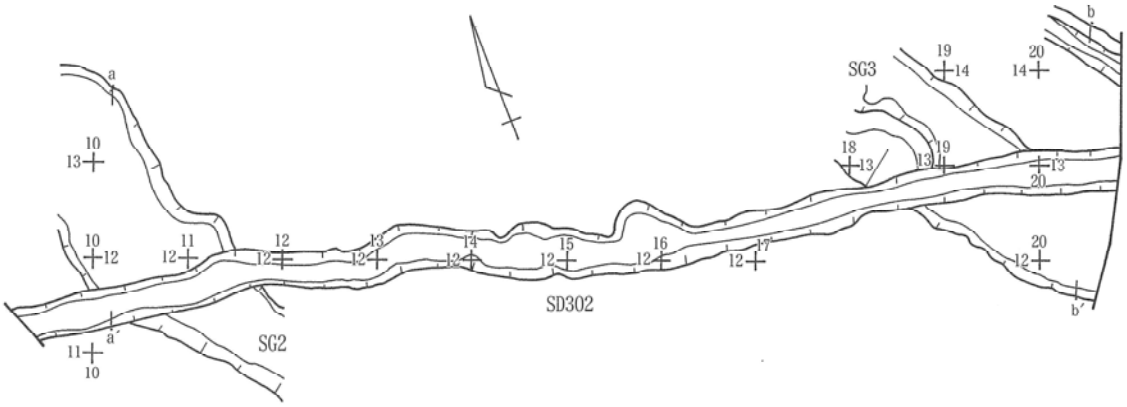
15―25～15―24Ｇで検出された。棟方向は、磁北から15度東に傾く。規模は、梁行１間×桁行３間の側柱建物である。

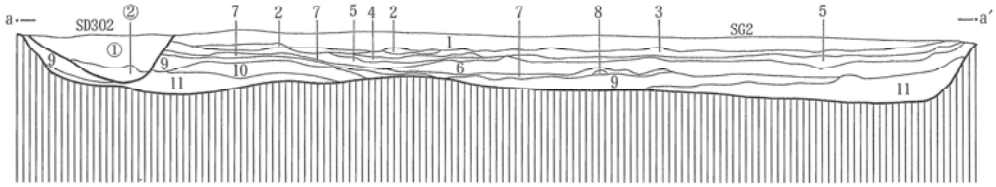
ＳＢ181(遺構第35図)

14―25Ｇで検出された。棟方向は、磁北から75度西に傾く。規模は、梁行１間×桁行２間の側柱建物と推定される。

ＳＡ411(遺構第35図)

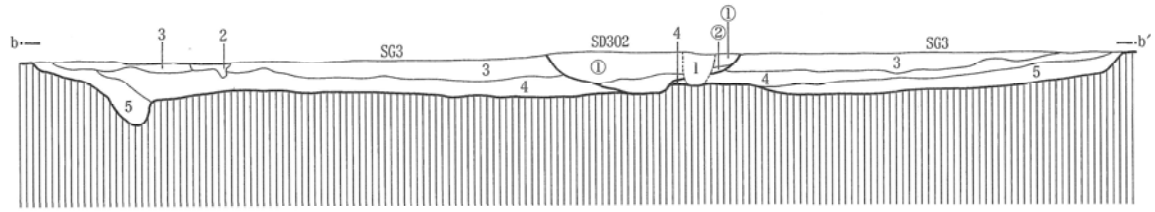
15―28Ｇで検出され、棟方向は、磁北から15度東に傾く。ＳＢ32に付設かと思われる。





SG2-SD302

1　5Y2/1黒色粘土　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
2　2.5Y2/1黒色粘土　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
3　2.5Y3/2黒褐色砂質粘土　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
4　5Y2/2オリーブ黒色砂質微砂　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
5　5Y4/1灰色砂質粘土　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
6　5Y3/2オリーブ黒色微砂　5Y2/2オリーブ黒色砂質粘土帯状に10%混じる　やや固い（SG2覆土）
7　2.5Y3/1黒褐色粘土混じり微砂　5Y3/2オリーブ黒色微砂粒状に10%混じる（SG2覆土）
8　2.5Y5/2暗灰黄色微砂　2.5Y3/1黒褐色微砂を帯状に５%混じる（SG2覆土）
9　2.5Y3/1黒褐色粘土質微砂　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
10　2.5Y5/4黄褐色微砂　2.5Y3/2黒褐色シルトブロック状に20%混じる（SG2覆土）
11　2.5Y3/1黒褐色粘土質微砂　5Y4/4暗オリーブ色粘土帯状に10%（未分解有機物）混じる（SG2覆土）
①　2.5Y4/6オリーブ褐色微砂　5Y3/1オリーブ黒色微砂20%、2.5Y3/1黒褐色粘土10%混じる（SD302覆土）
②　5Y4/4暗オリーブ色微砂　2.5Y4/6オリーブ褐色微砂10%混じる（SD302覆土）



SG3・SD302

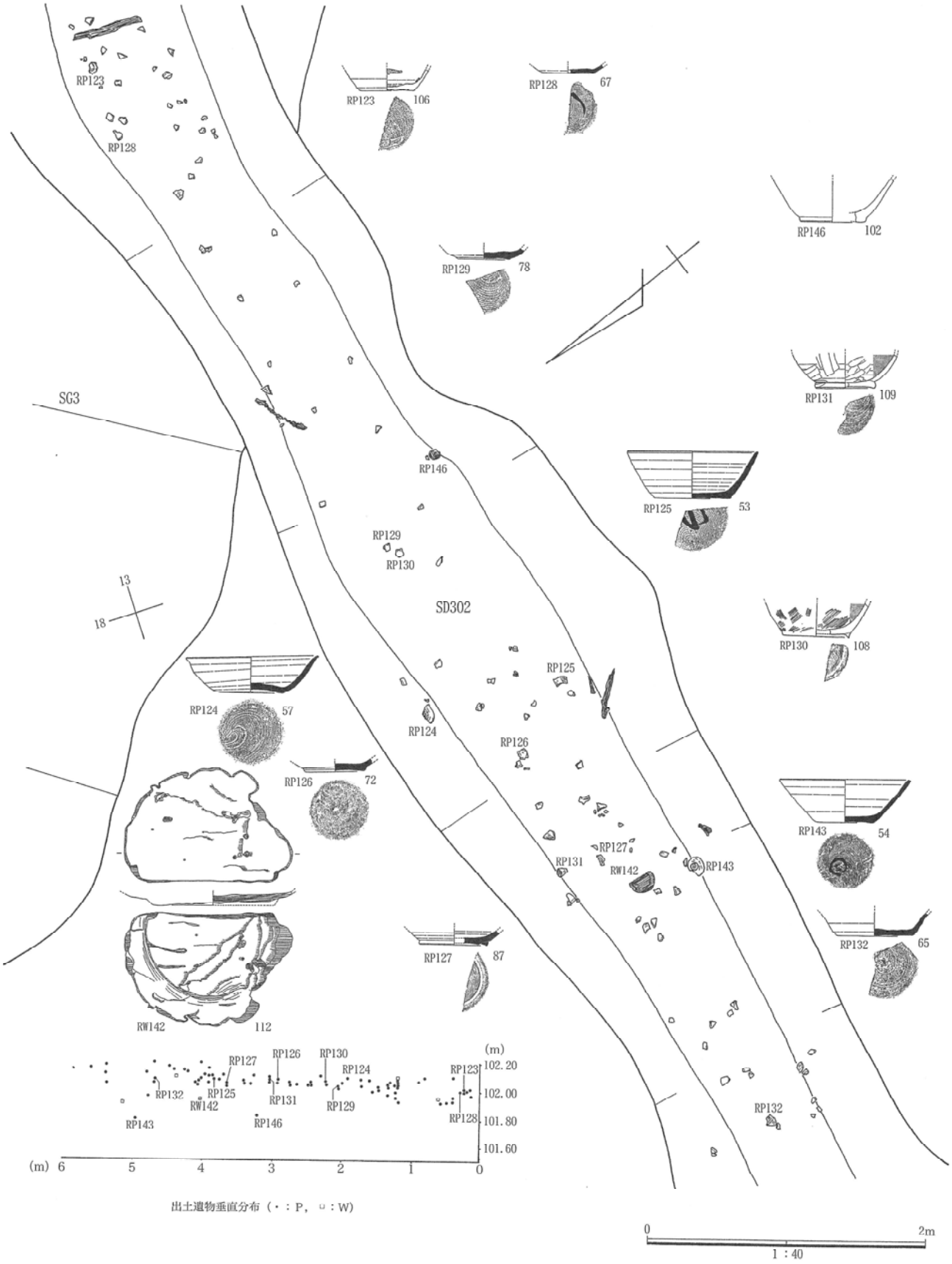
1　5Y3/1オリーブ黒色微砂　10YR2/1黒色シルトブロック状に５%混じる（攪乱）
2　5Y4/4暗オリーブ微砂　10YR2/3黒褐色粘土質シルト斑状に20%、10YR2/1黒色シルトブロック状に10%混じる（SG3覆土）
3　2.5Y2/1黒色粘土　5Y3/2オリーブ黒色粘土ブロック状に20%混じる　粘性強い（SG3覆土）
4　10YR1.7/1黒色粘土　未分解有機物少し混じる　粘性強い（SG3覆土）
5　7.5Y3/2オリーブ黒色粘土　粘性強い　グライ化(SG3覆土)
①　2.5Y4/6リーブ褐色微砂　5Y3/1オリーブ黒色微砂20%、2.5Y3/1黒色粘土10%混じる（SD302覆土）
②　5Y4/4暗オリーブ色微砂　2.5Y4/6オリーブ褐色微砂10%混じる（SD302覆土）

（水糸の高さは、いずれも102.50m）

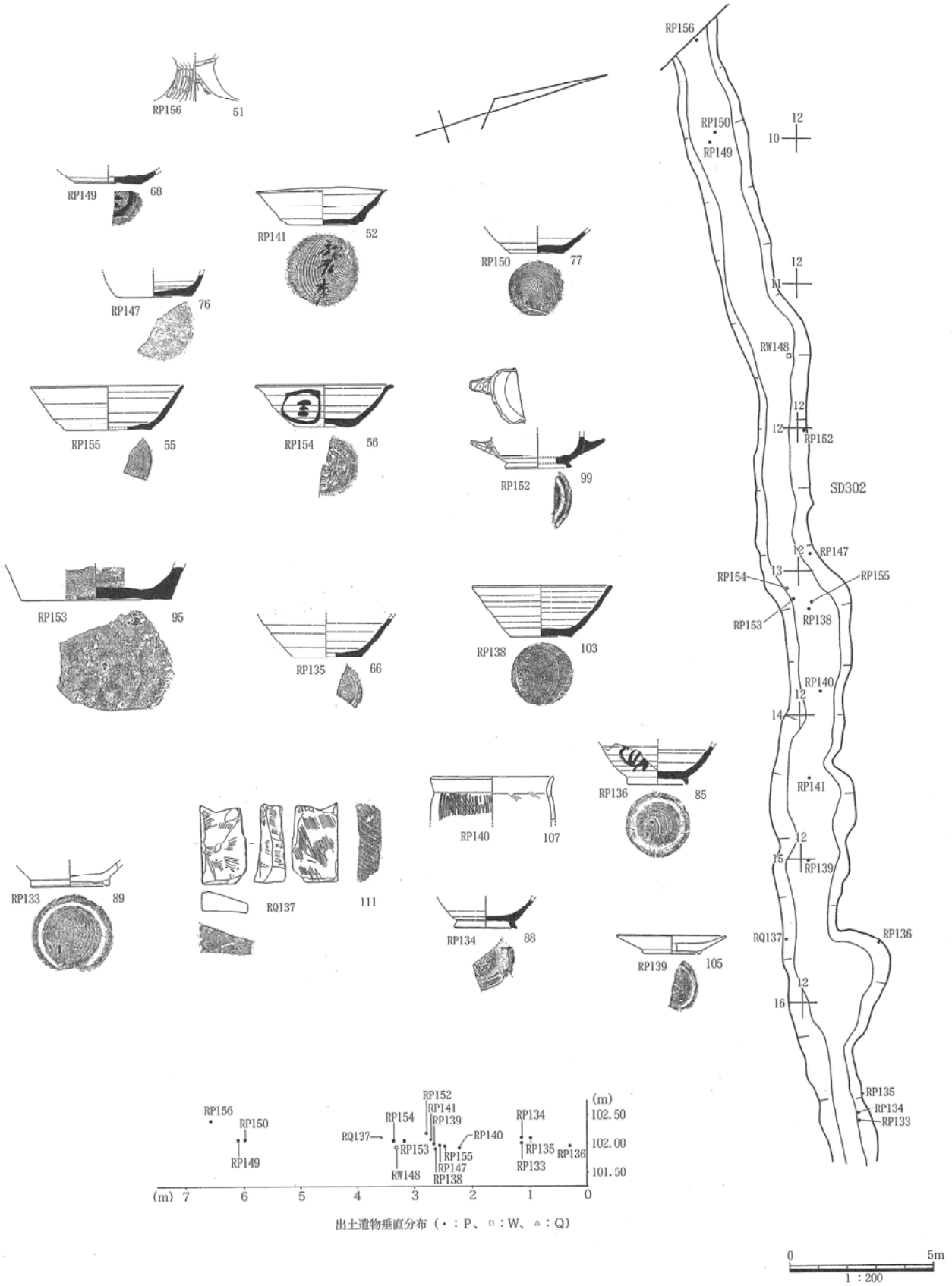
平面図　0　10m　1：400

断面図　0　5m　1：100

第26図　ＳＤ302溝跡



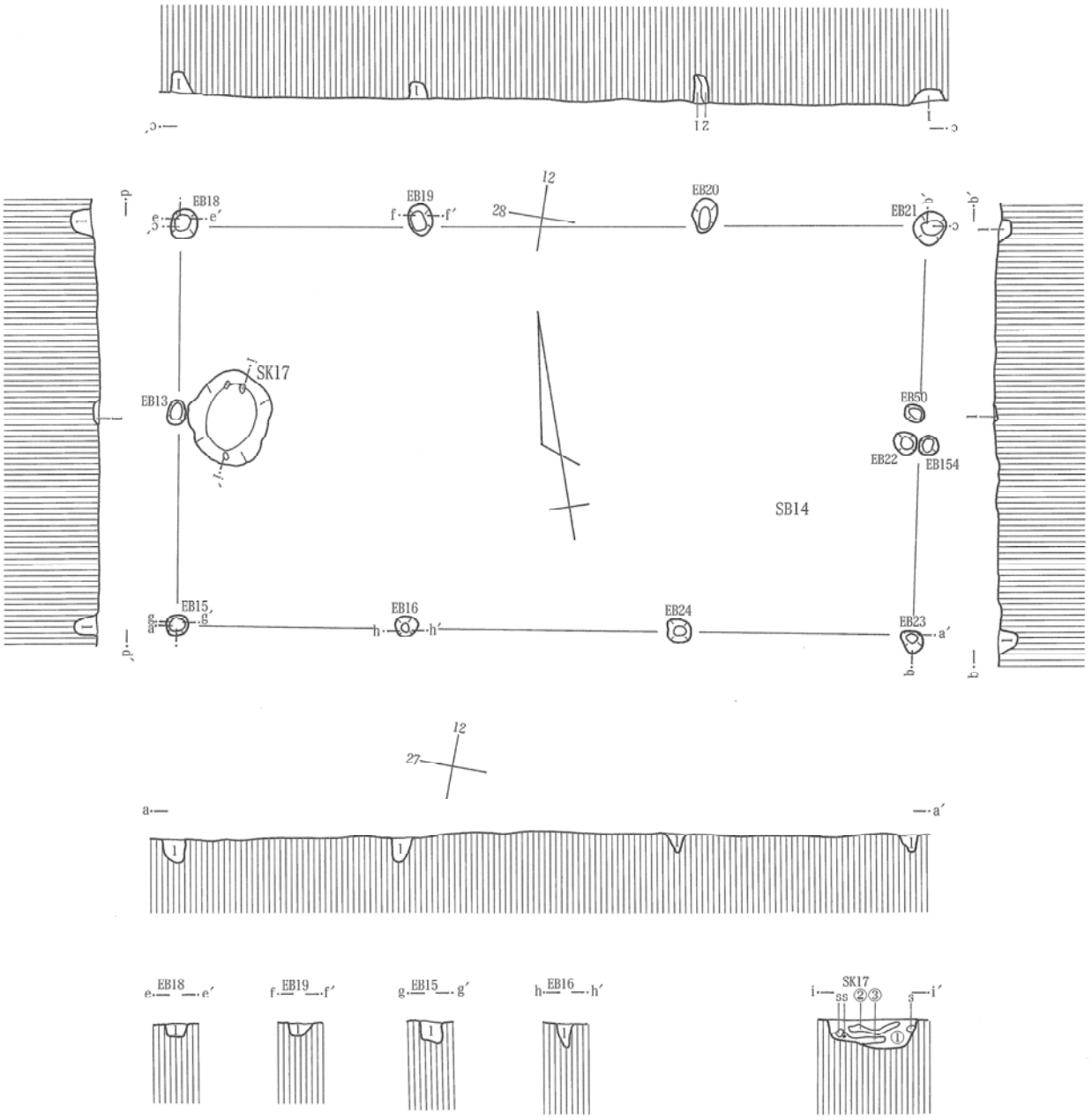
第27図　ＳＤ302溝跡東側遺物出土状況



第28図　ＳＤ302溝跡西側遺物出土状況

表－２　掘立柱建物跡観察表

	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方・覆土	備考
SB 14	○−○−○−○ |　　| ○　　○ |　　| ○−○−○−○	東西軸 N−75°−W	梁行 3.6〜3.7m 桁行 6.6〜6.8m 23.8㎡ (7.5坪)	梁行　EB15・17間1.9m、EB17・18間1.7m EB21・22間1.95m、EB22・23間1.75m 桁行　EB16・24間2.5m、EB18・19間2.15m EB19・20間2.6m 他は2.05m	径20cm前後。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒褐色質シルト、掘り方は黒褐色砂質シルトで固くしまっている。深さは、確認面から４〜25cmほどである。	東側EB22を補強する柱穴としてEB50・154を検出している。 EB15・18・19は、２次調査にて確認されている。
SB 32	○−○−○−○ |　　| −○−○−○ |　　| ○−○−○−○	東西軸 N−80°−W	梁行 4.6〜4.8m 桁行 7.8m 35.8㎡ (11.3坪)	梁行　EB40・42間3.9m EB44・163間2.0m EB163・北西隅柱穴間約1.7m 桁行　EB35・北東隅柱穴間約2.6m、EB18・19間2.15m EB35・38間2.6m、EB38・40間2.5m EB44・344間2.4m、EB43・344間2.8m EB42・43間2.5m 庇　EB33・34間2.5m、EB34・36間2.7m EB36・39間2.6m 北東隅柱穴・EB33間0.9m EB39・41間1.0m	径30〜40cm。 円形または楕円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くまっている。 深さは、確認面から10〜40cmほどである。 EB41覆土中に、大きな礫が含まれる。	北西隅の柱穴、東側柱列の真中の柱穴は検出できない。 EB38・41ともに柱の差替えがなされる。 EB344は上層を攪乱により破壊されている。
SB 81	○−○−○−○−○ |　　| ○　　○ | ○　　| | ○ ── ○−○−○	南北軸 N−20°−E	梁行 2.5m 桁行 5.6〜5.8m 14.0㎡ (4.4坪)	梁行　EB78・82間、EB87・156間0.9m EB78・96間1.0m、EB83・96間0.6 EB86・156間1.6m 桁行　EB82・84間3.0m、EB86・98間1.1m EB83・97間1.0m、EB92・97間2.0m EB87・91間1.3m EB84・98間、EB91・92間1.5m	径15〜30cm。ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くまっている。 深さは、確認面から５〜25cmである。	南側西寄り、西側北寄りの柱穴が検出できない。 EB85をEB86が一部壊している。
SB 116	○−○−○−○ |　　| ○　　○ |　　| ○−○ ── ○	東西軸 N−80°−W	南北 3.2〜3.4m 桁行 3.0〜3.4m 9.6㎡ (3.0坪)	南北　EB117・124間、EB119・120間1.5m EB123・124間1.7m EB120・121間1.9m 東西　EB117・118間1.2m EB118・146間0.7m EB119・146間1.3m EB121・122間2.0m EB122・123間1.0m	径15〜30cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色砂質シルトで固くまっている。 深さは、確認面から５〜20cm。	SB125と切り合っているが、柱穴同士の切り合いもなく新旧関係は不明。
SB 125	○−○−○ |　　| ○−○−○	南北軸 N−10°−E	梁行 2.3m 桁行 3.6m 8.3㎡ (2.6坪)	梁行　EB126・147間、EB130・131間2.3m 桁行　EB126・132間2.1m EB131・132間1.5m EB130・144間1.9m EB144・147間1.7m	径10〜25cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色砂混じり粘土、堀方は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から８〜25cm。	EB130をEB129が一部壊している。
SB 170	○−○−○−○ |　　| ○−○ ── ○	南北軸 N−15°−E	梁行 1.7〜1.8m 桁行 4.0m 6.8㎡ (2.1坪)	梁行　EB171・172間1.8m EB175・176間1.7m 桁行　EB171・178間1.2m EB176・178間2.8m EB174・213間1.1m EB174・175間1.5m	径10〜30cm。 ほぼ円形。 覆どとして、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から６〜18cm。	西側の柱穴列の南寄り１本が確認できない。 小規模な小屋的な建物を想定できる。
SB 181	○−○−○ | ○	東西軸 N−75°−W	梁行 1.3m以上 東西 3.15m以上 4.1㎡以上 (1.3坪)	南北　EB184・186間1.3m 東西　EB182・183間1.5m EB183・184間1.65m	径15〜30cm。 ほぼ円形。 覆土として、アタリ部分は黒色粘土質シルト、掘り方は暗褐色微砂で固くしまっている。 深さは、確認面から５〜12cm。	上層部分の削平があるため南東方向に建物跡の範囲が延びる可能性がある。掘立柱建物跡を想定した。



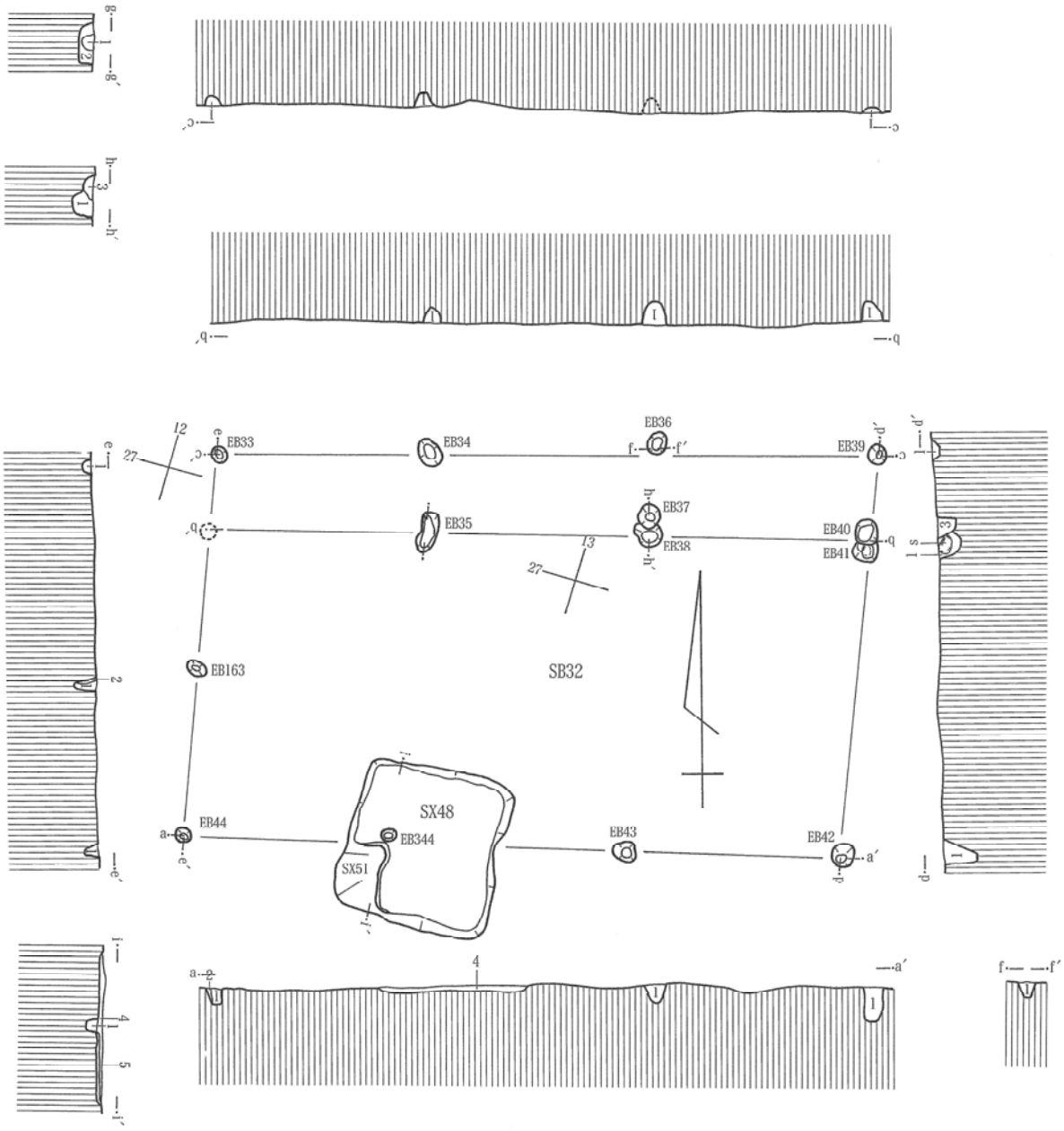
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂粒状に10%混じる　やや固い
2　10YR2/3　黒褐色砂質シルト　10YR2/1黒色粘土質シルト粒状に20%（炭化物）、10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に混じる　固くしまる

SK17
①　5YR2/1黒褐色粘土
②　5YR1.7/1黒色粘土　10YR3/1黒褐色砂質シルト３%混じる
③　5YR1.7/1黒色粘土　10YR3/1黒褐色砂質シルト30%混じる

（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　1m
1：60

第29図　ＳＢ14掘立柱建物跡

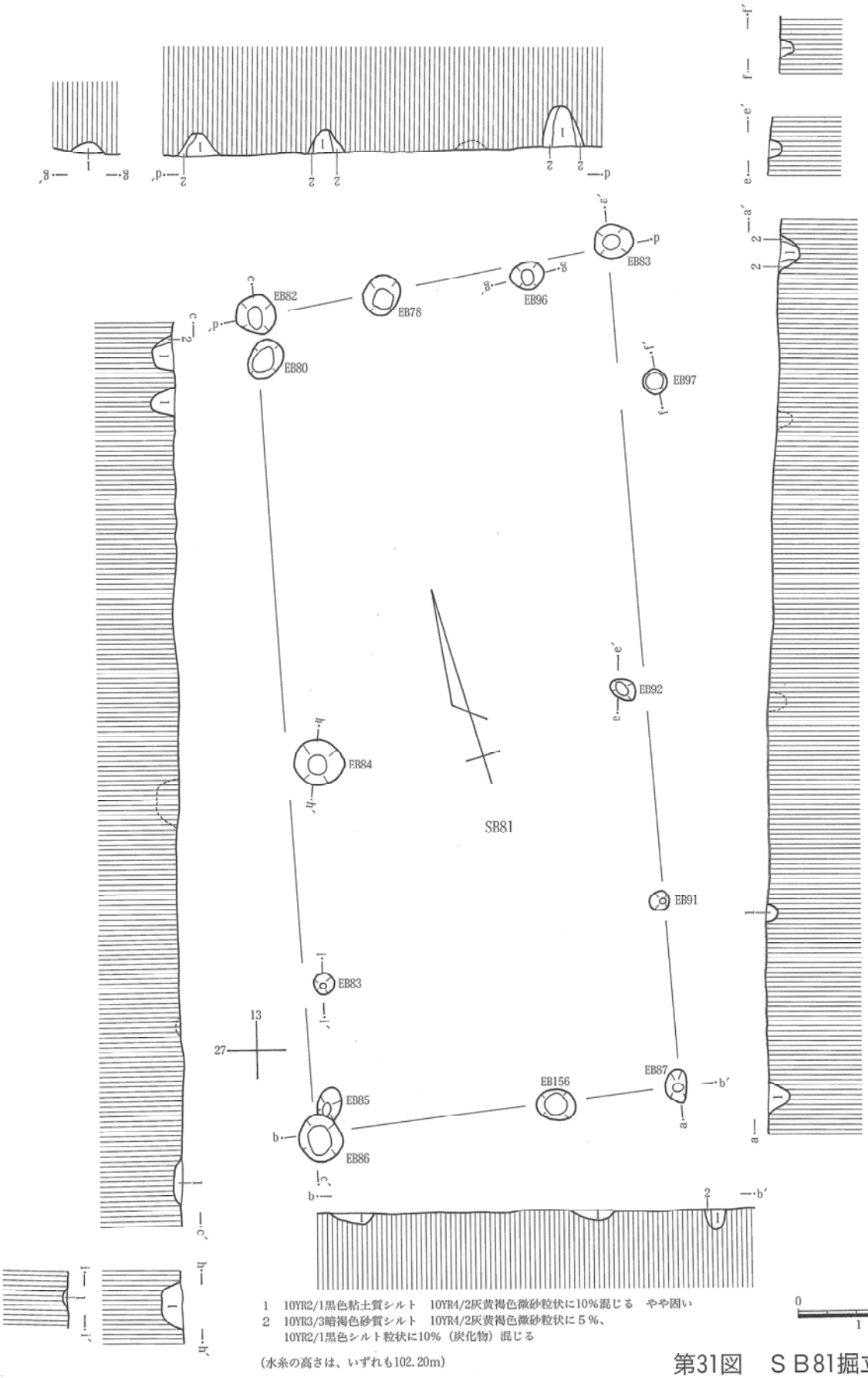


1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる　やや固い
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト　10YR2/1黒色シルト粒状に10%（炭化物）混じる　固くしまる
3　10YR2/2黒褐色砂質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる　固くしまる
4　10YR3/2黒褐色砂質シルト　10YR2/1黒色シルト粒状に３%（炭化物）混じる
5　10YR3/3暗褐色砂質シルト　均質

（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　2m
1：80

第30図　ＳＢ32掘立柱建物跡

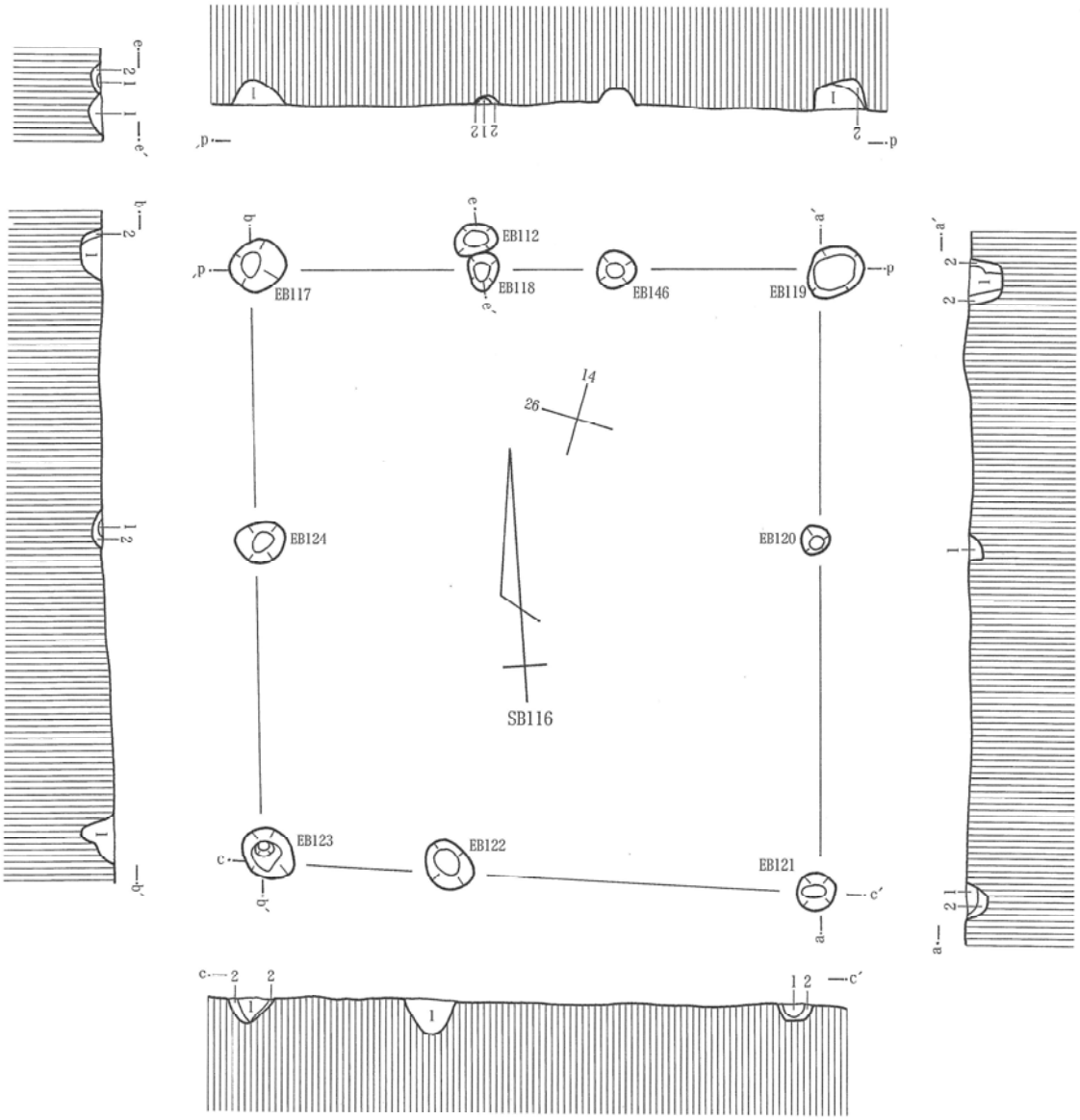


1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂粒状に10%混じる　やや固い
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂粒状に５%、
　　10YR2/1黒色シルト粒状に10%（炭化物）混じる

（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　1m
1：40

第31図　ＳＢ81掘立柱建物跡

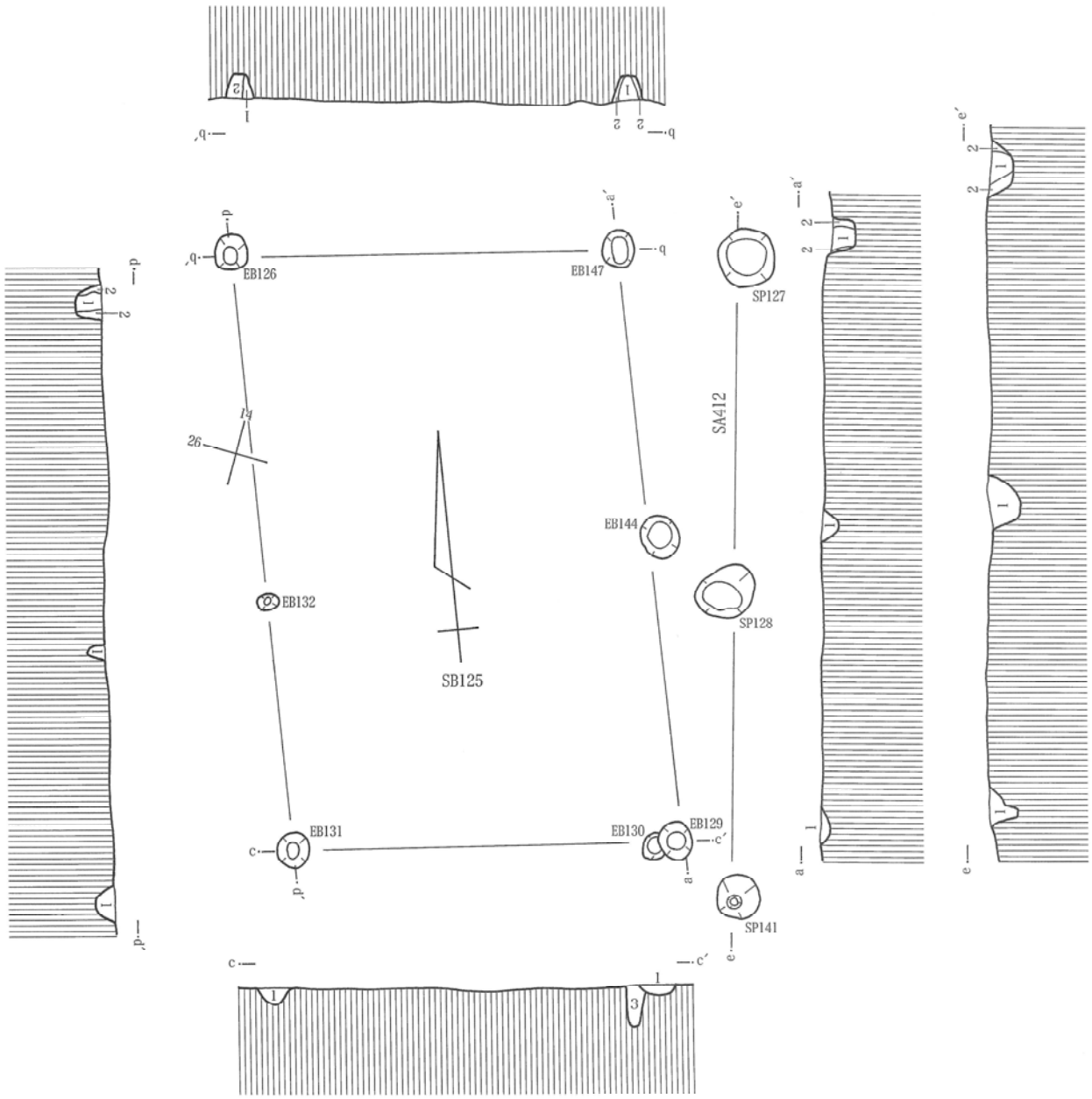


1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる　やや固い
2　10YR3/3　暗褐色砂質シルト　10YR2/1黒色シルト粒状に10%（炭化物）混じる　固くしまる

（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　1m
1：40

第32図　ＳＢ116掘立柱建物跡

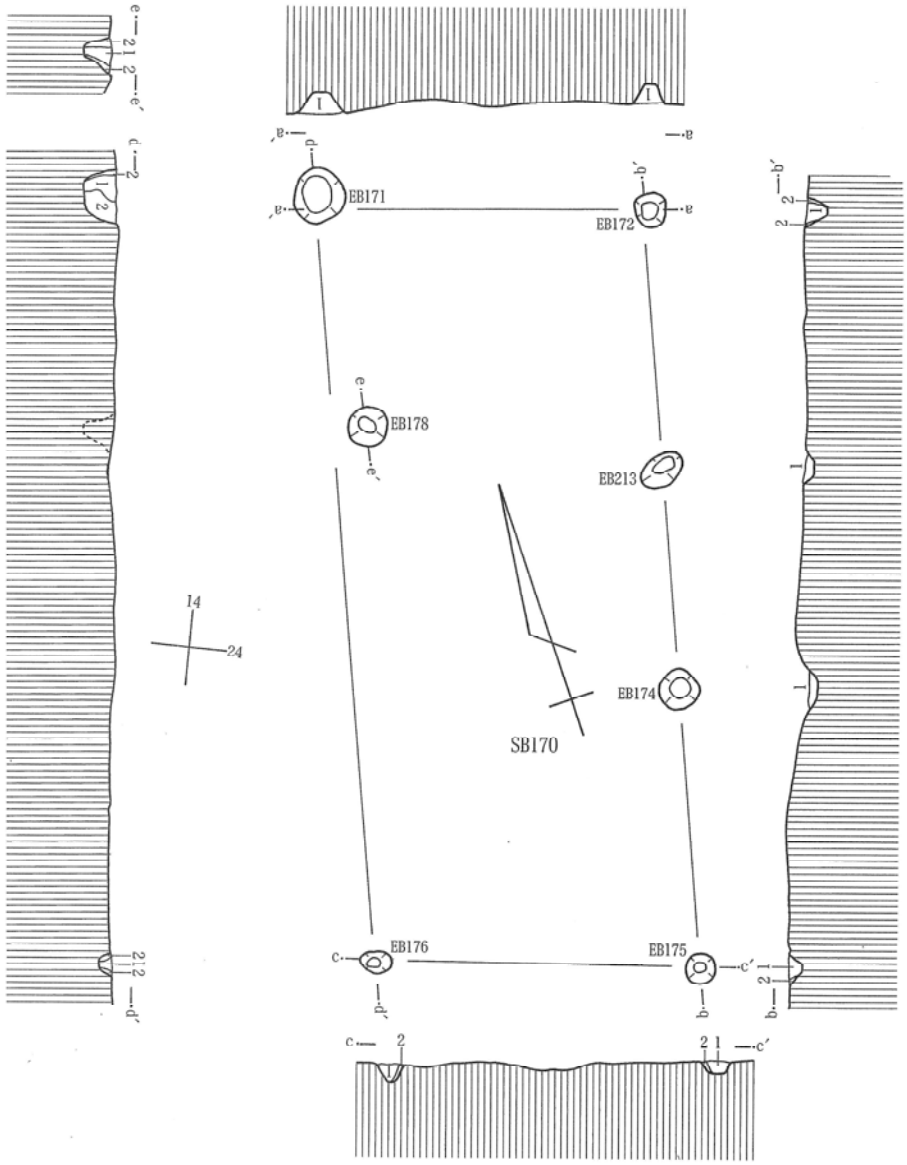


1　10YR2/1黒色砂混じり粘土　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20％混じる　やや固い
2　10YR3/3暗褐色微砂　10YR2/1黒色粘土粒状に５％混じる　固くしまる
3　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に30％混じる　やや固い

（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　1m
1：40

第33図　ＳＢ125掘立柱建物跡・ＳＡ412柵列跡

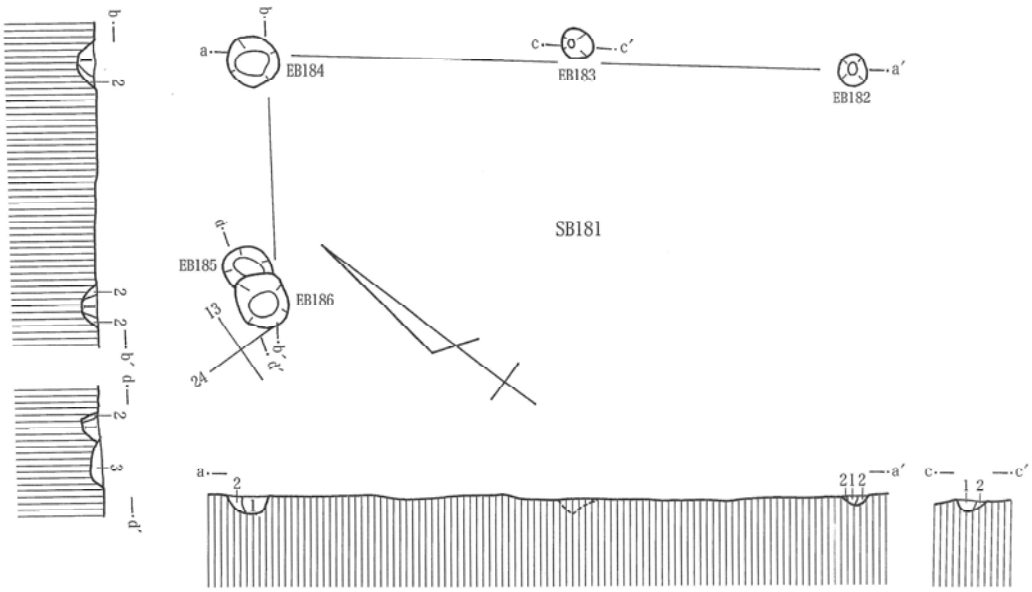


1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/1褐灰色微砂粒状に５％混じる　やや固い
2　10YR3/3暗褐色微砂　10YR2/1黒色シルト粒状に５％（炭化物）混じる　固くしまる

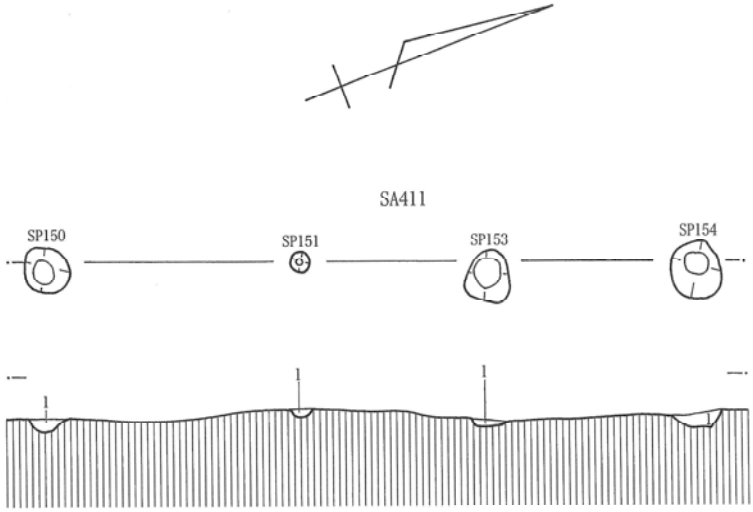
（水糸の高さは、いずれも102.20m）

0　1m
1：40

第34図　ＳＢ170掘立柱建物跡



SB181
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂粒状に5%混じる　やや固い
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト　10YR2/1黒色シルト粒状に10%（炭化物）混じる　固くしまる
3　10YR2/1黒色シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂斑状に10%混じる　やや固い



SA411
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂粒状に5%混じる　やや固い

(水糸の高さは、いずれも102.20m)

0　1m
1：40

第35図　ＳＢ181掘立柱建物跡・ＳＡ411柵列跡

井戸跡・土坑 (遺構：第36図～37図)

ここでは、中世の井戸跡・土坑の主なものについて述べることとする。なお、井戸跡はすべて素掘り井戸であり、開口部の形状が当時から変化したと思われ、「技術として大差がなく、形は崩壊によって変わるため、形状による細別は原則として行わない」(宇野 1982) こととする。

ＳＥ７ (遺構：第36図)

13－24Ｇで検出された。平面形は、やや西側に張り出した不整楕円形である。南北長114cmで東側が欠損しているため東西長は不明である。深さは確認面から70cmを測る。底面は、北側に極端に窪み、壁は垂直に立ち上がり開口部で外側に大きく開く。覆土は、黒色粘土質シルトの単層で灰黄褐色微砂をブロック状に含む。調査区内にある井戸跡に共通して見られる堆積状況で、人為的な埋積である。近接する建物はＳＢ181で北東に３m離れる。

ＳＥ８ (遺構：第36図)

13―25Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。南北長が120cmであり、深さは確認面から50cmを測る。底面が北側で少し窪み、壁がやや垂直に立ち上がる。北側で開口部が少し広がる。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はＳＢ181で東に4.5m離れる。

ＳＥ11 (遺構：第36図)

13―26Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。上層が削平されている。長径76cmで短径70cmであり、深さは確認面から36cmである。壁はやや垂直に立ち上がり、断面形はレンズ状を呈する。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はＳＢ81で東に3.5m離れる。

ＳＥ12 (遺構：第36図、遺物：51－113)

13－26Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径94cmで短径86cmであり、深さは確認面から60cmである。底面はやや南側に傾斜し、壁はやや垂直に立ち上がる。遺物として曲物の底板１点が底面から出土した。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はＳＢ81で東に4.4m離れる。

ＳＥ59 (遺構：第36図)

13―26Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径80cmで短径74cmであり、深さは確認面から68cmである。断面形は筒形でロート状を呈する。覆土は前述した人為的な埋積である。近接する建物はＳＢ81で東に0.2m離れる。

ＳＥ199 (遺構：第37図)

17―25Ｇで検出された。西側でＳＫ198を切っている。平面形は、南北に長い楕円形である。長径96cmで短径84cmである。深さは確認面から50cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、開口部直下で外側に開く。覆土は前述の人為埋積である。近接する建物はＳＢ170で西に7.5m離れる。

ＳＥ208 (遺構：第37図)

16－24Ｇで検出された。平面形は、やや北側に張り出した不整楕円形である。長径110cmで短径100cmである。深さは確認面から68cmである。壁の立ち上がりが垂直で、開口部でやや内側に入る。覆土は単層で人為埋積である。近接する建物はＳＢ170で西に５m離れる。

ＳＥ209 (遺構：第37図)

19―24Ｇで検出された。平面形はほぼ円形である。長径90cmで短径88cmである。深さは確認面から68cmである。壁が垂直に立ち上がり、底面が平坦である。覆土は単層で人為埋積である。近接する建物はＳＢ170で北西に3.5m離れる。

ＳＫ336 (遺構：第37図)

19―23Ｇで検出された。調査区を東側に若干拡張した箇所で確認された。平面形はほぼ円形である。長径64cmで短径62cmである。深さは確認面から24cmである。断面形がレンズ状で、覆土が単層で井戸跡と同じ傾向を示す。上層での削平をあまり受けていない浅い掘り込みであることや底面が砂状ではないため土坑と判断した。

ＳＤ４ (遺構：第38図・39図、遺物：52―114～53―126・54―129～55―133・55―135～56―137)

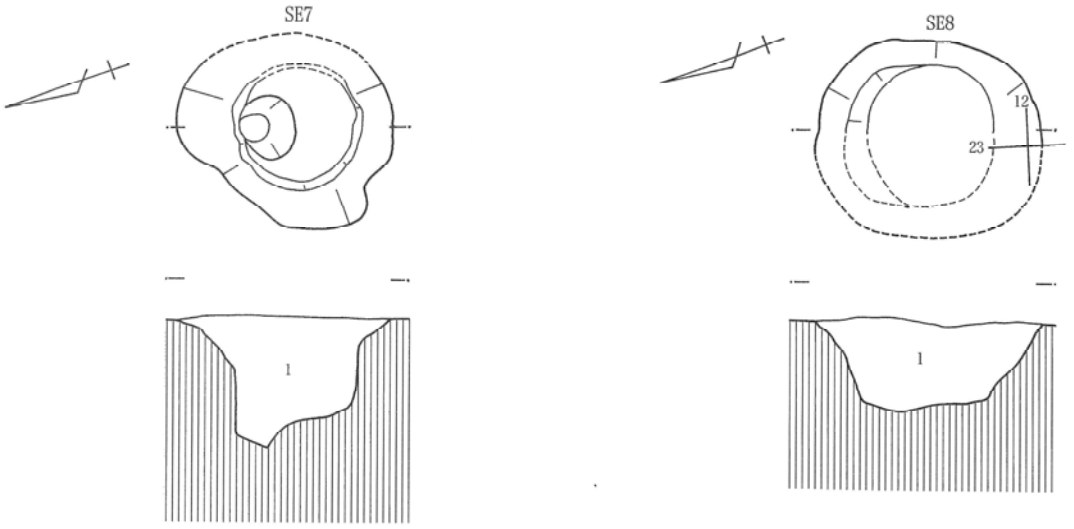
11－30～18―20Ｇで検出された。北側でＳＤ５を切っている。南側で上層からＳＧ３を切っているものと推定される。北側と中央部で西側にＬ字に屈曲する溝跡である。コの字形に建物跡の東側を区画している。北西側一部が一部側道工事との関連で調査できなかったが、遺構の大部分が検出できたことと木製品などの遺物の分布が東側に偏っていたため大方の内容を把握することができた。幅0.5～１mで現存長82mであり、深さは確認面から５～20cmを測る。覆土は単層で黒色粘土質シルトを基調とし灰黄色褐色微砂をブロック状に混じる。遺物は、輸入磁器２点、須恵器系陶器４点、土製品１点、砥石１点、木製品11点、動物遺体２点が出土している。

ＳＸ195 (遺構：第40図)

17―26～16―25Ｇで検出された。平面形は南側に張り出したＴ字形である。長径３mで短径2.3mであり、深さは確認面から36cmを測る。覆土は井戸跡同様に黒色粘土質シルトで人為埋積である。

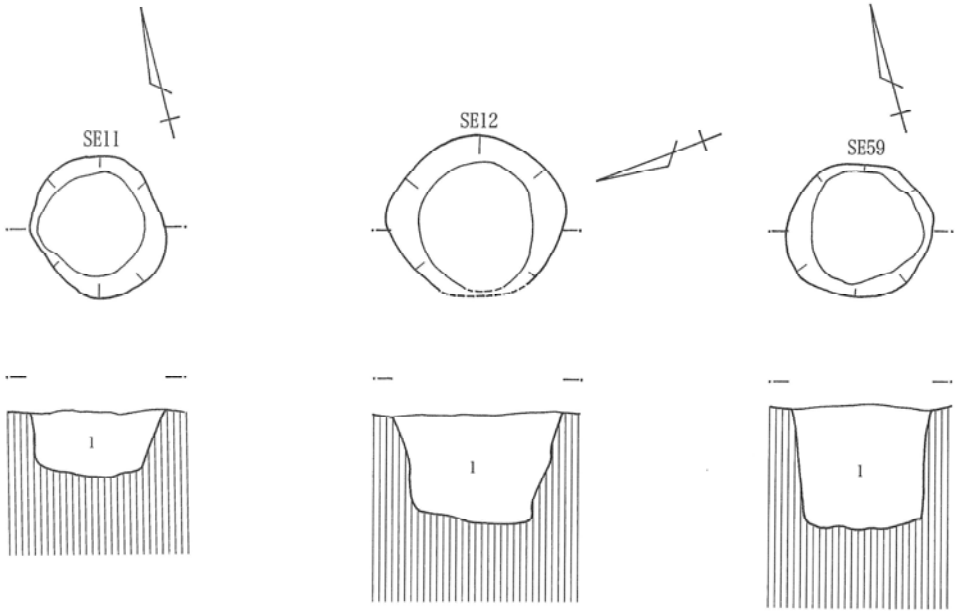
ＳＸ342 (遺構：第40図、遺物：55―134・56―138・139)

15―29～15―28Ｇで検出された。南西側でＳＤ６を切っていると推定される。平面形は隅丸長方形である。長径3.8mで短径2.5mであり、深さは確認面から40cmを測る。北側でやや緩やかに立ち上がる。覆土は単層で黒色粘土質シルトを基調とした人為埋積である。覆土北西側に自然木が堆積する。遺物はすべて覆土中位から上層にかけて出土している。底面から出土している遺物はなかった。遺物は、須恵器系陶器１点、土師器甕１点、木製品１点、焼骨片４点が出土している。人骨は、南壁寄りの覆土内のみで出土している。埋葬に関連した施設なのか、人為埋積の際に入ったものかは不明である。



SE7
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

SE8
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる



SE11
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

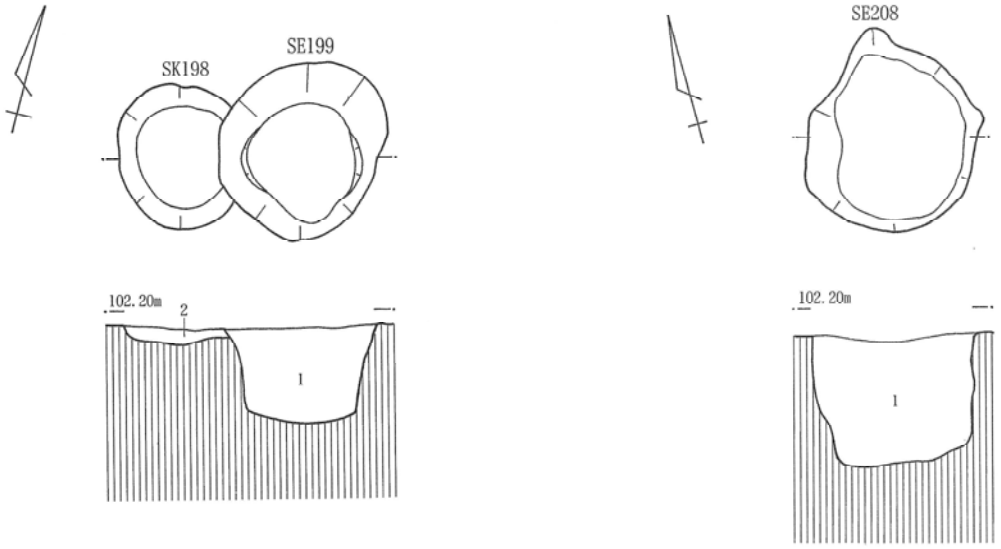
SE12
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

SE59
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

(水糸の高さは、いずれも102.20m)

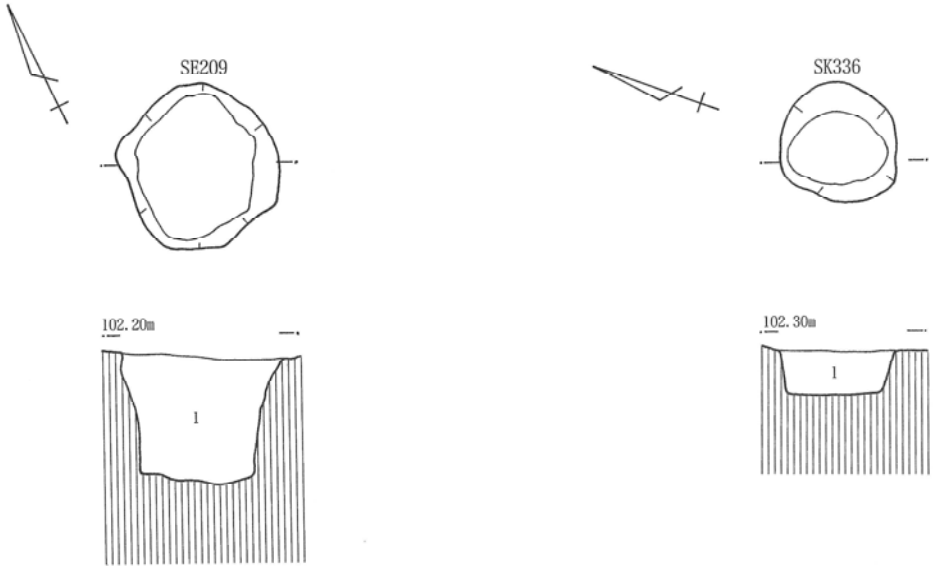
0　1m
1：40

第36図　ＳＥ７・８・11・12・59井戸跡



SK198　SE199
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト　10YR2/1黒色粘土質シルト粒状に30%（炭化物）混じる

SE208
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

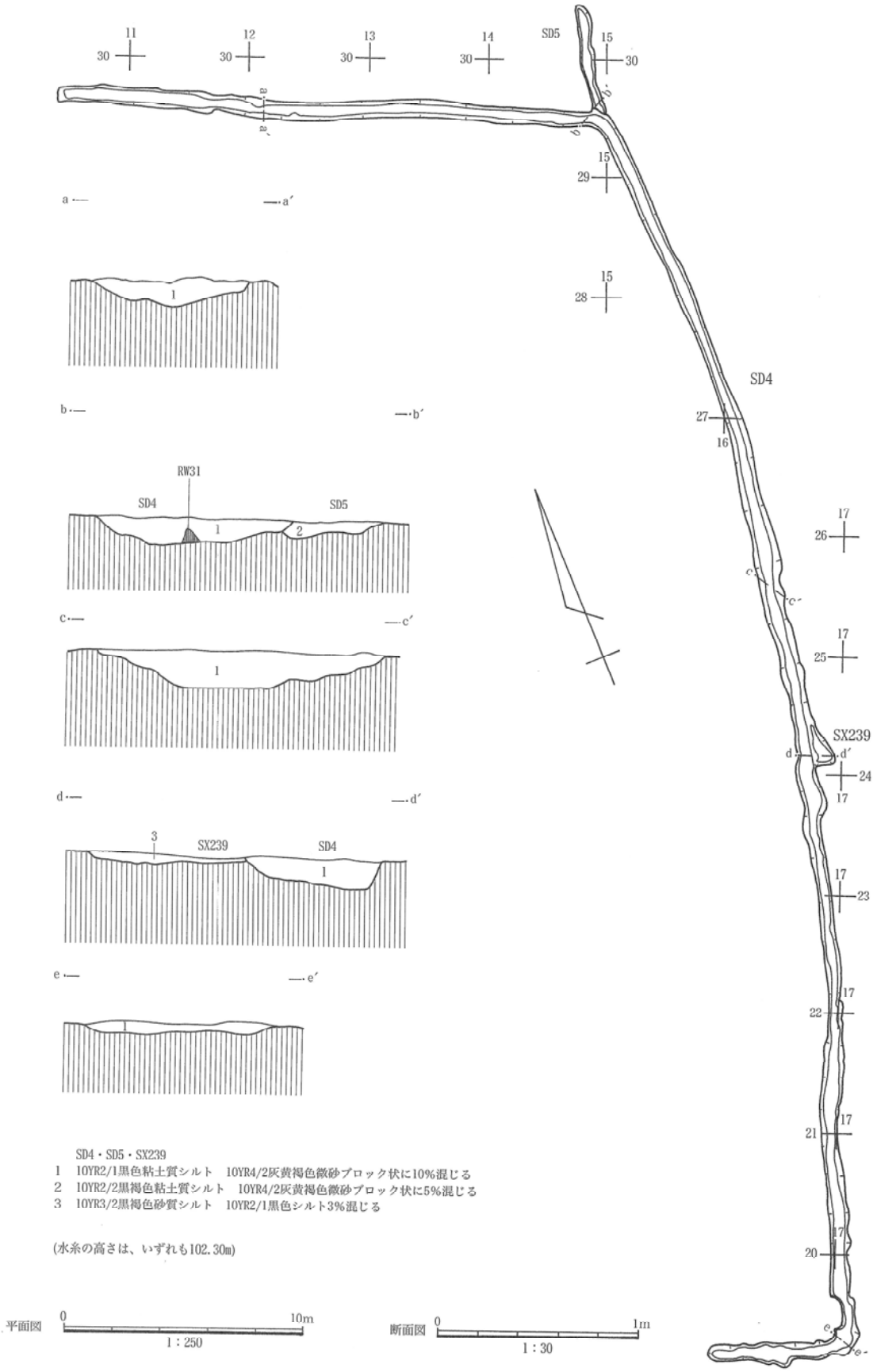


SE209
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

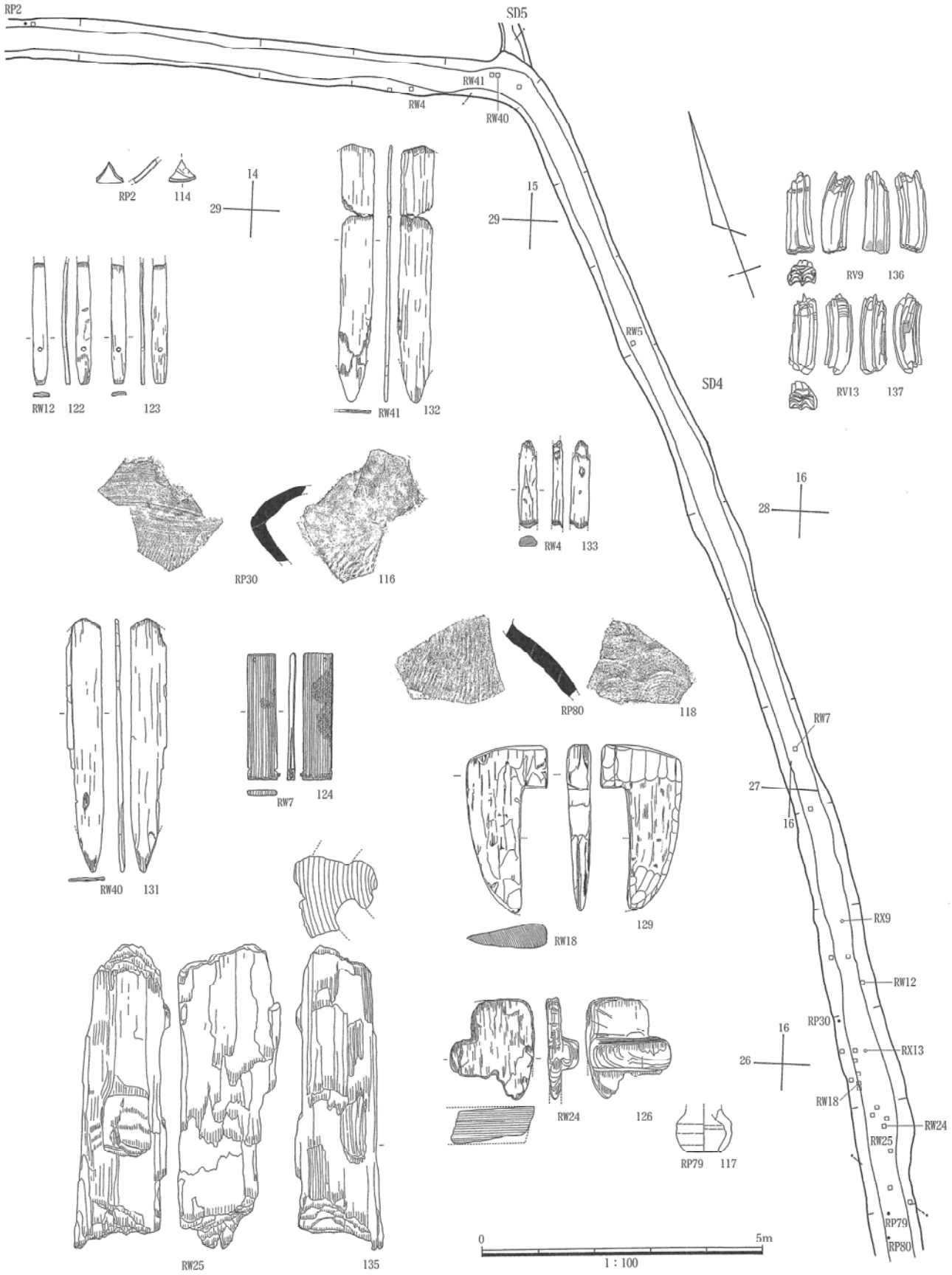
SK336
1　10YR2/1黒色砂質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に20%混じる

0　1m
1：40

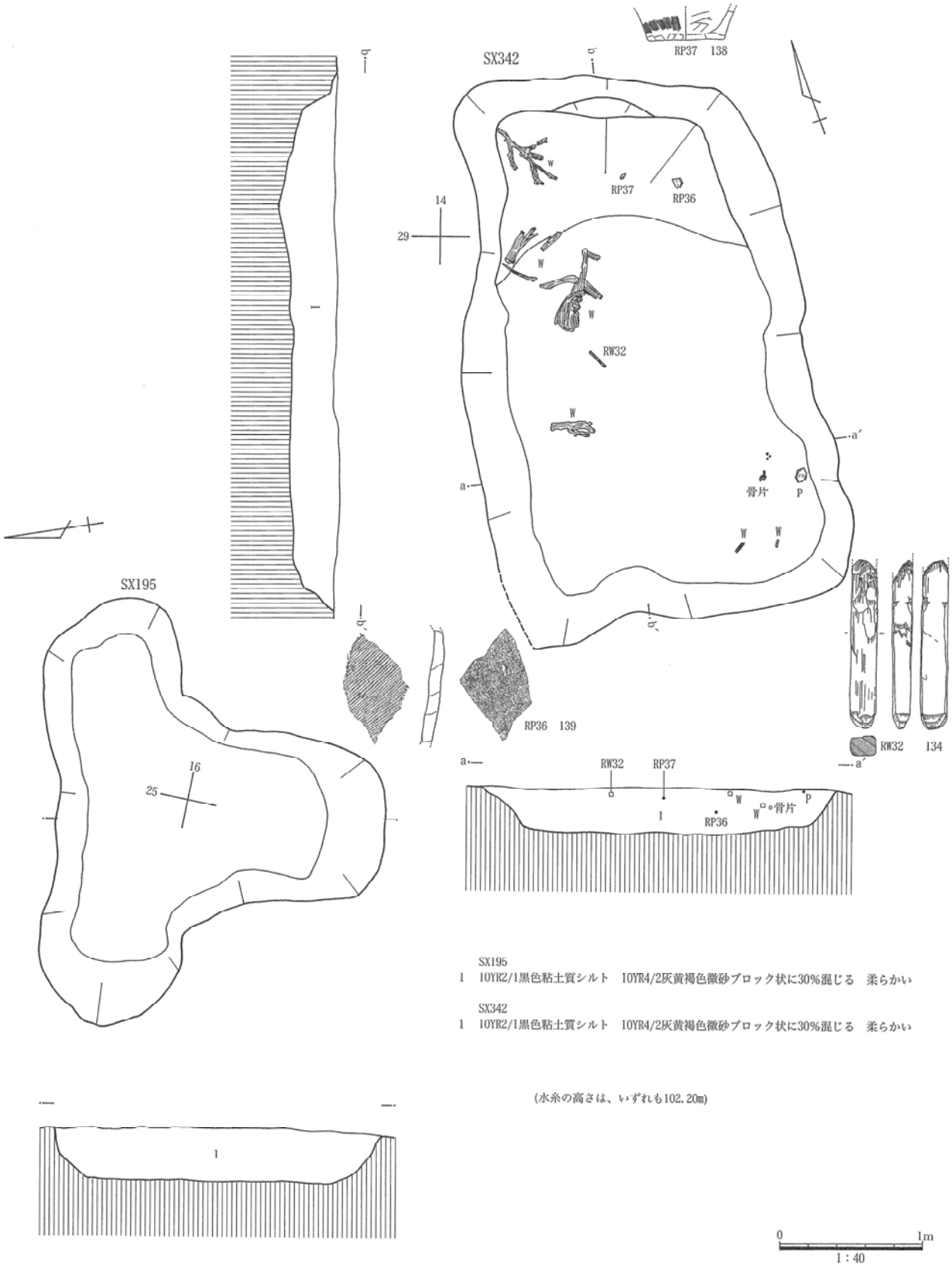
第37図　ＳＥ199・208・209井戸跡、ＳＫ198・336土坑


SD5
SD4
SX239
RW31
SD4・SD5・SX239
1　10YR2/1黒色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に10%混じる
2　10YR2/2黒褐色粘土質シルト　10YR4/2灰黄褐色微砂ブロック状に5%混じる
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト　10YR2/1黒色シルト3%混じる
(水糸の高さは、いずれも102.30m)
平面図　0　10m　1：250
断面図　0　1m　1：30

第38図　ＳＤ４溝跡



第39図　ＳＤ４溝跡遺物出土状況



第40図 ＳＸ195・342性格不明遺溝

2　出土した遺物

ＳＧ３(遺物：41―1～45―37・53―127)

先に古式土師器について述べる。(41―1)は、坏で扁平な球形の体部にクの字状に開く口縁部をもつ。底部中央に若干の窪みがある。(41－３・４)は高坏で中実棒状脚とハの字に開く裾部をもつ。器台は、口縁部が内弯する(41－５・７)と外反する(41－６)がある。脚部に３方に透孔を施して丁寧にミガキ調整を行っている(41－７・８)。(41－９)は鉢である。底部が平底で、体部から口縁部まで内弯して立ち上がる。(41－２・10～42―14)は壺である。(41－２)は、体部のみであるが小型の直口壺と推定される。(41―14)は底部のみである。(41―10)は、体部中位から屈曲外反する口頸部をもつ壺である。(42―11)は若干膨らむ体部に短い口縁部がつく。短い口縁部が立つ(42―12)もある。複合口縁をもつ(42―13)がある。甕は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(42―19)、口縁部が外傾・外反し、体部中位が胴張りのもの(42―15・17・18・25)、口縁部がやや直立するもの(43―22)、口縁部が外反し、なで肩のもの(42―16・43―20・21・24)、体部上半に最大径のあるもの(43―23)がある。甕のハケメ調整をするもの以外にヘラ削りやナデによる調整もあり、塩釜式期の最終段階周辺の様相を示す(青山 1998)。(45―36)は、古式土師器と共伴した板状木製品で、出土時には暗渠により斜めに壊されていた。用途は不明である。その他上層で須恵器甕体部(44－30)、近世陶器瓶底部(44―31)、擂鉢(44―32・33)、金属製品キセル吸い口(44―34)、銅製の半球状製品(44―35)、木製品の田下駄と思われる農具(45―37)が出土している。曲物の底板(53―127)も出土している。近世の遺物は、小破片で図化はしなかったが、外面に二重網目文のある肥前産の碗が共伴している。

ＳＧ２(遺物：46―38～45)

(46－38)は古式土師器甕頸部で、(39)は底部である。覆土中位から上層にかけて古式土師器小片が僅かに出土している。上層および流れ込みの遺物として須恵器坏(46―40)、赤焼土器坏(46―41)が出土している。体部が直線的に立ち、口唇部で外反する。９世紀後半の所産である。その他土製品として土錐と思われる遺物(46―42)がある。中世輸入磁器として(46―43・44)がある。(46―43)は口縁部のみであるが、直立する口縁部をもち、15世紀半ばに端反り碗が出現する前の様相である。碗自体もその時期には少なくなる傾向がある。(46―44)は、染付皿で、高台は小さく低く、高台畳付には細かいヘラ削りがなされ、高台裏には放射状のカンナ削り痕がある。見込みの文様については、あまり残存していないことから不明である。その他産地不明の近世磁器体部(46－45)が出土している。

ＳＫ329(遺物：46―46・47)

(46―46・47)は古式土師器甕の直立する口縁部(46)とやや球形の体部をもつ(47)が出土している。

ＳＨ410(遺物：46―48・49)

古式土師器甕小片が出土しており、直立する口縁部(46―48)と平底の底部(46―49)がある。

ＳＤ302(遺物：46―50～51―112・53―128)

流れ込みで古墳時代後期の高坏(46―51)が出土している。短脚でハの字に開く器形である。(49

—94) は古式土師器甕でクの字に屈曲して口縁端部で外反する。

(47—52～48—83・50－103・104) は須恵器坏である。底部が残存しているものの切り離しは、(47—65) のヘラ切りを除いては全て回転糸切りである。器形的に概略すると、底径がやや小さく逆台形状を呈する器形 (47—53・55・64・65)、底径がやや小さく体部が直線的に立ち端部で外反する器形 (47—52・56・57・58・48—76)、底径が小さく体部が直線的に立つ器形 (47—54・59～63・66・48—77・50—103) がある。(49—84～88) は、須恵器有台坏である。底部切り離しがヘラ切りで底径が小さい器形 (49—86・88)、底部切り離しが回転糸切りで体部が内弯する器形 (49—84・85)、高台部が低い器形 (49—87) がある。墨書土器は、21点出土している。郷名「福有」が書かれている (47—52)「福有南」がある。郷名のある墨書土器は、県内では「大山郷」と書かれた一の坪遺跡 (河北町) がある。その他、「㊤」・「物」・「古」・「今」などがある。特に「㊤」(47—54・56・48—68) が多い。また、口縁部内面に漆が付着しているもの (48—83) がある。(50—99～101) は双耳坏である。把手はすべて体部中位から斜方向に延びている。(49—90～93) は、須恵器蓋である。口縁部が屈曲する (49—90・93)、直線的な口縁部の (49—92)、つまみ外面中央部が窪む (49—91) がある。(49—97) は、短頸壺でやや肩の張らない器形である。(49—96～98) は、須恵器甕である。大型で平底の (49－95)、やや頸部が屈曲する (49－96)、頸部から肩部にかけての (49—98) がある。

(49—89・50—102) は、赤焼土器有台坏である。底径がやや小さく、切り離しが回転糸切りの (49—89)、低い高台が付き、直線的に立ち上がる (50－102) がある。また、(50—105) は赤焼土器皿である。低い高台が付き、短く体部から口縁部にかけて直線的にのびる。(50—106) は赤焼土器鉢である。底部切り離しが回転糸切りである。内面に漆が付着している。(50—107) は口縁部が緩やかに外反する土師器甕である。内外面にハケ目調整を施す。(50—108・109) は、土師器有台坏である。２個体とも高台部は低く、内面に黒色処理を施す。(50—109) の底部切り離しは回転糸切りである。

石製品では砥石 (51—111) がある。欠損があり、３面に使用痕が認められる。２面に切り離し痕がある。木製品では、挽物大盤 (51—112) がある。有台で器厚が厚く、見込み部分窪みが少なく、内面が平坦である。ケヤキ材を使用している。(53—128) は曲物の底板のみの出土である。木釘が残っており、側板と接合していたと思われる。上層で確認された近世陶器擂鉢は、内外面にオリーブ色の施釉がされ、内面に細かい卸目がある。

ＳＤ４ (遺物：52—114～53—126・54—129～55—133・55—135～56—137)

(52—114・115) は青磁碗の体部である。(52—114) は、透明な青磁釉が掛けられ、貫入が入る。色調は、7.5Y7/2灰白色である。内面に劃花文を施している。(52—115) は、やや不透明な青磁釉が掛けられている。色調は、7.5Y6/1灰色である。内面に飛雲文を施している。釉薬の色調から龍泉窯系統の窯から搬入されたことが想定できる。遺構内からは須恵器甕 (52—116・118・120)、壺 (52—119) 破片が出土している。甕の器面調整が、外面タタキで内面アテ痕である。升川遺跡 (遊佐町) 出土の須恵器系陶器は古代の手法をそのまま継承しており、本遺跡で12世紀代の輸入磁器を出土することから須恵器甕などは検討を要する。また、土鈴 (52—117) と思われる土製品が

出土している。石製品としては砥石(52—121)がある。５面に使用痕がある。

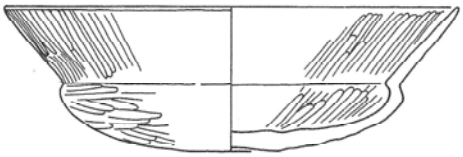
本遺構の中でも多くの出土があった木製品について述べる。(52—122・123)は、扇骨である。２枚は重なった状態で出土した。基部のみの出土で、要に綴じ孔を１つ開けている。綴じ紐等は確認されなかった。スギ材を使用している。(52—124)は、漆刷毛である。１枚の薄い板材を穂先部のみ切れ目を入れて、穂を挟んでいる。穂先部横で三角の切り抜きをいれて綴じたものと思われる。柄部に小孔が開けられている。穂先と柄部に漆が残存している。スギ材を使用している。(53—125)は、真直に延びた小刀の鞘である。表面は甲高に削りだし、鞘先は細かな削りで整形されている。裏面は、刀形と合わせて刳りだし、中位に小さい孔を開けている。鞘尻には半円形の刳形を施し、薄く削り出している。スギ材を使用している。(53—126)は、連歯下駄である。台前部が欠損しているが、形状は長楕円形の台に台形状の歯が２枚付くことが想定される。ケヤキ材を使用している。(54—129)は、鍬状木製品である。鍬身のみで1/2は欠損している。コナラ材を使用している。(54—130〜133)は塔婆である。(54—130〜132)は、上端が圭頭状をなし、下端が尖頭状に削り出されている。いずれも欠損がある。厚さは３㎜代である。(132)に墨痕が確認されたが、釈読はできない。スギ材を使用している。(55—133)は、断面形で長方形にやや厚く整形しているもので、上端・下端ともに欠損している。スギ材を使用している。(55—135)は部材である。２方向のホゾ穴を確認できる。腐植による剥落があるため、工具による面取りの状況が明確ではない。スギ材を使用している。(56—136・137)は馬歯である。出土位置から同一の動物遺体かと思われる。歯根部が欠損しており、表面も腐植が進んでいる。表面に平地の遺跡に特徴的に確認される藍鉄鋼が付着している。塔婆と共伴することから祭祀的な意味合いが考えられる。

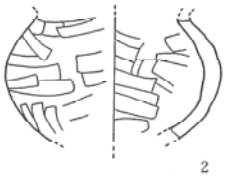
ＳＸ342(56—138・139)

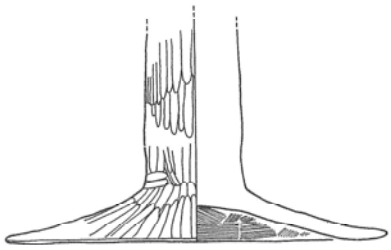
(56—138)は土師器底部である。底部から直線的に立ち上がる器形で奈良・平安時代の所産である。(56—139)は須恵器系陶器である。体部の破片で、細かい条線状のタタキ目を施している。内面に押圧痕が認められる。珠洲系陶器と思われるが、やや生焼で胎土が粗砂混じりの点から須恵器系陶器とした。

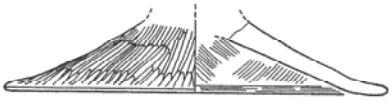
グリッド・ピット・トレンチ・出土地点不明遺物(56—140〜148)

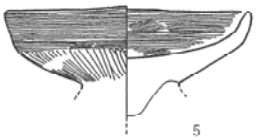
古墳時代では、中空棒状脚をもつ高坏(56—140)、短脚の高坏(56—141)がある。奈良・平安時代の須恵器坏(56—143)、高台付坏(56—142)、土師器小破片(56—144)、内面黒色処理の高台付坏(56—147)や近世陶磁器(56—145・146・148)がある。底部切り離しは(142)は回転糸切り、(143)はヘラ切り、(147)は菊花状ナデツケ調整を施す。(56—145)は、外面に灰オリーブ色の釉掛けをしている。(56—148)は、肥前産の染付碗である。


1

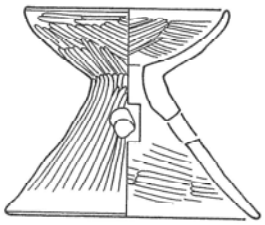

2

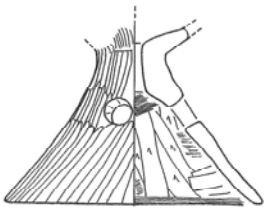

3

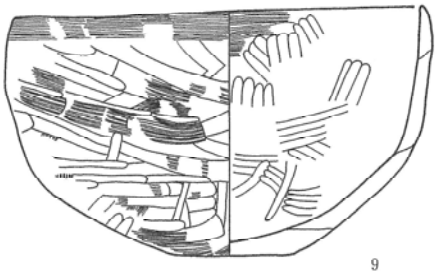

4

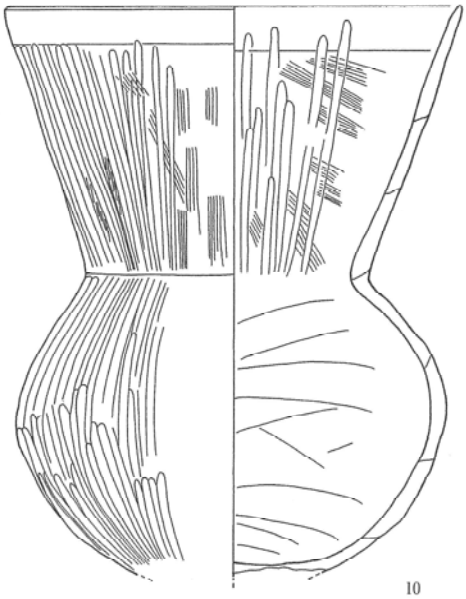

5

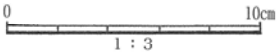
6


7

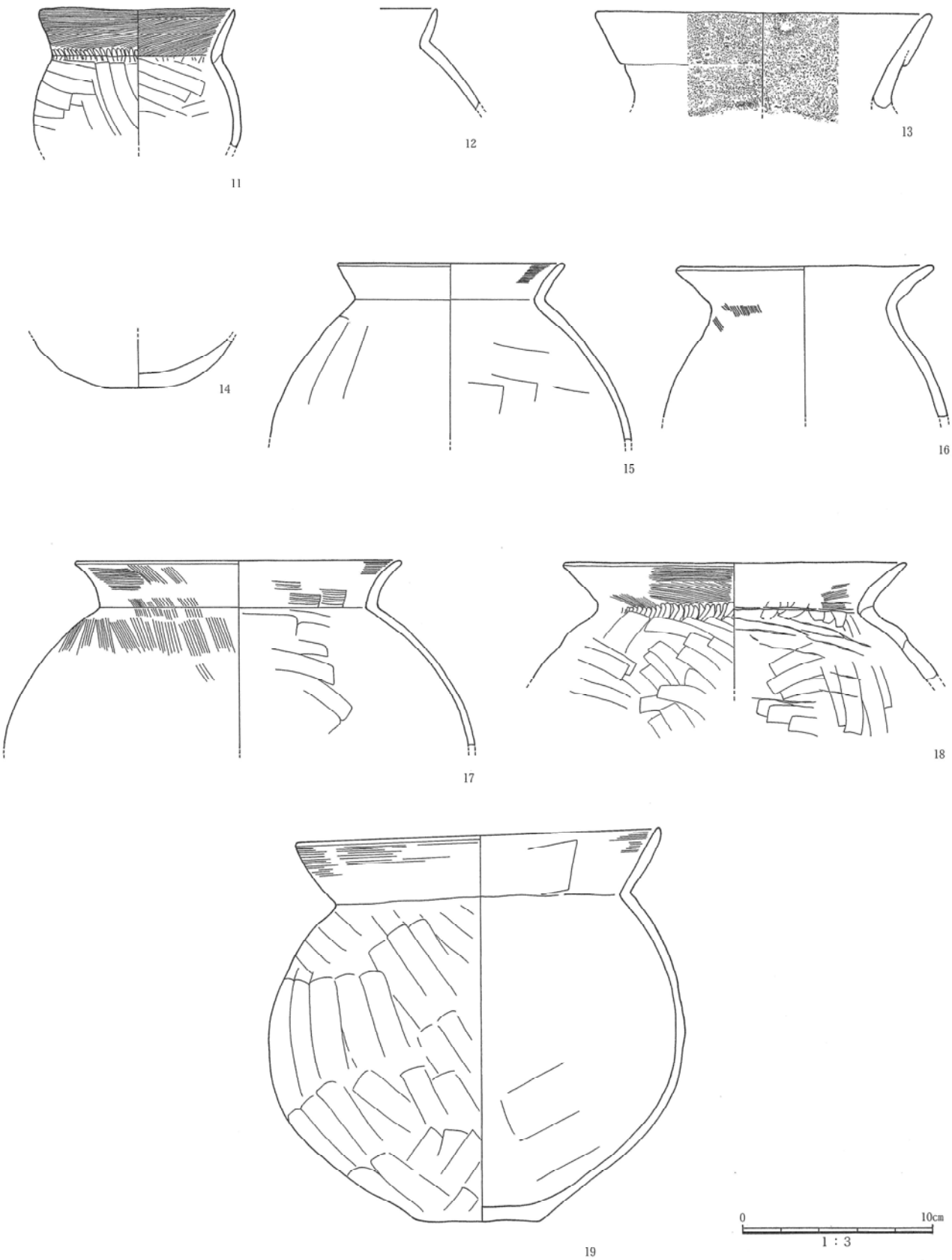

8


9

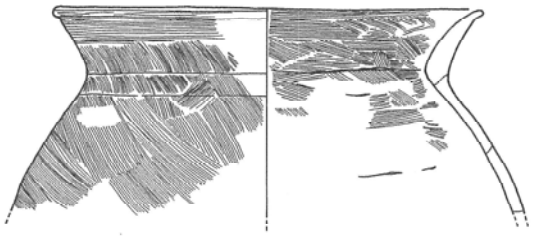

10



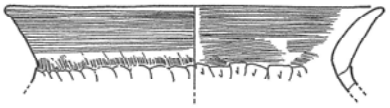
第41図　遺物実測図（１）



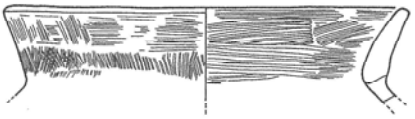
第42図　遺物実測図（２）



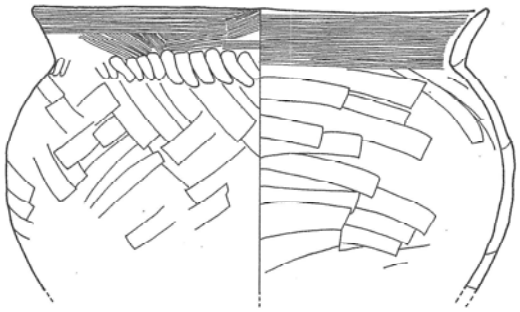
20



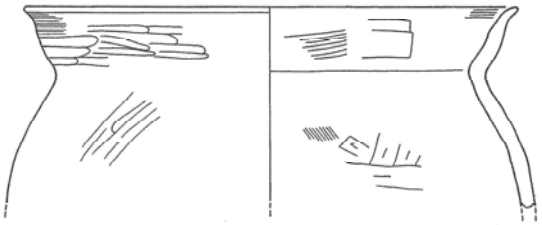
21



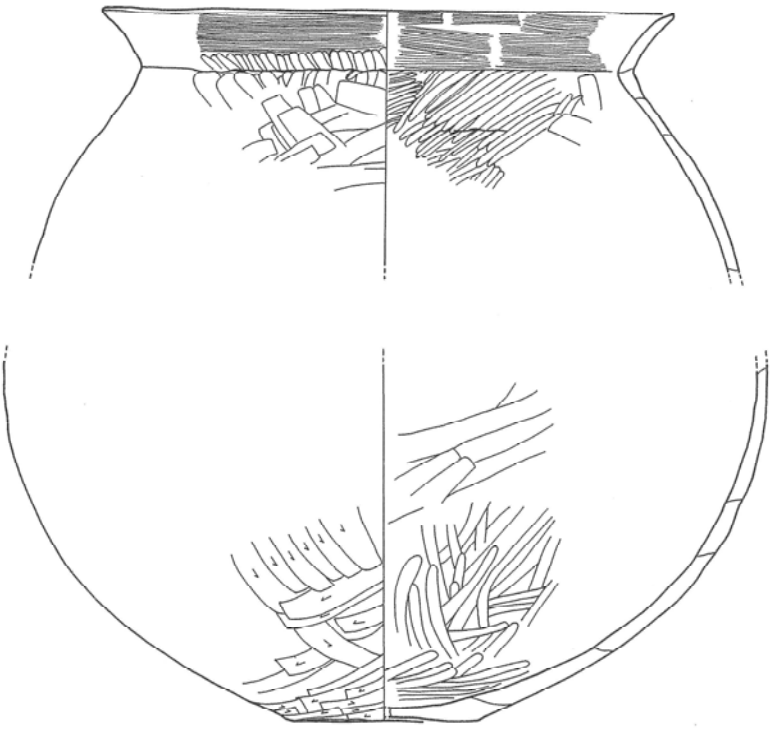
22



23



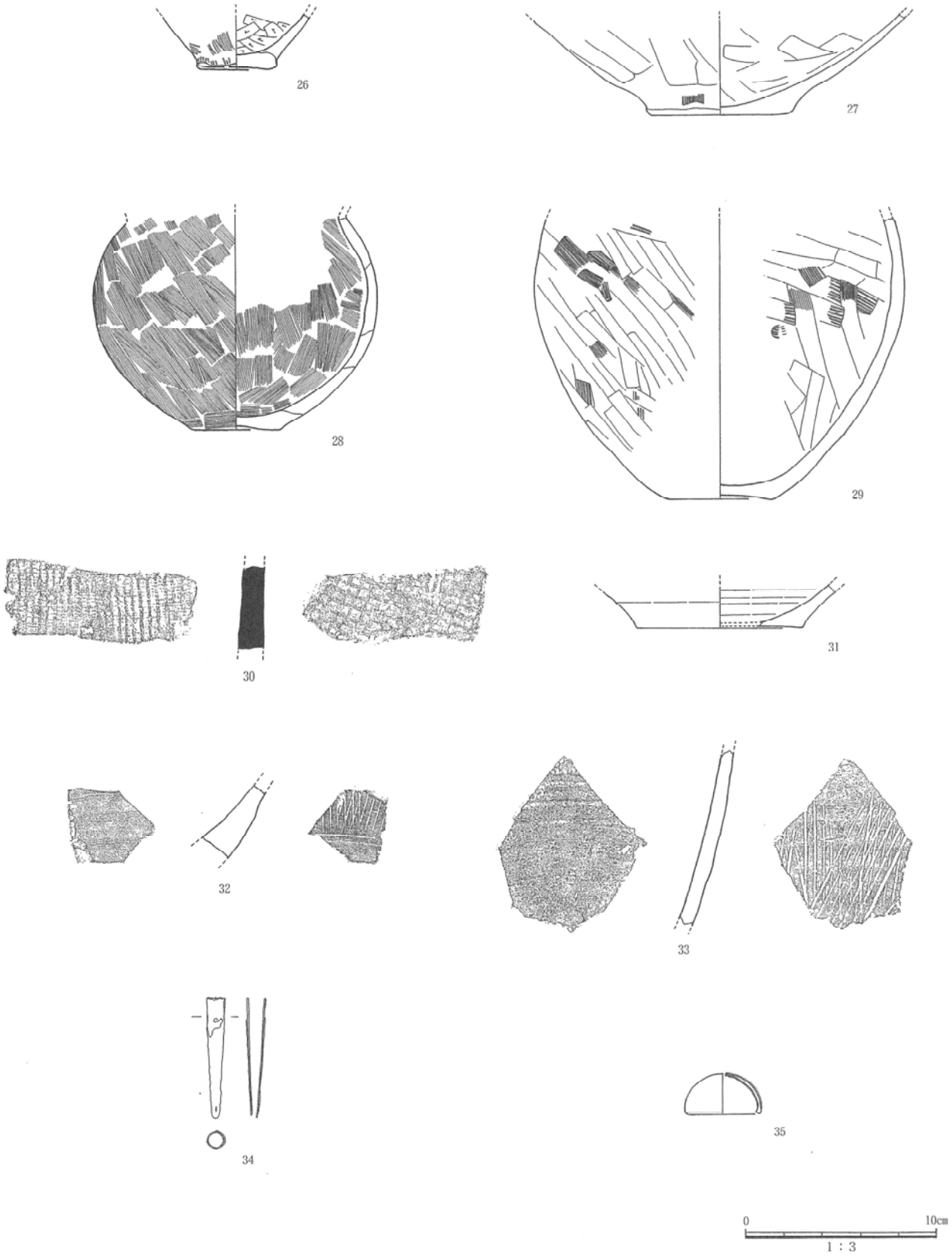
24



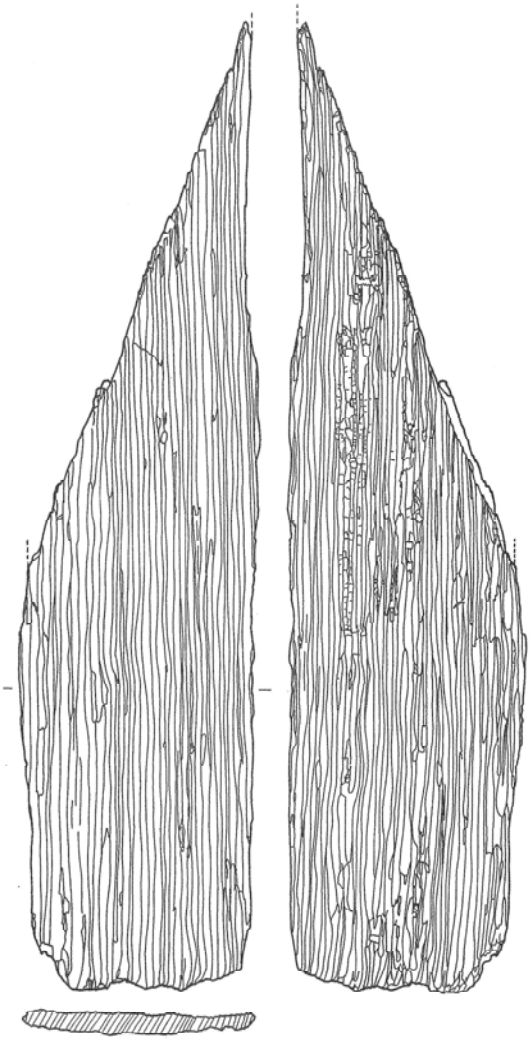
25

0　10cm
1：3

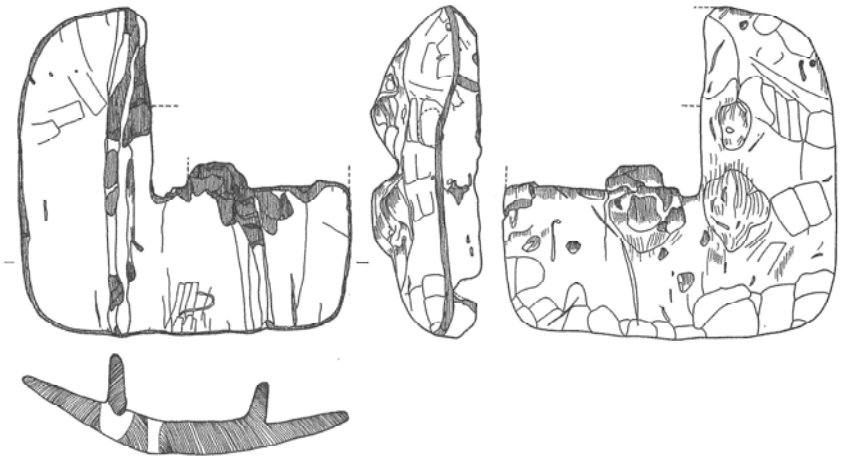
第43図　遺物実測図（３）



第44図　遺物実測図（４）



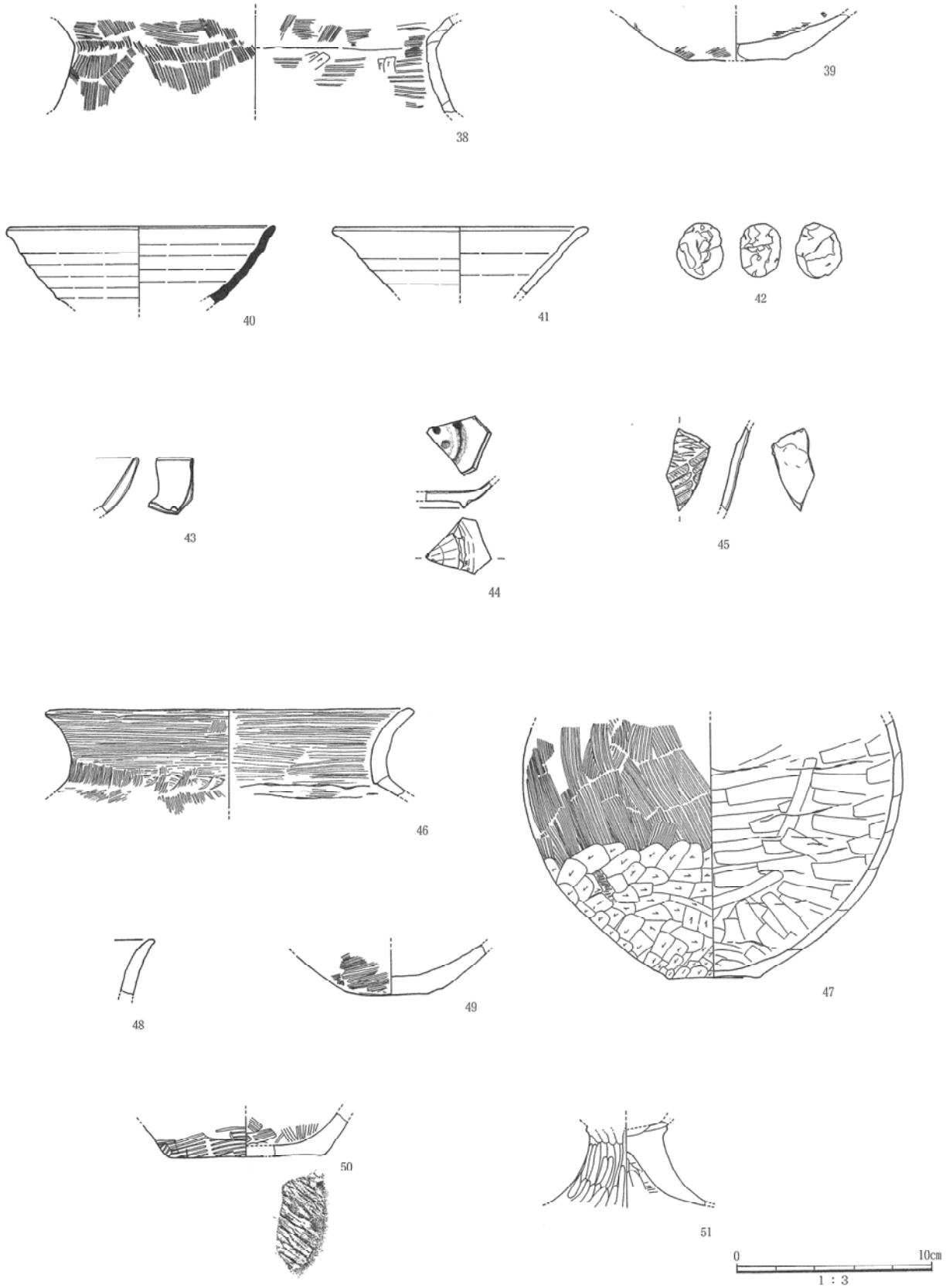
36



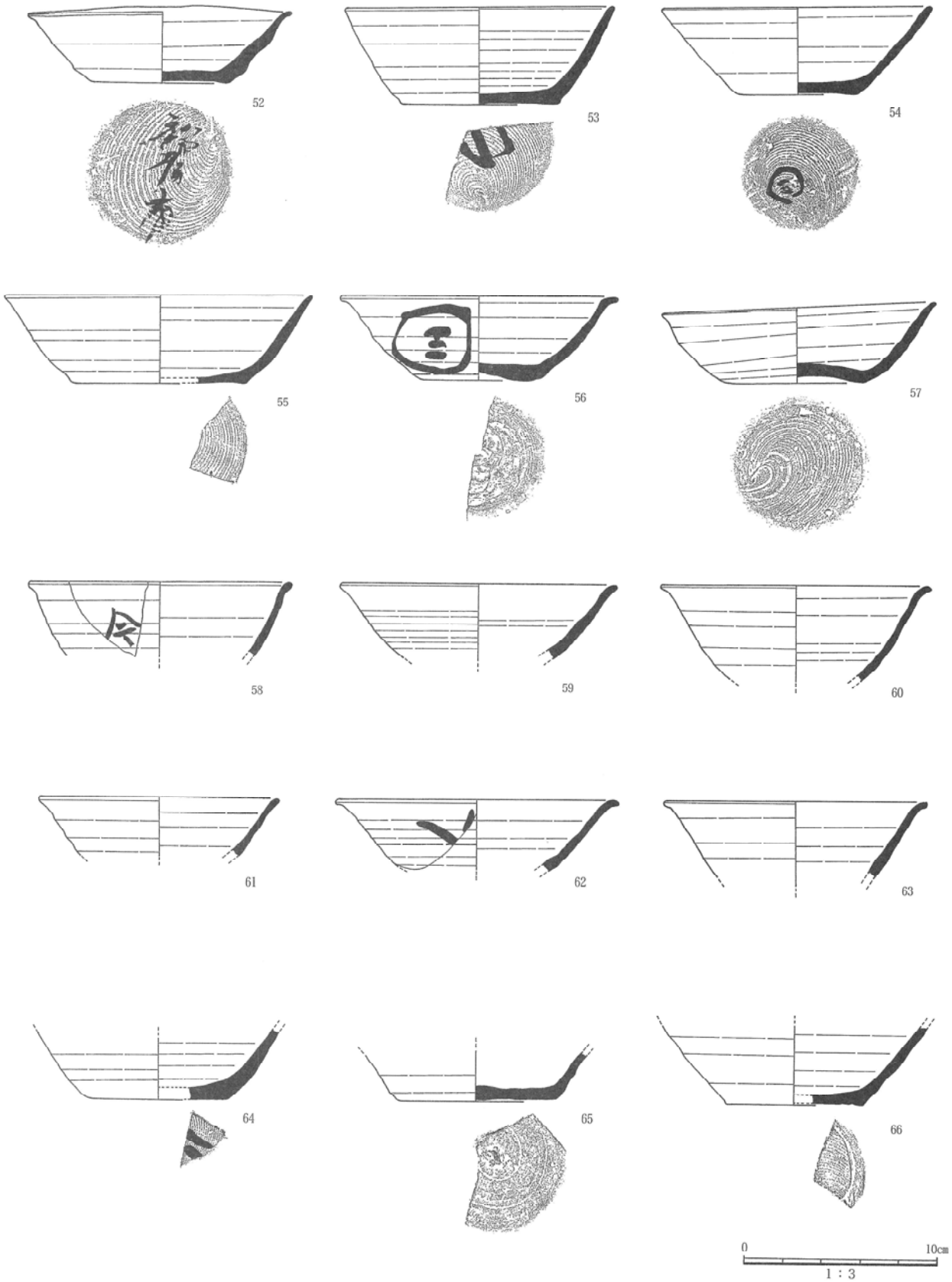
37

0　20cm
1：6

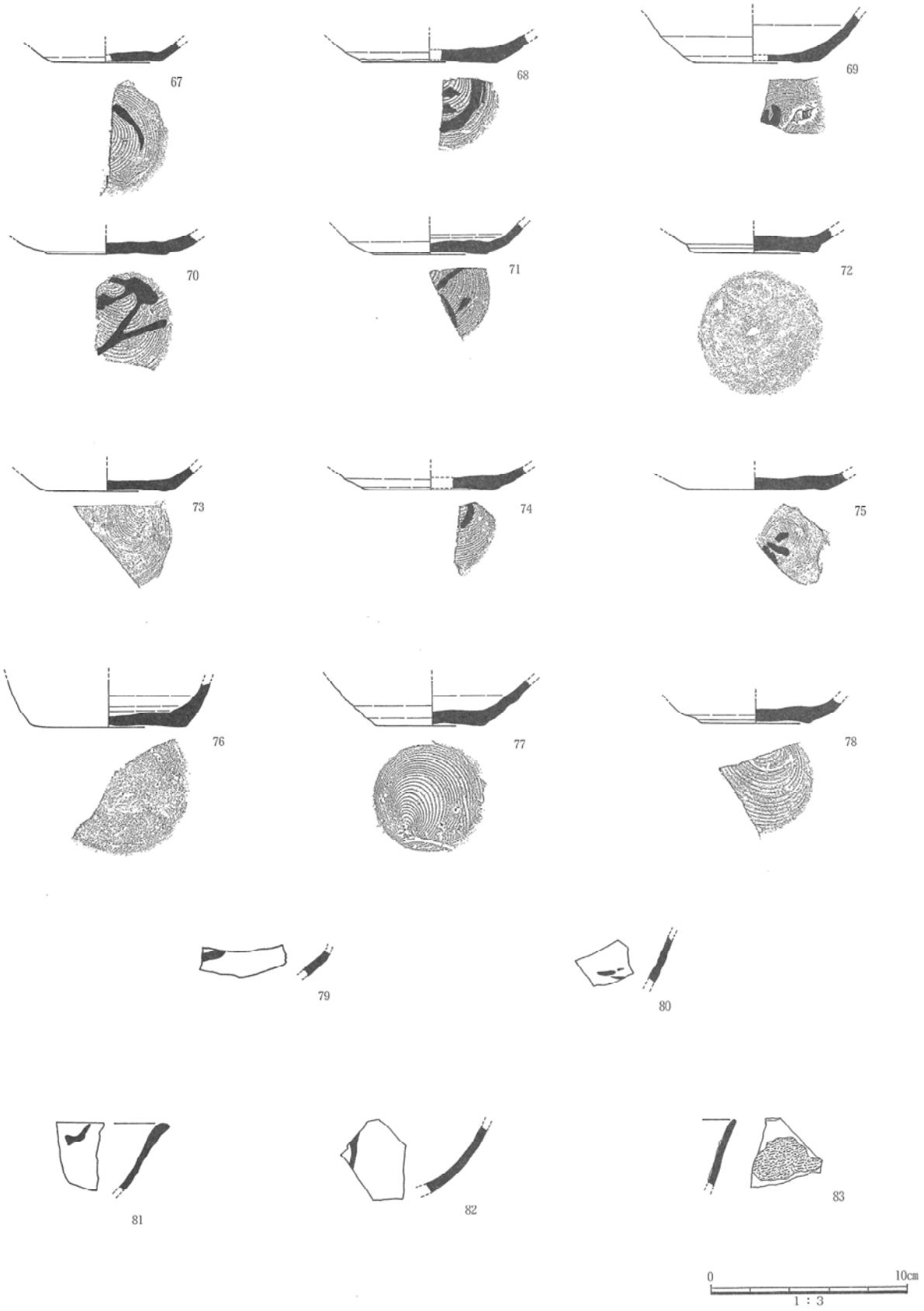
第45図　遺物実測図（５）



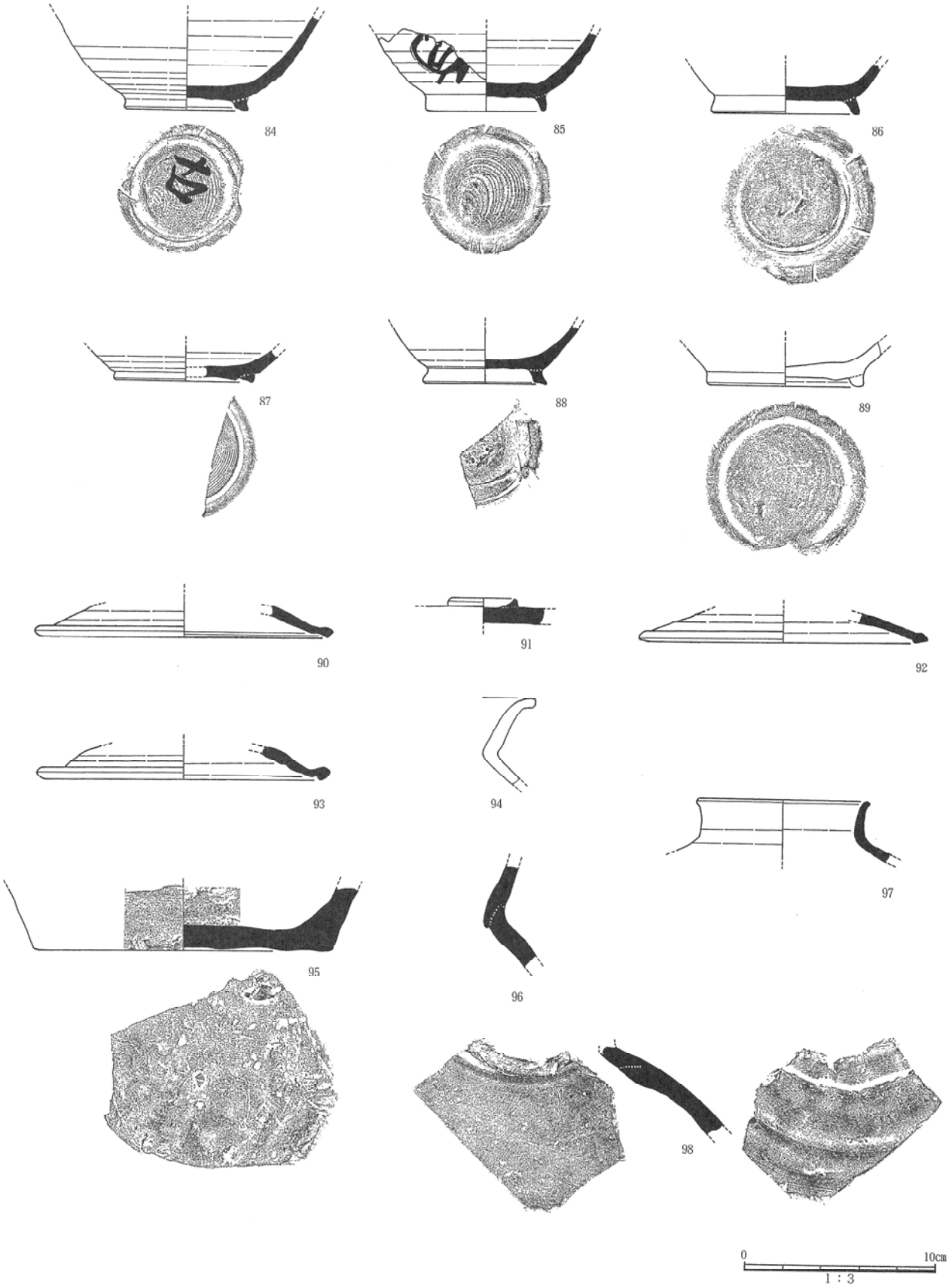
第46図　遺物実測図（６）



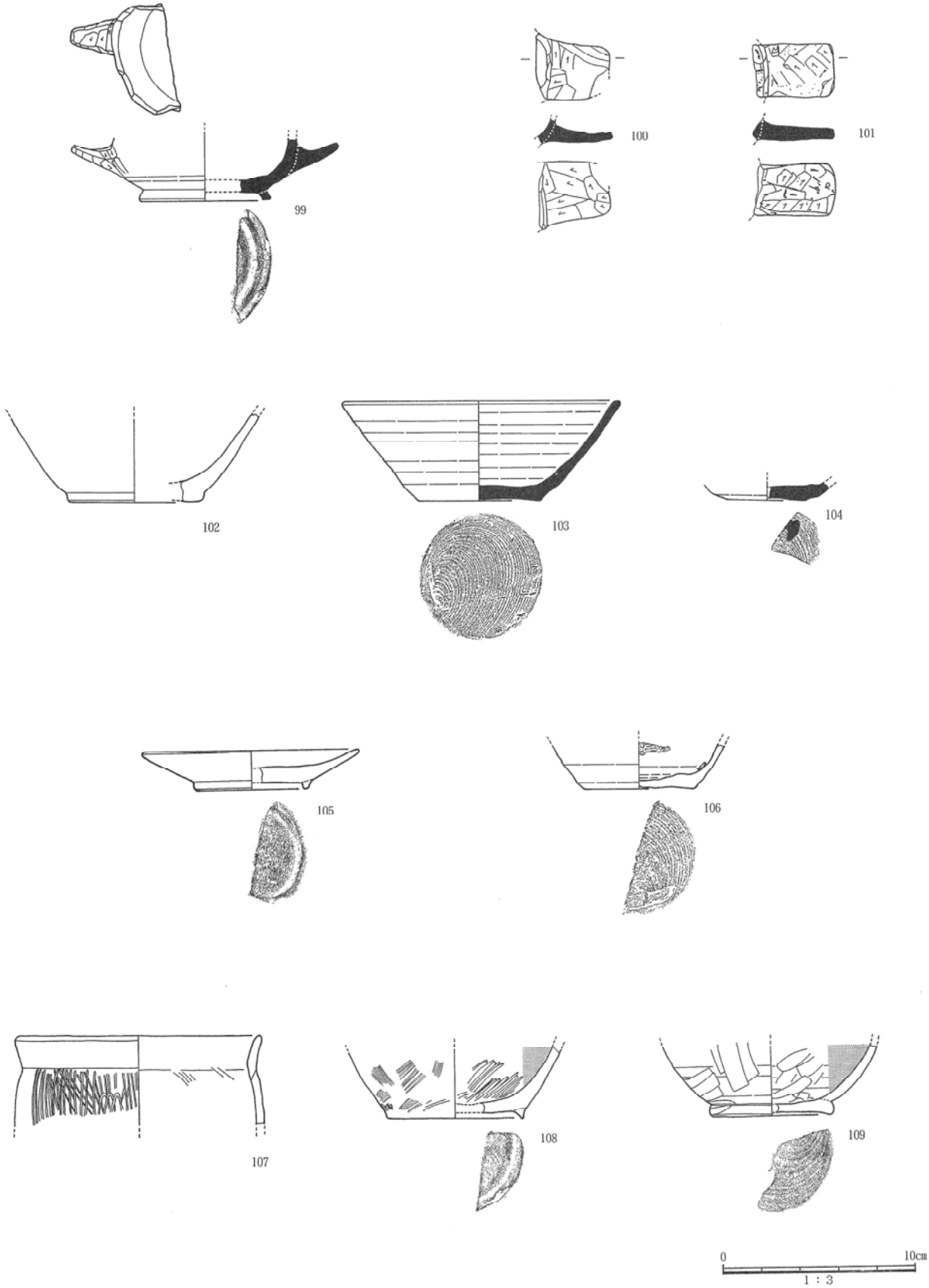
第47図　遺物実測図（７）



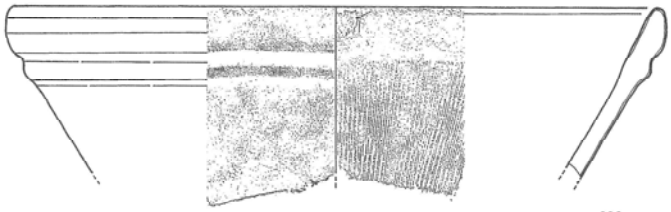
第48図　遺物実測図（８）



第49図　遺物実測図（９）

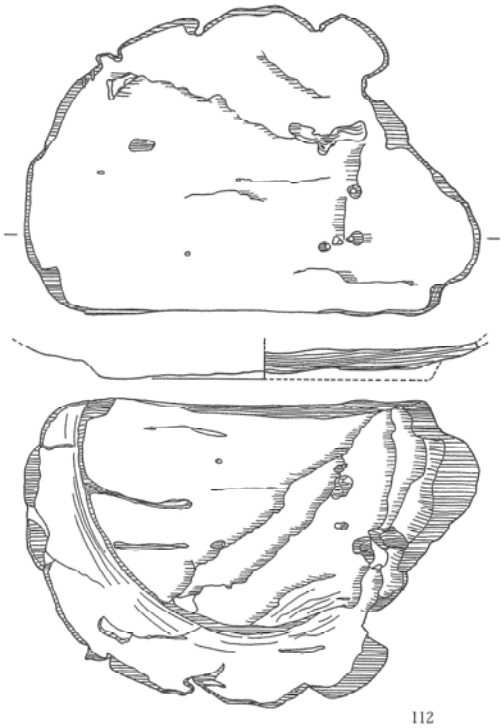


第50図　遺物実測図（10）

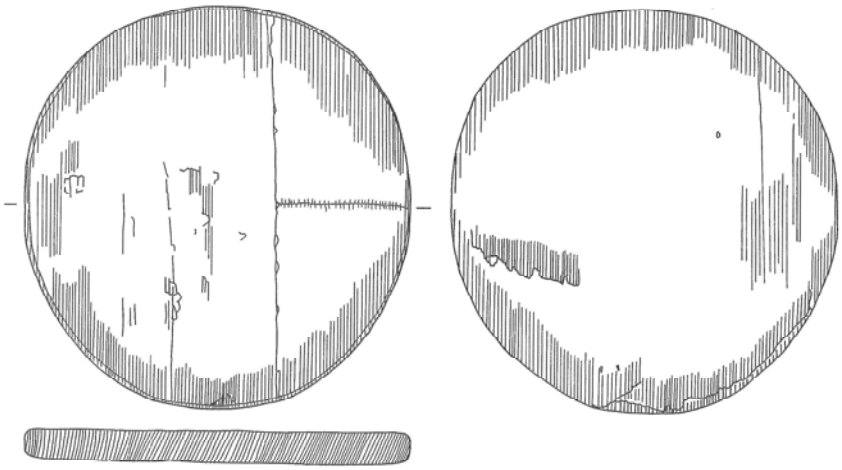


110

111



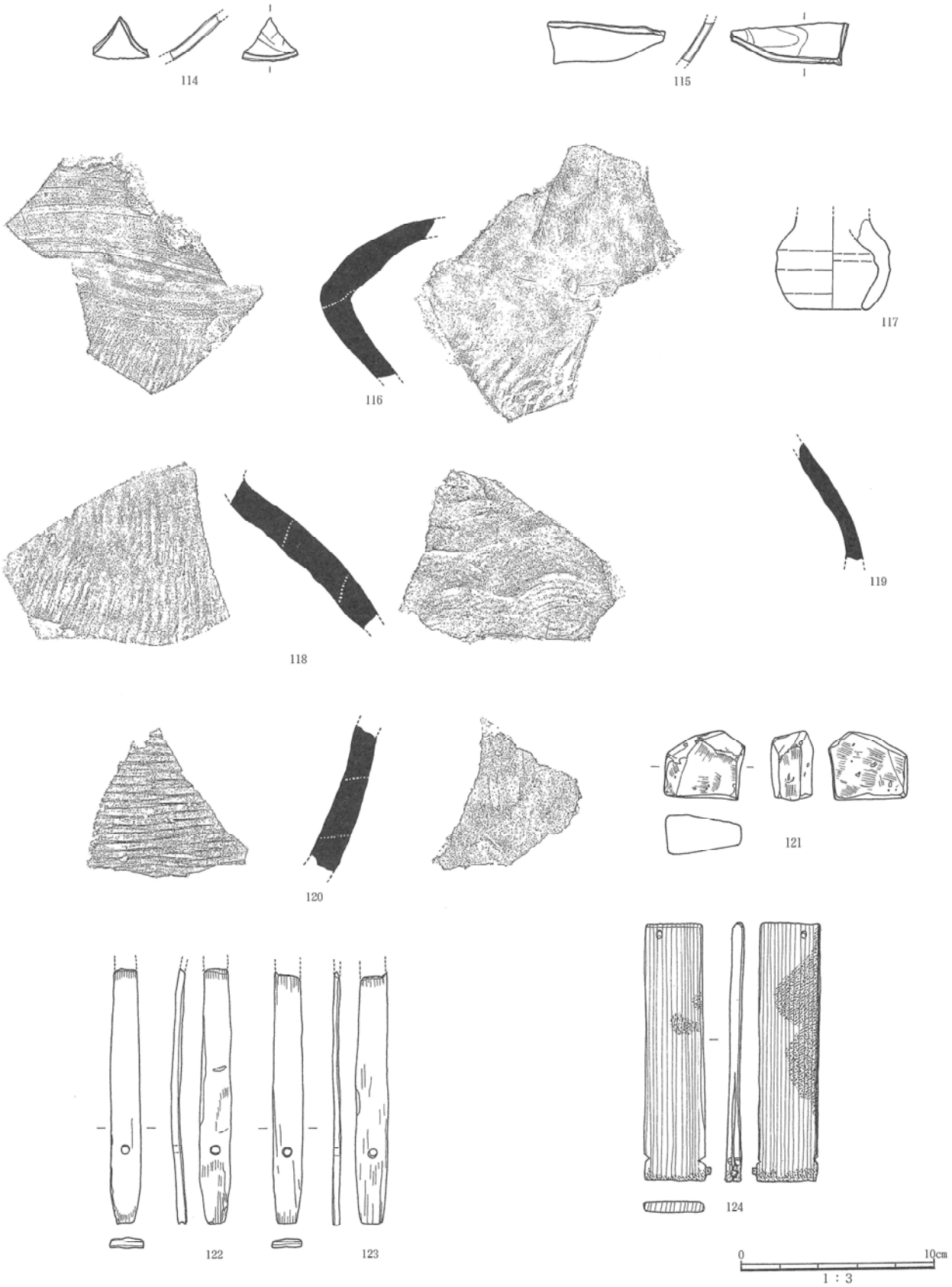
112



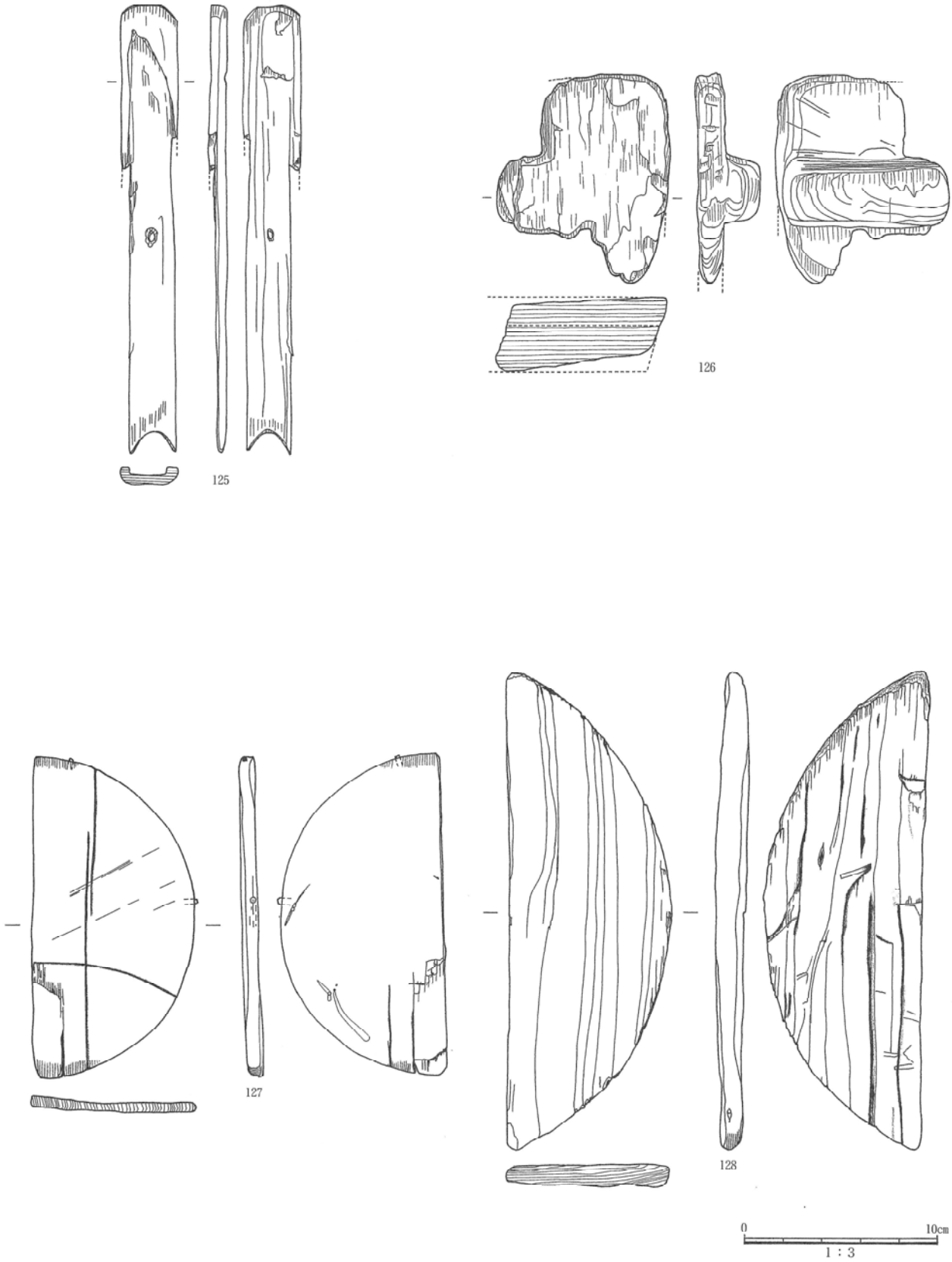
113

0　10cm
1：3

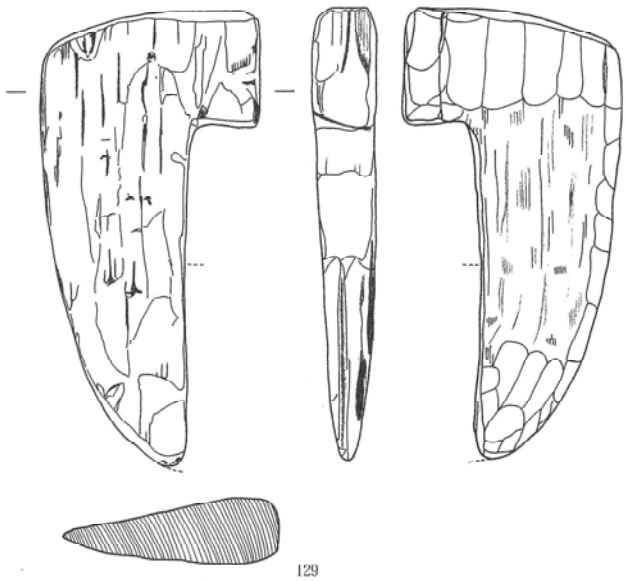
第51図　遺物実測図（11）

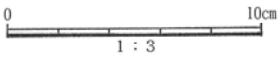


第52図　遺物実測図（12）

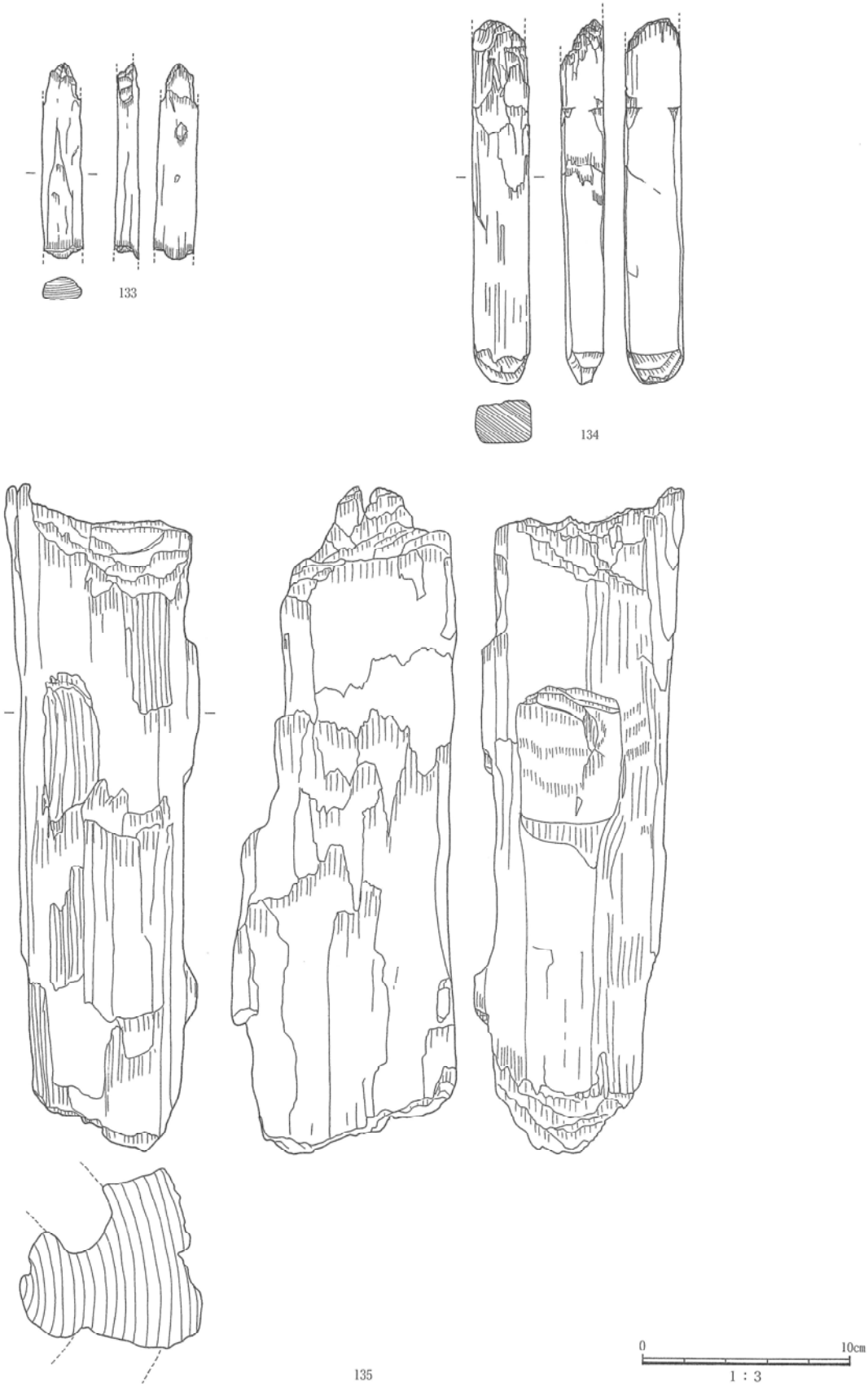


第53図　遺物実測図（13）

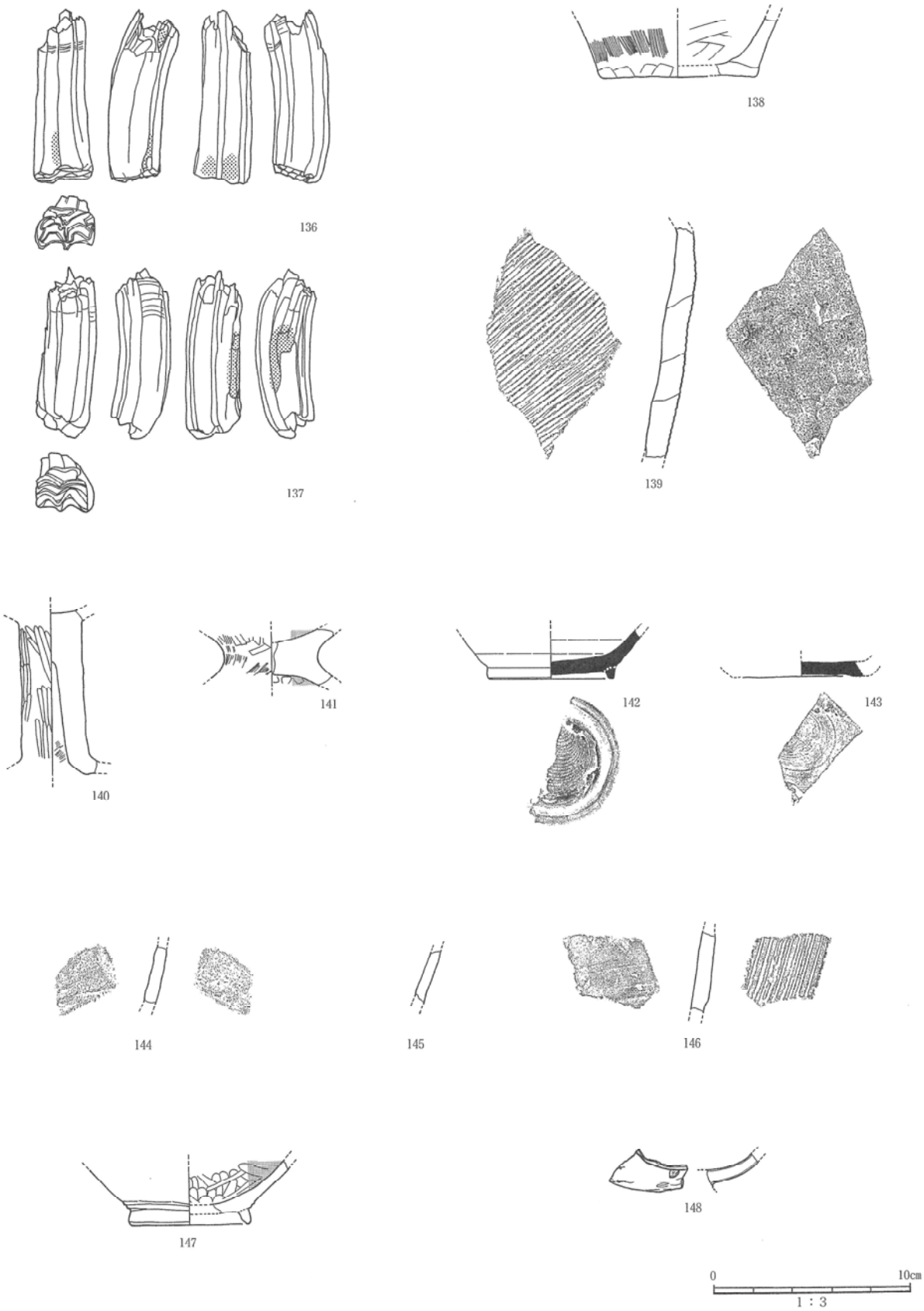




第54図　遺物実測図（14）



第55図　遺物実測図（15）



第56図　遺物実測図（16）

表－３　第３次調査出土遺物観察表（１）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(m/m) 口径	底径	器高	器厚	底部	調整技法 外面	内面	出土地点	登録番号	残存	備考
第41図	1	土師器	坏	(180)	30	60	4	丸底風平底	ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ、ナデ	ＳＧ３	RP66	1/2	赤彩、緻密
	2	土師器	壺				5		ヘラケズリ	ヘラケズリ	ＳＧ３Ｆ２	RP117	1/4以下	細砂混
	3	土師器	高坏		(150)		7		ヘラミガキ→ナデ	ハケ目→ヘラミガキ	ＳＧ３Ｆ２	RP74	1/4以下	赤彩、緻密
	4	土師器	高坏		(152)		7		ヘラミガキ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３	RP52・67・77	1/4以下	赤彩、緻密
	5	土師器	器台	98			7		ヘラミガキ→ナデ	ナデ	ＳＧ３	RP46	1/3	赤彩、緻密
	6	土師器	器台	93			4		ハケ目→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	ＳＧ３	RP69・85	1/4	赤彩、細砂混
	7	土師器	器台	81	100	83	7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ＳＧ３	RP44・47	ほぼ完形	赤彩、緻密
	8	土師器	器台		(102)		6		ナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ→ケズリ	ＳＧ３	RP67	1/2	赤彩、緻密
	9	土師器	鉢	160	27	99	6	平底	ハケ目→ヘラケズリ→ナデ	ハケ目→ヘラミガキ	ＳＧ３	RP52	ほぼ完形	粗砂混
	10	土師器	壺	180			5		ナデ→ハケ目、ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ、ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ４	RP84	ほぼ完形	赤彩、緻密
第42図	11	土師器	壺	103			4		ナデ→ミガキ→ヘラケズリ	ナデ、ヘラケズリ	ＳＧ３	RP91	1/2	赤彩、細砂混
	12	土師器	壺				5		ハケ目→ナデ	ナデ、ヘラケズリ	ＳＧ３	RP106	1/4以下	細砂混
	13	土師器	壺	(178)			8		マメツ	マメツ	ＳＧ３		1/4以下	粗砂混
	14	土師器	壺		28		6	平底	マメツ	マメツ	ＳＧ３	RP91	1/4以下	赤彩、細砂混
	15	土師器	甕	(120)			4.5		ナデ	ナデ	ＳＧ３	RP48	1/4以下	
	16	土師器	甕	(136)			5.5		ハケ目カ	ハケ目→ナデ	ＳＧ３	RP110	1/4以下	
	17	土師器	甕	(172)			5		ハケ目、ヘラケズリ→ナデ	ナデ→ハケ目、ヘラナデ	ＳＧ３		1/4以下	器肉薄く、焼成良、搬入品カ
	18	土師器	甕	(180)			5		ナデ、ヘラミガキ→ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケ目	ＳＧ３	RP112	1/4以下	粗砂混
	19	土師器	甕	190	(65)	208	5	平底	ナデ、ヘラケズリ→ナデ	ナデ、ヘラナデ	ＳＧ３	RP42	ほぼ完形	粗砂混
第43図	20	土師器	甕	(171)			4		ハケ目→ナデ	ハケ目	ＳＧ３	RP68	1/4以下	細砂混
	21	土師器	甕	(150)			7.5		ハケ目→ナデ	ハケ目→ヘラケズリ	ＳＧ３	RP85	1/4以下	粗砂混
	22	土師器	甕	(160)			8		ナデ→ハケ目	ナデ→ハケ目	ＳＧ３	RP113	1/4以下	粗砂混、二次加熱
	23	土師器	甕	(181)			5		ナデ→ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラケズリ→ナデ	ＳＧ３	RP49	1/4	外面煤付着、粗砂混
	24	土師器	甕	(194)			7		ナデ→ヘラミガキ、ヘラミガキ	ハケ目→ナデ、ハケ目→ヘラナデ	ＳＧ３	RP105	1/4以下	外面煤付着、細砂混
	25	土師器	甕	(226)	(75)		5	平底	ナデ→ヘラミガキ→ヘラケズリ	ヘラミガキ→ナデ、ヘラケズリ	ＳＧ３	RP114・115	1/4以下	細砂混
第44図	26	土師器	甕		42		5.0	平底	ハケ目	ヘラミガキ、ヘラケズリ	ＳＧ３	RP85	1/4以下	緻密
	27	土師器	甕		74		5	平底	ヘラナデ	ヘラナデ	ＳＧ３Ｆ２		1/4以下	内外面煤付着、細砂混
	28	土師器	甕		46		5	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＧ３	RP67・70・71・76	4/5	細砂混
	29	土師器	甕		(54)		6.5	平底	ハケ目→ヘラミガキ・ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ	ＳＧ３	RP50	1/4以下	細砂混、底部ヘラケズリ
	30	須恵器	甕				12		タタキ目	アテ痕	ＳＧ３		1/4以下	細砂混
	31	近世陶器	瓶カ		(88)		5		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ３		1/4以下	緻密
	32	近世陶器	擂鉢				16		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ３		1/4以下	細砂混、内面卸目
	33	近世陶器	擂鉢				8		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ３		1/4以下	細砂混、内面卸目
	34	金属製品	キセル	長64	長径10	短径3					ＳＧ３		欠損有り	吸い口
	35	金属製品	不明銅製品	(40)		22	1.5				ＳＧ３		欠損ナシ	
第45図	36	木製品	板状木製品	長763	幅183		4.5				ＳＧ３	RW51	欠損有り	
	37	木製品	田下駄	長262	幅260		3				ＳＧ３	RW99・100	欠損有り	
第46図	38	土師器	甕				6		ハケ目	ヘラケズリ、ハケ目、ナデ	ＳＧ２		1/4以下	粗砂混
	39	土師器	甕		(50)		9		ハケ目	ハケ目	ＳＧ２	RP120	1/4以下	細砂混
	40	須恵器	坏	(138)			厚17		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ２	RP86	1/4以下	緻密
	41	赤焼土器	坏	(130)			厚26		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＧ２		1/4以下	細砂混
	42	土製品	土錘カ		長径28	短径24					ＳＧ２		欠損有り	細砂混
	43	中世磁器	白磁碗				5		施釉	施釉	ＳＧ２		1/4以下	緻密
	44	中世磁器	染付皿				4		施釉	施釉	ＳＧ２		1/4以下	緻密、高台裏カンナケズリ
	45	近世磁器	瓶カ				4		施釉	露胎	ＳＧ２		1/4以下	緻密、外面に鳥形の文様
	46	土師器	甕	(190)			8		ヘラケズリ→ハケメ、ナデ	ナデ、ハケ目	ＳＫ329		1/4以下	細砂混、二次加熱
	47	土師器	甕		47		5	平底	ハケ目→ヘラケズリ	ヘラケズリ	ＳＫ329	RP107・108	1/2	細砂混、二次加熱、底部ヘラケズリ
	48	土師器	甕				7		ハケ目	ハケ目	ＳＨ410		1/4以下	細砂混
	49	土師器	甕		50		7	平底	ハケ目	ハケ目	ＳＨ410		1/4以下	粗砂混、内面煤付着
	50	土師器	甕		(80)		8	網代痕	ハケ目	ハケ目	ＳＤ302		1/4以下	粗砂混
	51	土師器	高坏				12.5		ヘラミガキ	ナデ→ヘラミガキ	ＳＤ302	RP156	1/4以下	赤彩、緻密

表－４　第３次調査出土遺物観察表（２）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(m/m) 口径	底径	器高	器厚	底部	調整技法 外面	内面	出土地点	登録番号	残存	備考
第47図	52	須恵器	坏	136	72	39	6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP141	ほぼ完形	緻密、底部外面「福有南」、海
	53	須恵器	坏	(140)	(81)	51	6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP125	1/3	細砂混、底部外面墨書
	54	須恵器	坏	(140)	58	45	4.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP143	2/3	細砂混、底部外面「土」、海綿
	55	須恵器	坏	(160)	(90)	45	5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP155	1/4	細砂混
	56	須恵器	坏	(145)	(60)	43	4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP154	1/3	細砂混、体部正位「王」、海綿
	57	須恵器	坏	141	67	41	5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP124	完形	細砂混、海綿骨針
	58	須恵器	坏	(137)			4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、体部正位「今」、海綿骨針
	59	須恵器	坏	(144)			4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP119	1/4	緻密、海綿骨針
	60	須恵器	坏	(140)			4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、海綿骨針
	61	須恵器	坏	(126)			3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、海綿骨針
	62	須恵器	坏	(147)			4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、体部逆位墨書
	63	須恵器	坏	(138)			3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密
	64	須恵器	坏		(54)		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、底部外面墨書、加工痕
	65	須恵器	坏		(80)		3.5	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP132	1/4以下	緻密
	66	須恵器	坏		(70)		4.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP135	1/4以下	緻密
第48図	67	須恵器	坏		(54)		4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP128	1/4以下	緻密、底部外面墨書
	68	須恵器	坏		(70)		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP149	1/4以下	細砂混、底部外面「王」カ
	69	須恵器	坏		(64)		4.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、底部外面墨書
	70	須恵器	坏		(61)		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、底部外面墨書
	71	須恵器	坏		(58)		4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、底部外面墨書
	72	須恵器	坏		64		4.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP126	1/4以下	緻密
	73	須恵器	坏		(60)		4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、海綿骨針
	74	須恵器	坏		(60)		5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、底部外面墨書、海綿骨針
	75	須恵器	坏		(70)		5.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、底部外面墨書
	76	須恵器	坏		(80)		7	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP147	1/4以下	細砂混、黒色粒多い
	77	須恵器	坏		116		4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP150	1/2	緻密、海綿骨針
	78	須恵器	坏		(56)		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP129	1/4以下	細砂混、海綿骨針
	79	須恵器	坏				3		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、体部墨書
	80	須恵器	坏				3		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、体部墨書
	81	須恵器	坏				3		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混、体部墨書
	82	須恵器	坏				4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、体部墨書
	83	須恵器	坏				3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密、内面漆付着
第49図	84	須恵器	有台坏		64		5.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP119	2/3	緻密、底部外面「古」、海綿骨針
	85	須恵器	有台坏		63		5.5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP136	1/3	細砂混、生焼、体部逆位「物」
	86	須恵器	有台坏		78		5	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP145	1/4以下	細砂混
	87	須恵器	有台坏		(74)		5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP127	1/4以下	緻密
	88	須恵器	有台坏		64		5	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP134	1/4以下	細砂混
	89	須恵器	有台坏		82		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP133	1/4以下	細砂混
	90	須恵器	蓋	(156)			4.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密
	91	須恵器	蓋				8		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密
	92	須恵器	蓋	(152)			4.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密
	93	須恵器	蓋	(154)			4		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	細砂混
	94	土師器	甕				7.5		ハケ目→ナデ	ナデ	S D302		1/4以下	粗砂混
	95	須恵器	甕		(152)		11		ロクロ→ケズリ	ロクロナデ	S D302	RP153	1/4以下	粗砂混
	96	須恵器	壺				9		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	粗砂混
	97	須恵器	壺	(90)			4.5		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302		1/4以下	緻密
	98	須恵器	壺				10		ロクロナデ	ロクロナデ	S D302	RP35	1/4以下	細砂混、加工痕有り
第50図	99	須恵器	双耳坏		(68)		7	回転糸切り	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	S D302	RP152	1/3	緻密
	100	須恵器	双耳坏				6			ヘラケズリ	S D302		1/4以下	細砂混

表－５　第３次調査出土遺物観察表（３）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(m/m) 口径	底径	器高	器厚	底部	調整技法 外面	内面	出土地点	登録番号	残存	備考
第50図	101	須恵器	双耳坏				7			ヘラケズリ	ＳＤ302		1/4以下	細砂混
	102	赤焼土器	有台坏		(70)		6.5		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ302	RP146	1/4	細砂混
	103	須恵器	坏	(150)	64	52	4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ302	RP138	2/3	細砂混、生焼
	104	須恵器	坏		(44)		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ302		1/4以下	緻密、生焼、底部外面墨書
	105	赤焼土器	皿	(114)	(60)	20	5	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ302	RP139	1/3	緻密
	106	赤焼土器	鉢		(58)		4	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ302	RP123	1/4以下	細砂混、雲母混、内面漆付着
	107	土師器	甕	(126)			4.5		ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	ＳＤ302	RP140	1/4以下	細砂混
	108	土師器	有台坏		(70)		6		ナデ	ヘラミガキ	ＳＤ302	RP130	1/4以下	緻密、内面黒色処理
	109	土師器	有台坏		(64)		5	回転糸切り	ロクロ→ケズリ	ロクロ→ケズリ	ＳＤ302	RP131	1/4以下	緻密、内面黒色処理
第51図	110	近世陶器	擂鉢	(160)			7		施釉	施釉	ＳＤ302		1/4以下	緻密、内面細かい卸目
	111	石製品	砥石	長82	幅47		厚32				ＳＤ302	RQ137	欠損有り	３面使用痕、２面切り離し痕
	112	木製品	挽物大盤	長178	幅120	高16	厚6		ロクロ成形	ロクロ成形	ＳＤ302	RW142	2/3	
	113	木製品	曲物	長径159	短径152		厚13				ＳＥ12	RW55	欠損ナシ	曲物底板
第52図	114	中世磁器	青磁碗				4.5		施釉	施釉	ＳＤ４	RP2	1/4以下	緻密、体部内面劃花文
	115	中世磁器	青磁碗				4.5		施釉	施釉	ＳＤ４	RP39	1/4以下	緻密、体部内面飛雲文
	116	須恵器	甕				15		タタキ目	アテ痕	ＳＤ４	RP30	1/4以下	細砂混
	117	土製品	土鈴カ				6		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ４	RP79	1/3	緻密、黒色粒混
	118	須恵器	甕				15		タタキ目	アテ痕	ＳＤ４	RP80	1/4以下	細砂混、海綿骨針、黒色粒混
	119	須恵器	壺				8		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ４	RP38	1/4以下	緻密
	120	須恵器	甕				16		タタキ目	アテ痕	ＳＤ４	RP27	1/4以下	細砂混
	121	石製品	砥石	長 36	幅36		厚20				ＳＤ４		欠損有り	５面使用痕
	122	木製品	扇骨	長131	幅16		厚4.2				ＳＤ４	RW12	欠損有り	要に綴じ孔有り、基部
	123	木製品	扇骨	長130	幅16		厚3.5				ＳＤ４	RW12	欠損有り	要に綴じ孔有り、基部
	124	木製品	漆刷毛	長133	幅31.5		厚6				ＳＤ４	RW7	欠損ナシ	漆付着、穂先残存
第53図	125	木製品	刀鞘	長233	幅29		厚8				ＳＤ４	RW29	欠損有り	小刀の鞘、中央に穿孔
	126	木製品	下駄	長109	幅90		厚15				ＳＤ４	RW24	欠損有り	連歯下駄、台後部のみ
	127	木製品	曲物	長165	幅85		厚6				ＳＧ３		欠損有り	底板のみ、２箇所木釘残存
	128	木製品	曲物	長245	幅80		厚10				ＳＤ302		欠損有り	底板のみ、２箇所接合穴残存
第54図	129	木製品	鍬状木製	長150	幅85		厚23				ＳＤ４	RW18	欠損有り	1/2欠損
	130	木製品	塔婆	長263	幅39		厚3.6				ＳＤ４	RW5	欠損有り	上端圭頭、下端尖頭状
	131	木製品	塔婆	長269	幅37.5		厚3.5				ＳＤ４	RW40	欠損有り	上端圭頭、下端尖頭状
	132	木製品	塔婆	長(273)	幅33		厚3.5				ＳＤ４	RW41	欠損有り	上端圭頭、下端尖頭状、墨痕有り
	133	木製品	塔婆	長94	幅20		厚10				ＳＤ４	RW4	欠損有り	断面形長方形
	134	木製品	塔婆	長176	幅28		厚21				ＳＸ342	RW32	欠損有り	断面形長方形
	135	木製品	部材	長322	幅86		厚99				ＳＤ４	RW25	欠損有り	２方向のホゾ穴
第56図	136	動物遺体	馬歯	長88	幅26		厚28				ＳＤ４	RV9	欠損有り	歯根部欠損、藍鉄鋼付着
	137	動物遺体	馬歯	長86	幅27		厚25				ＳＤ４	RV13	欠損有り	歯根部欠損、藍鉄鋼付着
	138	土師器	甕		(80)		7.5		ケズリ、ハケ目、ナデ	ヘラケズリ	ＳＸ342	RP37	1/4以下	細砂混
	139	須恵器系陶器	甕				12		条線状タタキ	押圧痕	ＳＸ342	RP36	1/4以下	粗砂混
	140	土師器	高坏				12		ヘラミガキ	ハケ目	ＳＰ252	RP43	1/3	赤彩、緻密
	141	土師器	高坏				8		ヘラケズリ、ハケ目	ヘラミガキ	ＸＯ		1/3	内面黒色処理、緻密
	142	須恵器	有台坏		64		6	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	トレンチ		1/3	緻密、生焼
	143	須恵器	坏				6	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＰ185		1/4以下	細砂混
	144	土師器	不明				6.2		ハケ目	ハケ目	ＳＰ352		1/4以下	粗砂混
	145	近世陶器	不明				5		施釉	施釉	トレンチ		1/4以下	細砂混
	146	近世陶器	擂鉢				7.5		ロクロナデ	ロクロナデ	ＳＤ４		欠損有り	緻密、内面卸目
	147	土師器	有台坏		(60)		5	菊花状ナデツケ	ナデ	ミガキ	ＸＯ		1/4	内面黒色処理、緻密
	148	近世磁器	染付碗				5		施釉	施釉	SP269		1/4以下	肥前焼、緻密

Ⅵ　まとめと考察

1　調査のまとめ

今回の調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事に係る緊急発掘調査である。調査結果を要約すると、以下のようになる。

① 志戸田縄遺跡は、山形県山形市大字陣馬字志戸田縄に所在し、西流する馬見ヶ崎川の前縁部に立地している。今回の発掘調査は平成10年度に北西側側道部分1,150㎡、平成11年度に本線・東側側道部分4,550㎡を対象として実施した。遺跡の性格は、古墳時代前期の河川跡と奈良・平安時代の溝状遺構、中世鎌倉時代の屋敷跡とそれを区画する溝状遺構と考えられる。なお、当地域は、旧市街地の郊外の飛地をまとめて縄張りした地域から志戸田縄と名付けられた。

② 遺構の分布は、北側の溝により区画された掘立柱建物跡を中心とした中世域、中央～南側にかけて東西に貫流している河川跡を中心とした古墳時代域、南側に東西に走る溝状遺構を中心とした奈良・平安時代域に大別される。北側建物跡群は、やや計画性に欠ける配置をしているが、中心の方向軸が南北軸にあるものと東西軸にあるものとに分けられる。それら建物跡の周辺に深さ１m程の井戸跡を検出できた。

③ 出土した遺物は、中世域で少なく、古墳時代の河川跡や奈良・平安時代の溝状遺構で多量に出土した。古墳時代では、古墳時代前期の塩釜式期最終段階周辺の様相を示す古式土師器が出土した。器種が多様で、坏、器台、高坏、鉢、壺、甕がある。丁寧にミガキ調整をする器台や直口壺がある反面、中実脚をもつ高坏や調整にヘラ削りを施す甕や胎土が悪く粗雑になる器種なども見られる。奈良・平安時代では、底部切り離しがヘラ切りのものもあるが、９世紀半ば頃にあたる器形が主体になる。墨書土器が21点確認され、すべてＳＤ302から出土したものである。釈読可能な文字については、「福有南」・「㊣」・「古」・「物」・「今」が確認されている。中世では、ＳＤ４から12世紀後半代の青磁碗小片２点をはじめ扇骨や漆刷毛などの木製品が出土している。区画された建物跡の時期もその頃に想定できる。

④ 特筆される遺構・遺物は、調査区北側に展開する掘立柱建物跡群とそれを区画する溝状遺構、調査区南側に東西に走る溝状遺構ＳＤ302から出土した９世紀半ばの須恵器坏の底部に書かれた「福有南」である。掘立柱建物跡は７棟検出され、その内身舎２間×３間の建物が３棟と多い。また総柱建物はなく、小規模な側柱建物が区画溝北側に展開する。井戸跡は、建物域南側に展開し、北側には存在しない。陽のささない空間には水場を設けない傾向が窺える。井戸跡は、確認面からの深さが１m内外で、開口部の径も１m以下の小規模なものが多い。「福有」は、『和名類聚抄』(高山寺本)にある８郷ある最上郡の郷名にあたる。『角川日本地名大辞典』などでも村山郡徳有郷にひかれた誤りと言われていたが、今回の調査で出土した墨書土器により古写本の高山寺本の正当性が立証された。山形市西部付近が比定されている。

2　古墳時代の土器様相

古式土師器の器種は坏(A)・器台(B)・高坏(C)・鉢(D)・壺(E)・甕(F)の５種である。主に完形に近いもののみであるが類型化をしてみたい。坏(A)は、体部上半で口縁部が屈曲するもの(Ａ１)、やや膨らむ体部に短い口縁部がつくもの(Ａ２)、体部がやや内弯して延びる手づくね成形のもの(Ａ３)がある。Ａ１は、(11―１)・(41―１)・(19―60)が該当し、今塚遺跡に器形的に類似するものがあるが、同遺跡では口縁部に陵をもつ有段坏も出土しており、本遺跡とは違う様相もある。Ａ２は(11―２)でＡ３は(11―４)が該当する。

器台(B)は、小型で裾部に円孔を穿ち、口縁部が外反するもの(Ｂ１)、口縁部が内弯するもの(Ｂ２)がある。また、口縁部が内弯し、受け部中央に貫通孔の無いもの(Ｂ２ａ)がある。Ｂ２ａ以外は、受け部中央に貫通孔があり、器面に丁寧なミガキ調整を施す。Ｂ１は(11―７・41―６)、Ｂ２は(41―７)、Ｂ２ａは(41―５)が該当する。物見台遺跡７号住居でも脚部のみのものだがＢ１・２類に属すると思われるものが多く出土している。本遺跡出土のものは脚部下端まで直線的に延びるもののみであるが、若干反る器形もあるようである。

高坏(C)は、中実棒状脚にハの字に開く裾部をもつもの(Ｃ１)、中空棒状脚のもの(Ｃ２)がある。Ｃ１は(41―３)、Ｃ２は(56―140)が該当する。

鉢(D)は、口縁部がやや内弯し、身が深いもの(Ｄ１)、小型で半球状の体部をもち、口縁部が開くもの(Ｄ２)がある。Ｄ１は(41―９)、Ｄ２は(12－19)が該当する。

壺(E)は、体部中位から屈曲外反する口頸部をもち、球形の体部がつくもの(Ｅ１)、口頸部がやや短く、縦長な体部がつくもの(Ｅ２)、やや外反する複合口縁をもつもの(Ｅ３)、頸部に突帯を巡らすもの(Ｅ４)、 頸部がやや狭く、なで肩の器形(Ｅ５)がある。該当する器形として、(Ｅ１)は(41―10)、(Ｅ２)は(11―11・12・17)、(Ｅ３)は(13―24・42―13)、(Ｅ４)は(19―63)、(Ｅ５)は(12－20)があたる。全般的に丁寧なミガキ調整を行い、外面に赤彩を施すものもある。また、宮町遺跡、山形西高遺跡、今塚遺跡にみるような口縁部に棒状浮文をもつ大型の器形のものは出土しなかった。

甕(F)は、口縁部が外傾し、球胴形の体部がつくもの(Ｆ１)、口縁部がやや直立し、体部中位に最大径があるもの(Ｆ２)、頸部がやや狭く、なで肩の器形(Ｆ３)、口縁部が外反し、なで肩のもの(Ｆ４)、体部上半に最大径があり、口縁部が短く外反するもの(Ｆ４)、口縁部が外傾・外反し体部中位に最大径があるもの(Ｆ５)がある。(Ｆ１)は(12―21)、(Ｆ２)は(12―18・14―34・35)、(Ｆ３)は(14―31・43―20・24)、(Ｆ４)は(43―23)、(Ｆ５)は(42―17・18・43―25)が該当する。調整にハケ目だけではなくヘラ削りが施されることがある。

以上が遺構出土の古式土師器分類であるが、傾向を概観・補足すると次のようになる。

- 坏Ａ１の外面調整はミガキで、ケズリ・ハケ目による調整がみられない。
- 器台のほとんどがＢ１・２の器形であるが、Ｂ２ａのような貫通孔がないものもある。器面調整は丁寧なミガキあるいはハケ目を施す。
- 高坏Ｂ１の中空棒状脚からＢ２中実棒状脚への変化がみられる。
- 直口壺の体部で球形のものが出現し、器高に占める体部の割合が大きくなる。

以上のことから本遺跡の古墳時代土器の様相は辻編年(辻 1995)のⅢ－３～４期に当たると思われる。また、住居跡が検出されなかったため、河川跡出土遺物を中心にしての検討であるが、今後、周辺のほぼ同時期の今塚遺跡、陣馬遺跡、七浦遺跡、横手遺跡、西里遺跡(以上山形市)、下慎遺跡(河北町)、廻屋遺跡(白鷹町)などの遺跡出土品との比較検討などをしながら塩釜式期終末期周辺の当地区における研究の成果に期待したい。

《引用・参考文献》

青山博樹　1998「土器①東北南部」第３回東北・関東前方後円墳研究大会シンポジウム資料

阿部明彦　1994「升川遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第９集

石川県考古学研究会　1997「石川県考古資料調査・集成事業報告書[祭祀具Ⅱ]」

伊藤邦弘　1988「大楯遺跡第１次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第121集

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」貿易陶磁研究NO.2

宇野隆夫　1982「井戸考」史林65－５

小野正敏　1982「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」貿易陶磁研究NO.2

齋藤　健他　1998「上高田遺跡第２・３次調査報告書」山形県埋蔵文化財センター第57集

佐藤庄一他　1998「平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

須賀井新人他　1994「今塚遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第７集

1997「荒川２遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集

水戸弘美他　1997「塔の腰遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第50集

高橋敏他　1998「植木場一遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集

高橋誠明他　1999「留沼遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書第25集

1999「宮城県における古墳時代中期の土器様相」東国土器研究第５号

中世土器研究会　1995「概説　中世の土器・陶磁器」真陽社

辻　秀人　1994「東北南部における古墳出現の土器編年－その１会津盆地－」東北学院大学論集歴史・地理学第26号

1995「東北南部における古墳出現の土器編年－その２会津盆地－」東北学院大学論集歴史・地理学第27号

野川主計他　1981「畑中(一の坪)遺跡発掘調査報告書」河北町埋蔵文化財調査報告書第２集

北陸中世土器研究会　1993「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」第６回北陸中世土器研究会

1996「飾る・遊ぶ・祈るの木製用具」第９回北陸中世土器研究会

森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究NO.2

山形県埋蔵文化財センター　1994「山形県内出土の古式土師器について」第１回課内学習会資料

山形県考古学会　2000「山形考古学会第54回研究大会資料」

山形市史編さん委員会　1973「山形市史上巻　原始・古代・中世編」

山形市金井公民館青年教室　1977「金井むかしむかし」

ふ り が な	しとだなわいせきだい２・３じはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	志戸田縄遺跡第２・３次発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第92集
編 著 者 名	渡部利之
編 集 機 関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ023-672-5301
発 行 年 月 日	2001年10月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
志戸田縄遺跡（しとだなわ）	山形県山形市（やまがたけんやまがたし） 大字陣馬（おおあざじんば） 字志戸田（あざしとだ）	6210	平成10年度登録	38度16分30秒	140度18分00秒	19991027～19991127	1,150	東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）
						20000419～20000722	4,550	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志戸田遺跡２次	集落跡	古墳時代	河川跡 1 土杭 8	古式土師器（坏・器台・高坏鉢・壺・甕）	調査区を東西に横切る古墳時代の河川跡とそれを南北に切る中世の溝跡を検出した。
		中世	溝 1	木製品（漆器皿・下駄） 金属製品（刀子）	
志戸田遺跡３次	集落跡	古墳時代	河川跡 2 墳墓 1 土杭	古式土師器（坏・器台・高坏鉢・壺・甕）	２次調査で検出した河川跡の続きを確認。
		奈良・平安時代	溝跡 1	須恵器（坏・有台坏・双耳坏蓋・壺・甕） 赤焼土器（有台坏・甕） 木製品（挽物大盤）	調査区南側を東西に走る溝あとを検出した。
	屋敷跡	中世	掘立柱建物 7 柵列柱建物 2 井戸跡 8 溝跡 1 土杭	輸入磁器（青磁碗） 国産陶器（須恵器系陶器） 木製品（扇骨・漆刷毛・曲物刀鞘・下駄・塔婆）	調査区北側にコの字に区画する溝と建物群を検出した。 （総出土箱数:53）

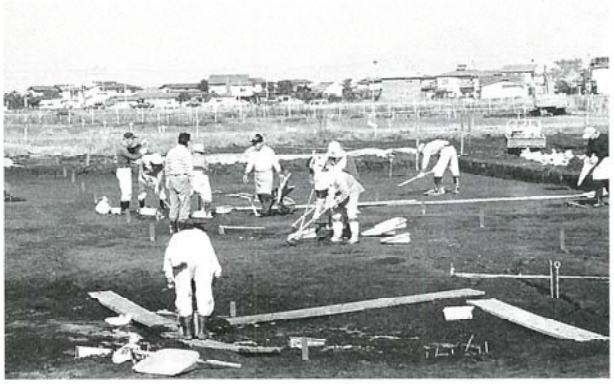
図　　版

図版１

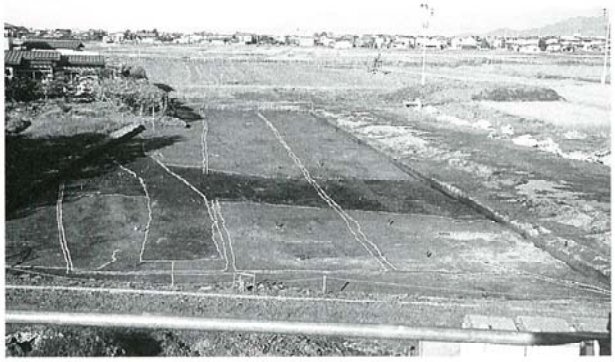
調査区設定概観（北から）

重機による表土除去状況（西から）

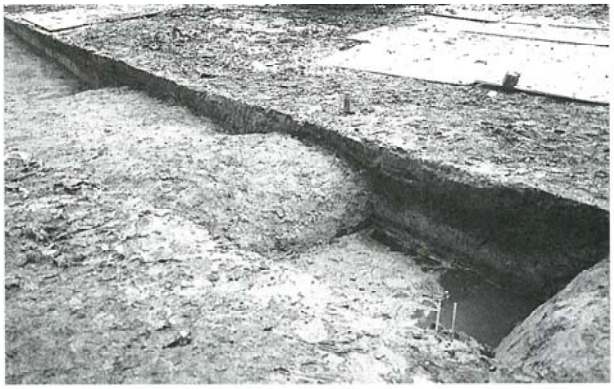
調査区表土除去終了状況（南から）



面整理作業風景（南西から）



遺構検出状況（南西から）



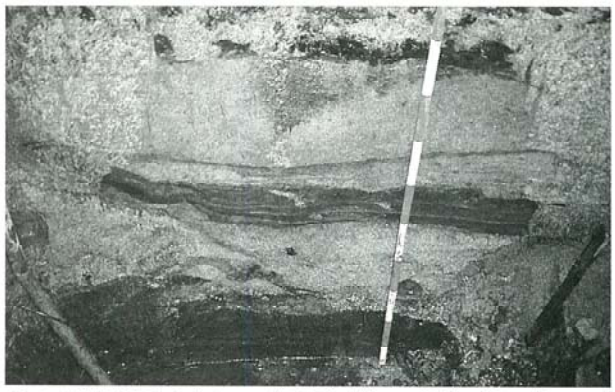
ＳＧ３河川跡Ｔ１トレンチ土層断面（西から）

ＳＧ３河川跡Ｔ２（深掘トレンチ）土層断面（南から）

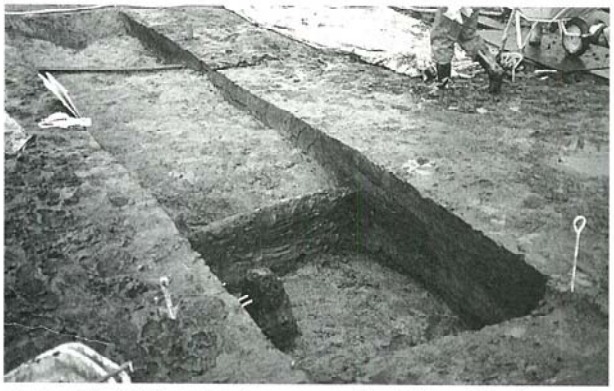
ＳＧ３河川跡Ｔ２（深掘トレンチ）土層断面（北から）

図版２

ＳＧ３河川跡Ｔ２トレンチ深掘り作業状況（南西から）



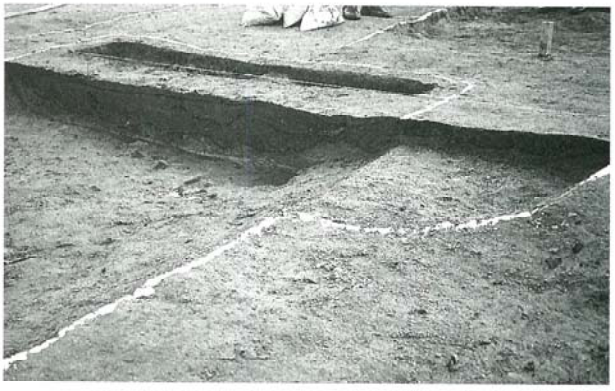
ＳＧ３河川跡Ｔ２トレンチ深掘り（約２ｍ）断面状況（東から）



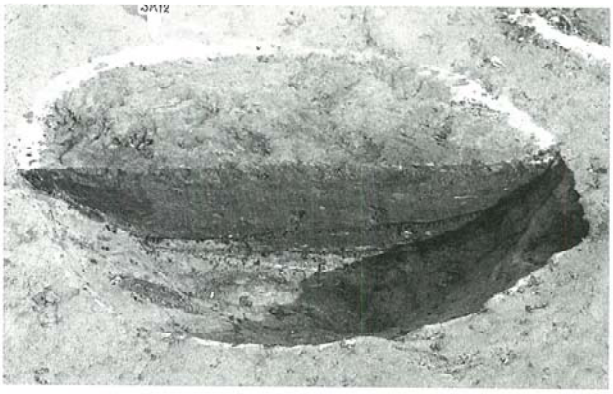
ＳＧ３河川跡Ｔ３トレンチ土層断面（北東から）

ＳＤ２溝跡③ベルト南側断面（南西から）

ＳＤ２溝跡⑧ベルト断面（南から）



ＳＤ２溝跡①ベルト断面およびＳＸ１断面（北から）

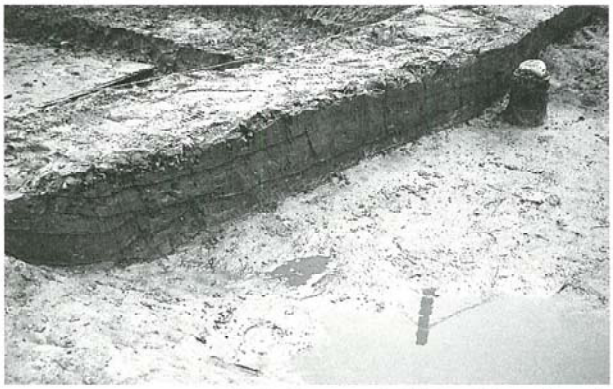


ＳＫ12土坑跡土層断面（南西から）

ＳＫ17土坑跡土層断面（南西から）

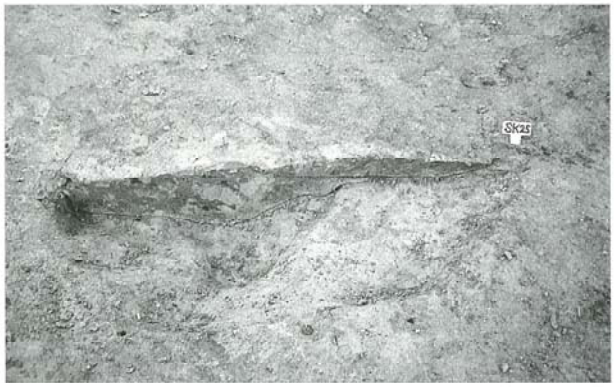
図版３

ＳＤ２溝跡⑦ベルト断面（南から）

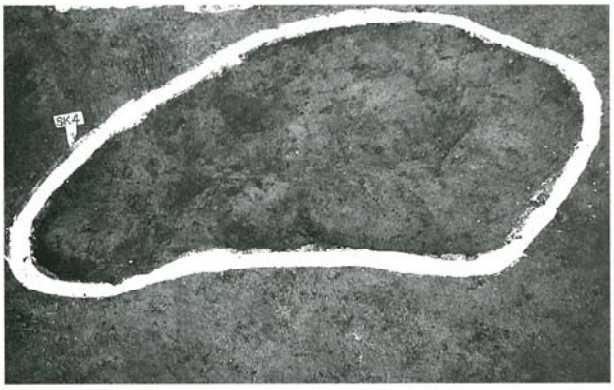


ＳＤ２溝跡④ベルト断面（南西から）

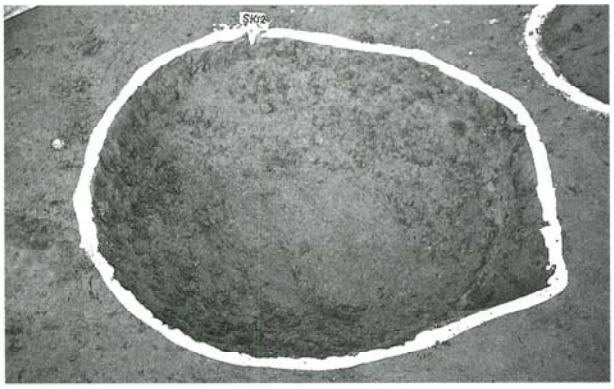
ＳＫ５土坑跡（半截）遺物出土状況（東から）



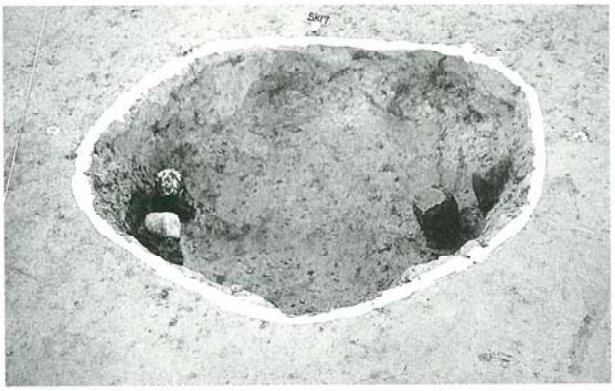
ＳＫ25土坑跡土層断面（南から）



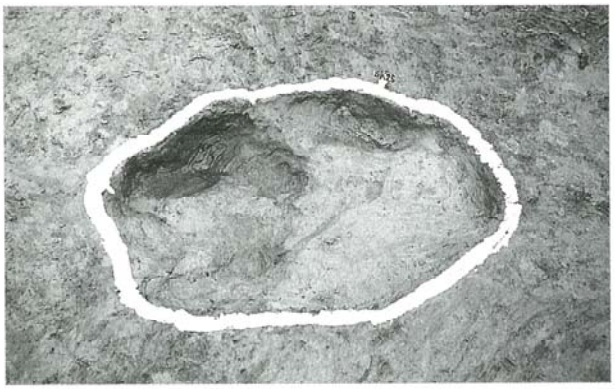
ＳＫ４土坑跡完掘状況（東から）



ＳＫ12土坑跡完掘状況（南から）



ＳＫ17土坑跡（完掘）遺物出土状況（南西から）

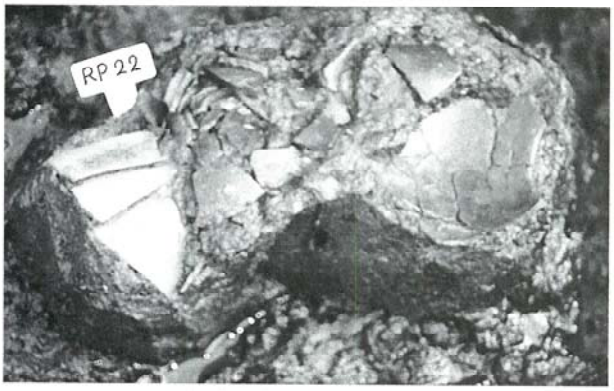


ＳＫ25土坑跡完掘状況（南から）

図版４

ＳＤ２溝跡ＲW11(下駄)出土状況(南から)

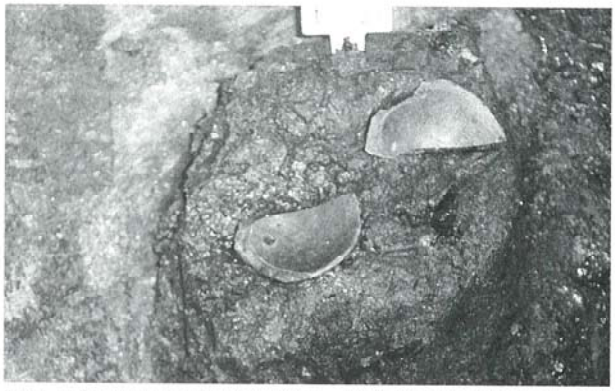
ＳＧ３河川跡ＲＰ23(土師器・壺)出土状況(北西から)



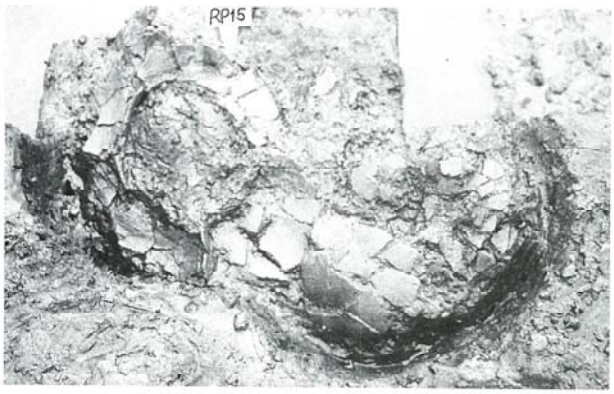
ＳＧ３河川跡ＲＰ22出土状況(西から)

ＳＤ２溝跡ＲM17(刀子)出土状況(東から)

ＳＤ２溝跡ＲＰ18出土状況(東から)



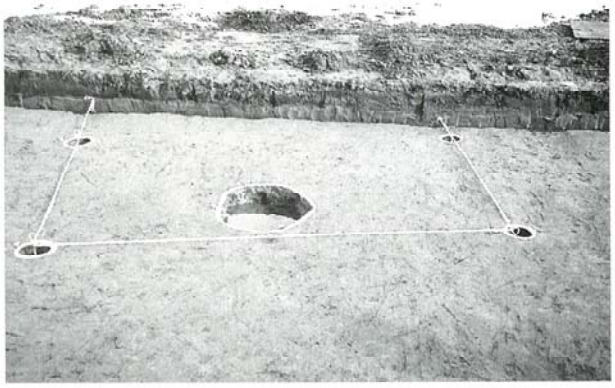
ＳＧ３河川跡ＲＰ21(土師器・器台)出土状況(西から)



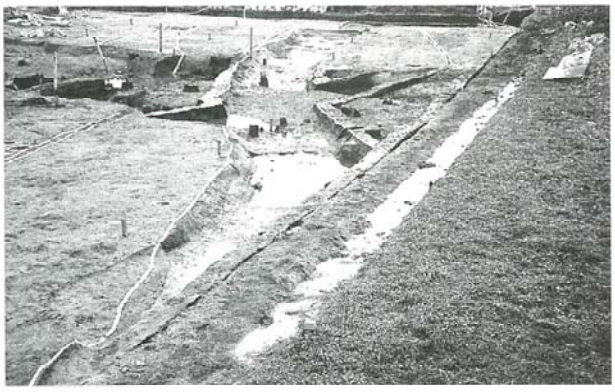
ＳＧ３河川跡ＲＰ15(土師器・壺)出土状況(西から)

ＳＧ３河川跡土師器出土状況(北東から)

ＳＧ３河川跡 土師器 木出土状況(東から)



ＳＢ28掘立柱建物跡完掘状況(西から)

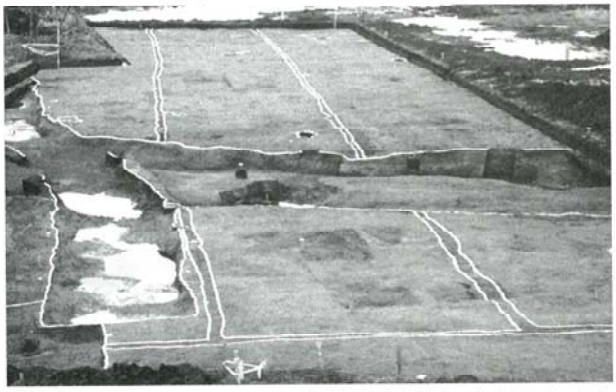


ＳＤ２溝跡完掘状況(北から)

ＳＤ２溝跡完掘状況(南から)

ＳＫ５土坑跡完掘状況(南から)

ＳＧ3河川跡完掘状況(東から)

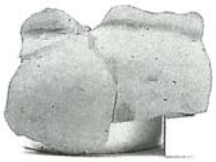


ＳＤ２溝跡・ＳＧ３河川跡完掘状況(南西から)

第２次調査区精査終了全景(上空から)

図版６

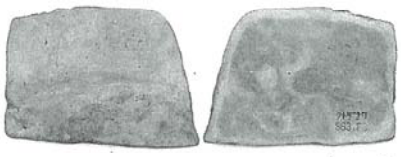
1

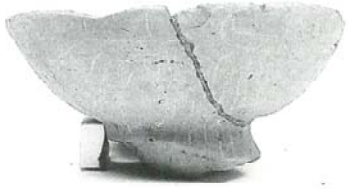

2

3

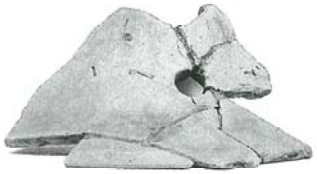
4

5


6


7

8

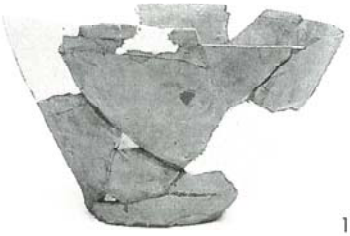

9

10

11

12

13


14

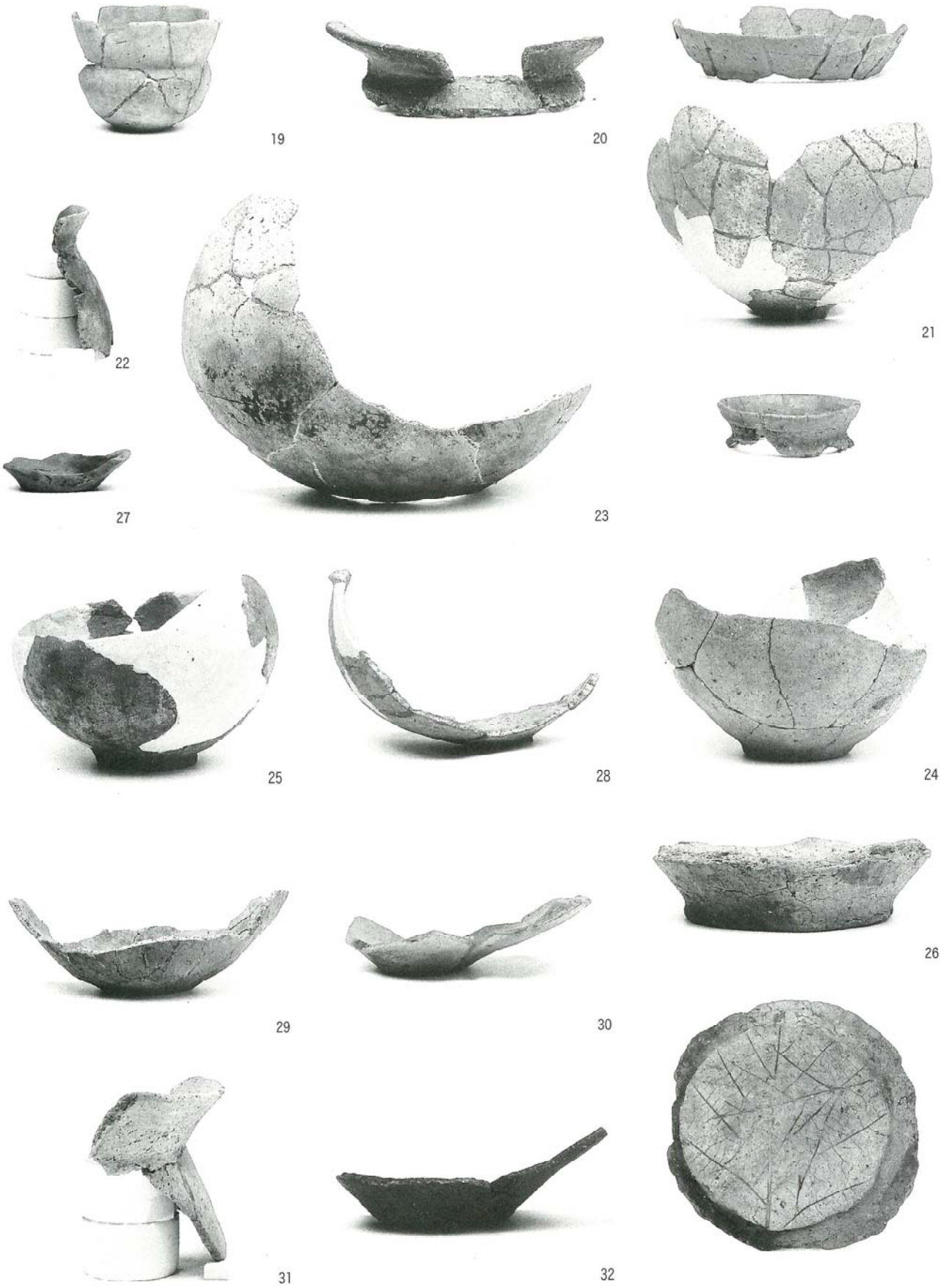
15

16

17

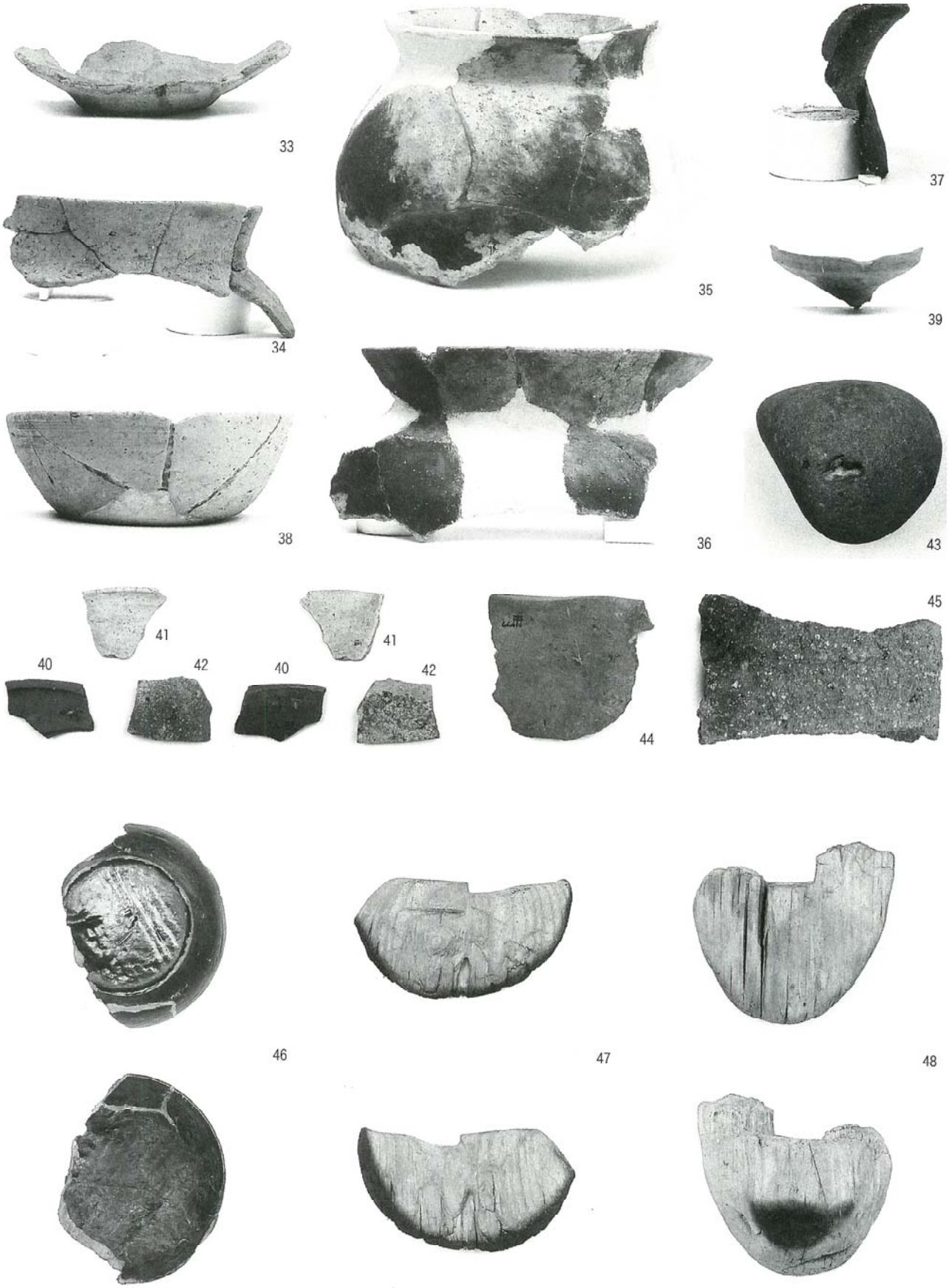
18

出土遺物（１）

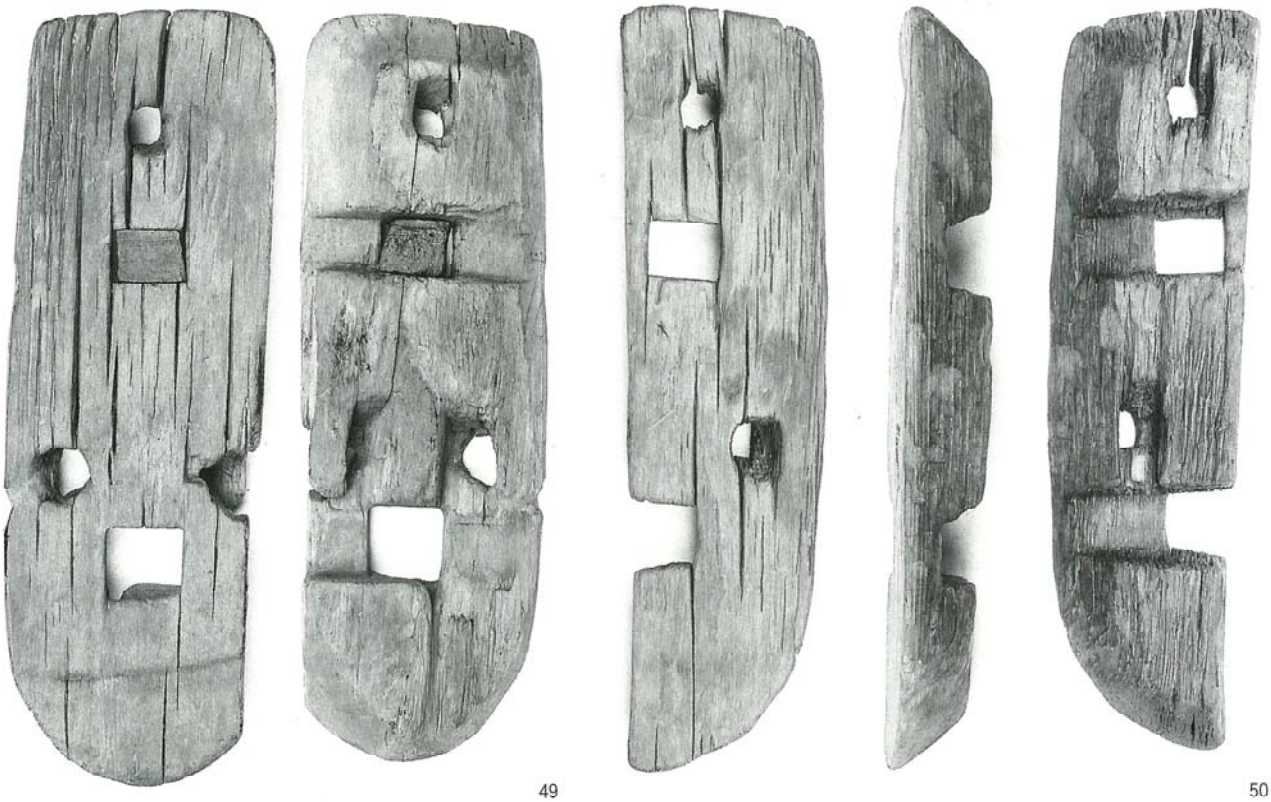


出土遺物（２）

図版８

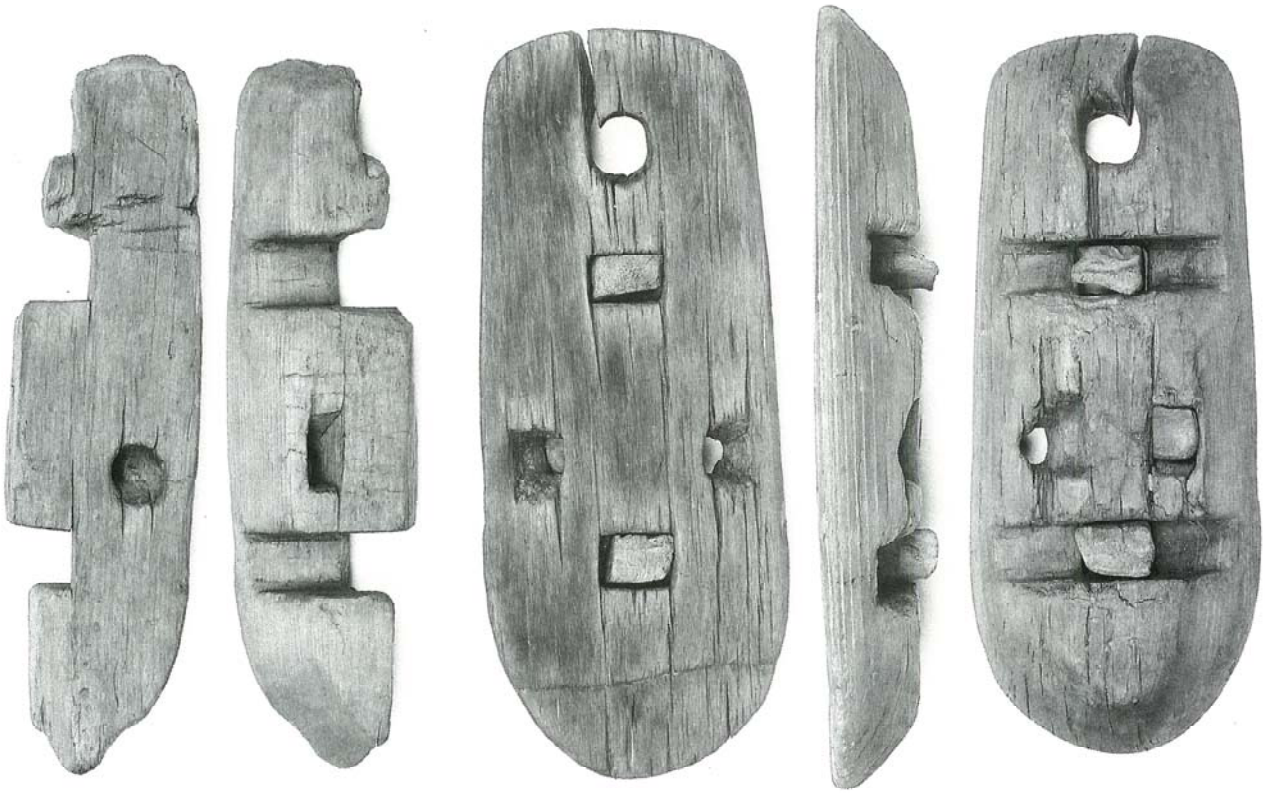


出土遺物（３）



49

50



51

52

出土遺物（４）

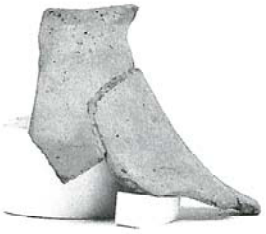
図版10

53

54

56

59


62

63

64

63

64

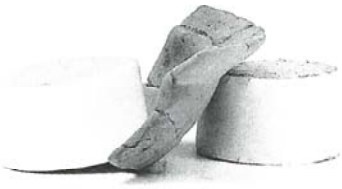
57

55

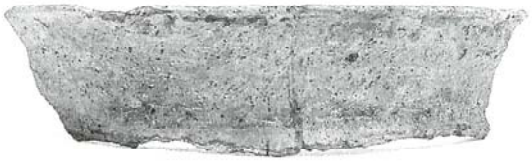
57

55

58


60

61


65

出土遺物（５）

調査区空中写真（南から）

調査区遠景（南から）

重機稼働状況（東から）

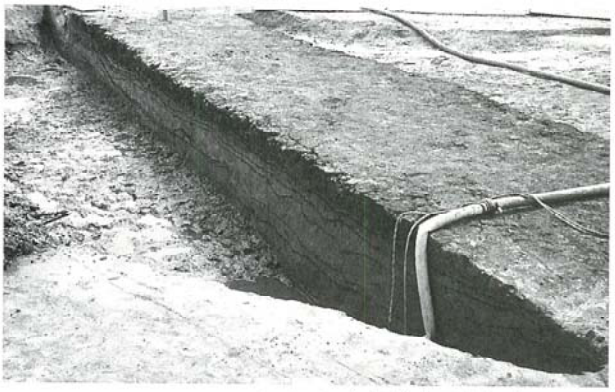
作業状況（東から）

作業状況（南から）

図版12

基本層序Ｄ（南から）

ＳＧ２精査状況（東から）



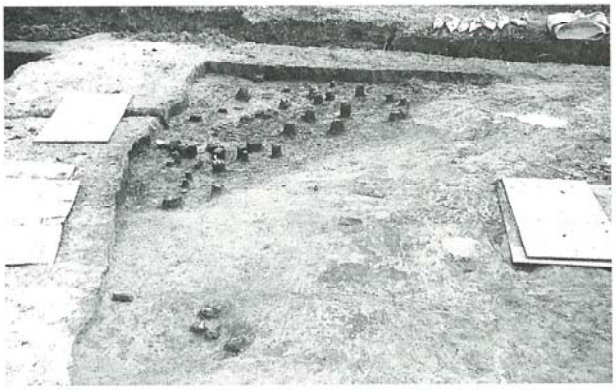
ＳＧ２土層断面（北東から）

ＳＧ２完掘状況（南東から）

ＳＧ３西側出土状況（北から）

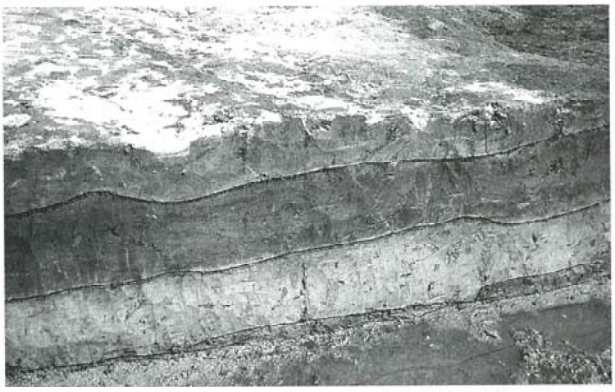
ＳＧ３器台出土状況（北から）

ＳＧ３板状木製品出土状況（北から）

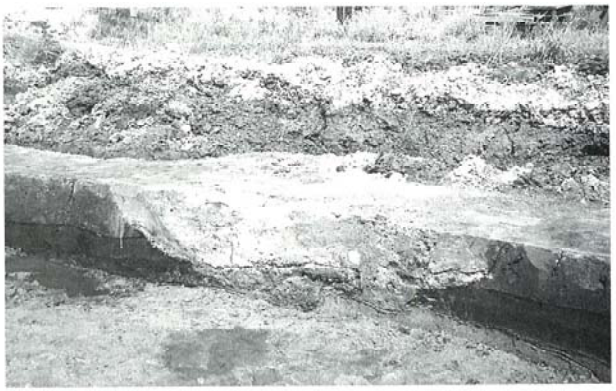


ＳＧ３東側出土状況（西から）

ＳＧ３農具出土状況（南から）



ＳＧ３土層断面（西から）

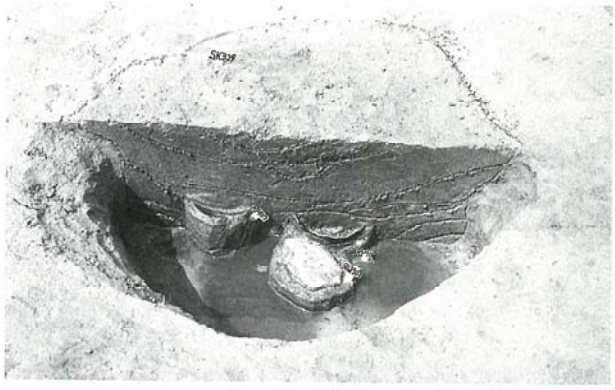


ＳＧ３・ＳＤ302土層断面（西から）

ＳＧ３検出状況（西から）

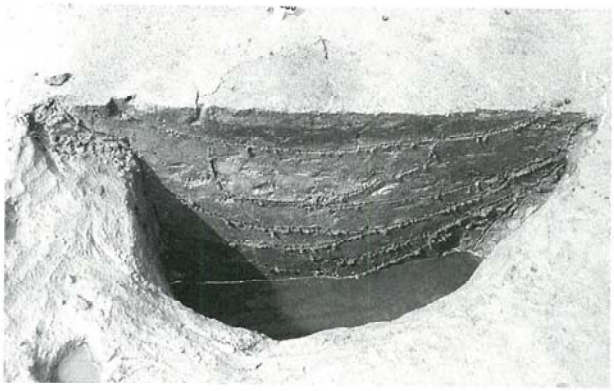
ＳＧ３完掘状況（南東から）

図版14



ＳＫ329土層断面（南から）

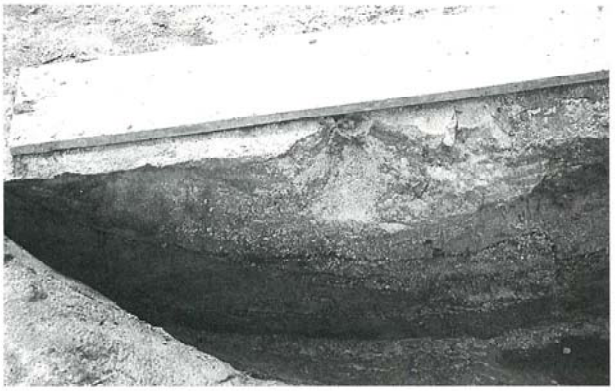
ＳＫ329土師器出土状況（南から）



ＳＫ330土層断面（南から）

ＳＨ410土層断面（東から）

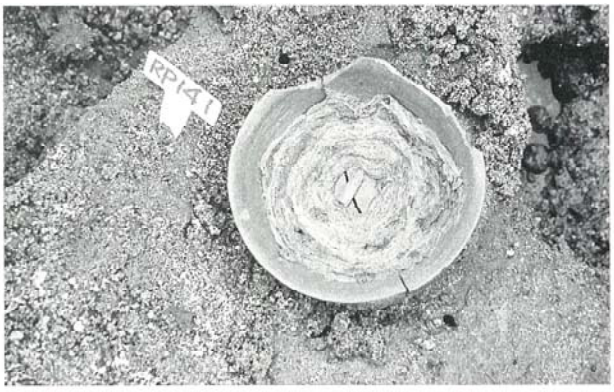
ＳＨ410完掘状況（東から）



ＳＤ302土層断面（東から）

ＳＤ302精査状況（東から）

ＳＤ302出土状況（西から）

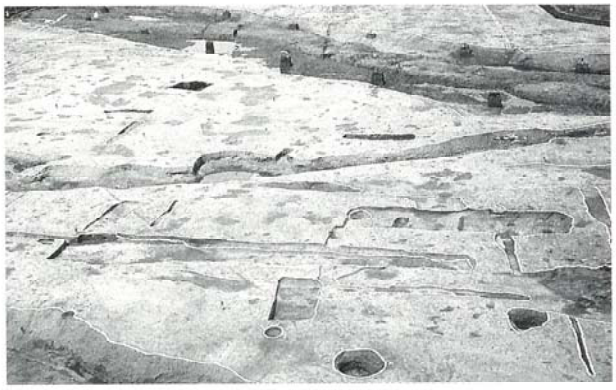


ＳＤ302須恵器坏出土状況（北から）

ＳＤ302挽物大盤・須恵器坏出土状況（西から）

ＳＤ302墨書土器「㊤」出土状況（西から）

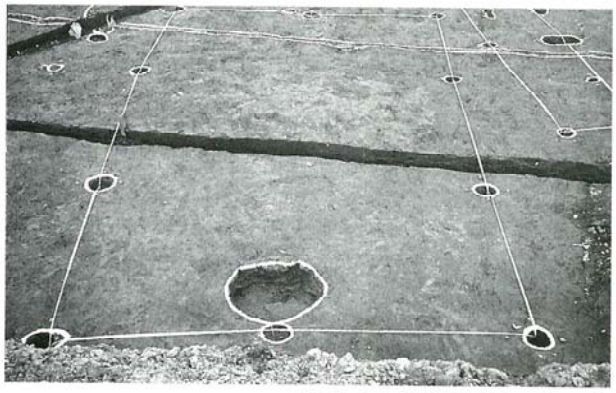
ＳＤ302墨書土器「古」出土状況（北から）



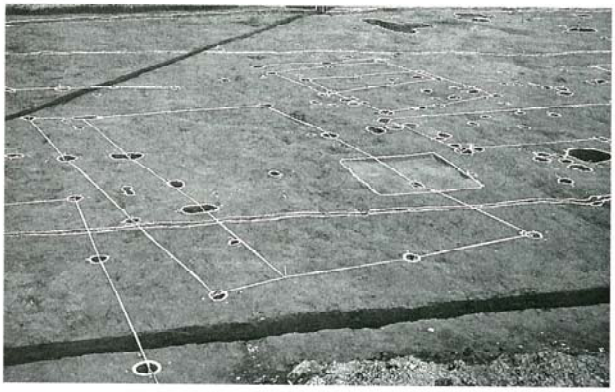
ＳＤ302完掘状況（南から）

図版16

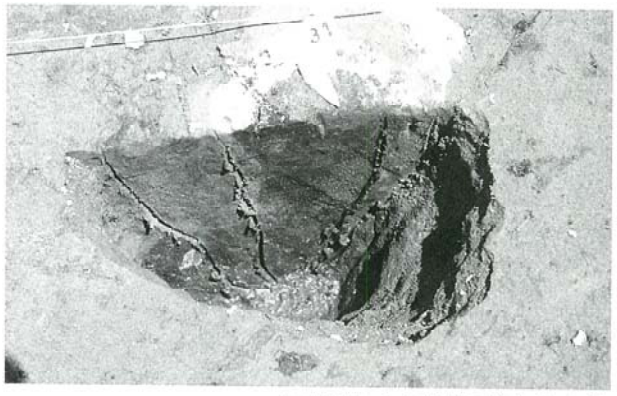
北側掘立柱建物跡群（北東から）



ＳＢ14完掘状況（西から）

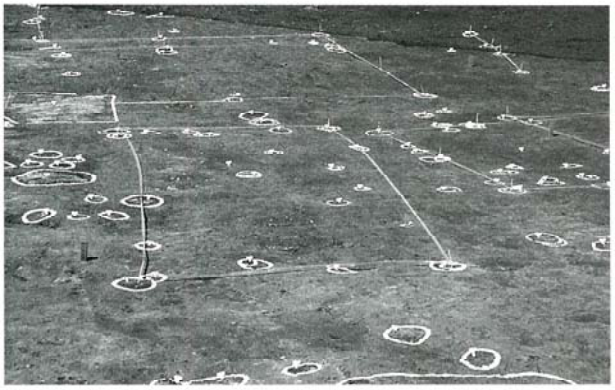


ＳＢ32完掘状況（西から）

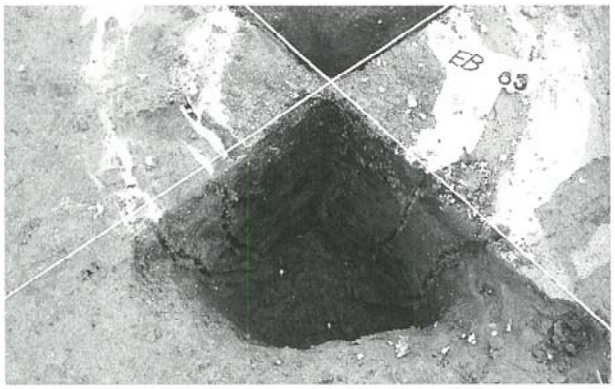


ＥＢ31土層断面（南から）

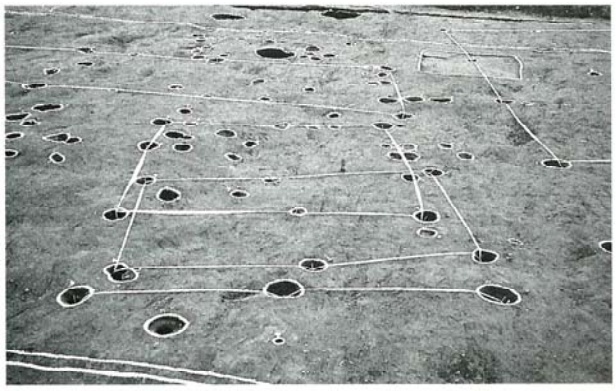
ＥＢ35北西断面（北西から）



ＳＢ81検出状況（南から）

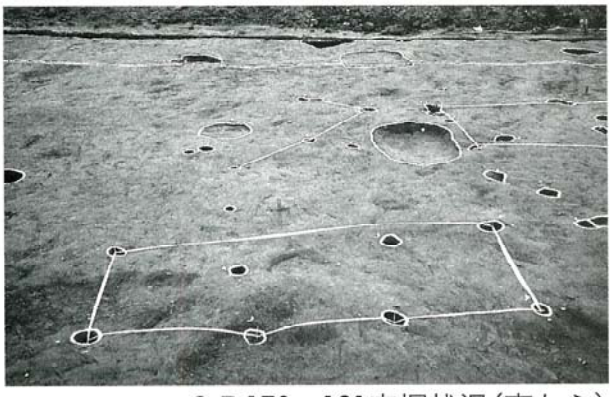


ＥＢ83北西土層断面（北西から）

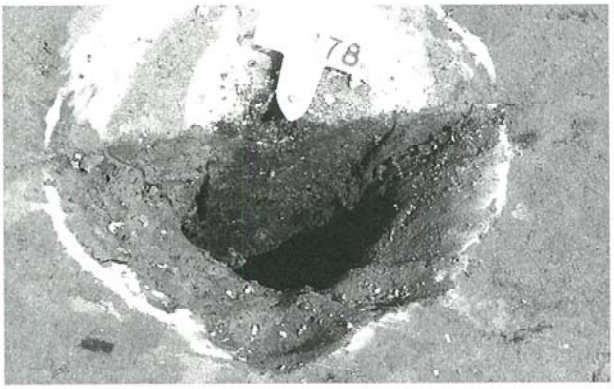


ＳＢ116・125完掘状況（東から）

ＥＢ129・130南東土層断面（南東から）



ＳＢ170・181完掘状況（東から）



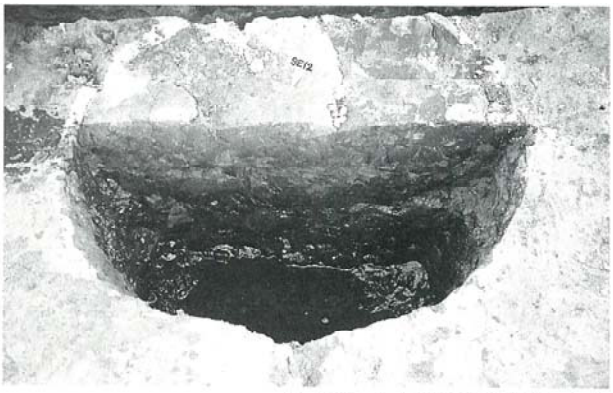
ＥＢ178土層断面（西から）

ＳＫ７土層断面（西から）

ＳＫ８土層断面（東から）

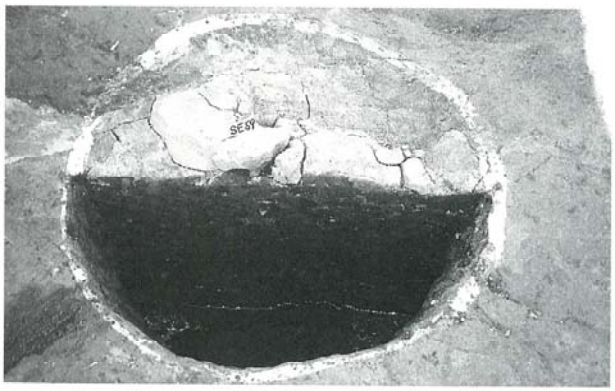
図版18

ＳＥ11完掘状況(東から)

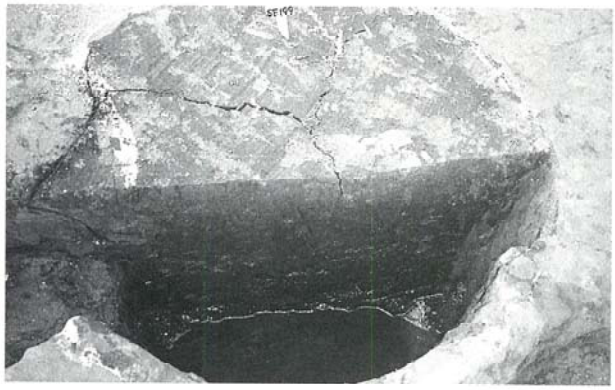


ＳＥ12土層断面(東から)

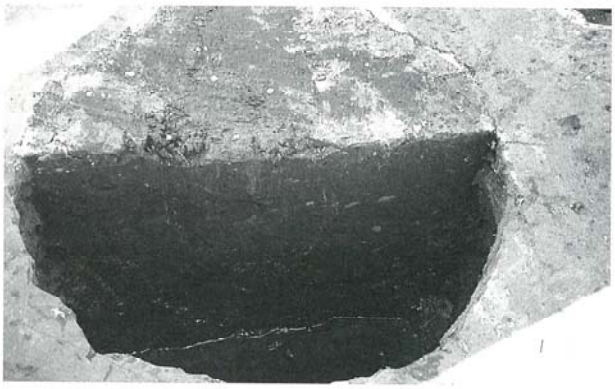
ＳＥ12曲物底板出土状況(東から)



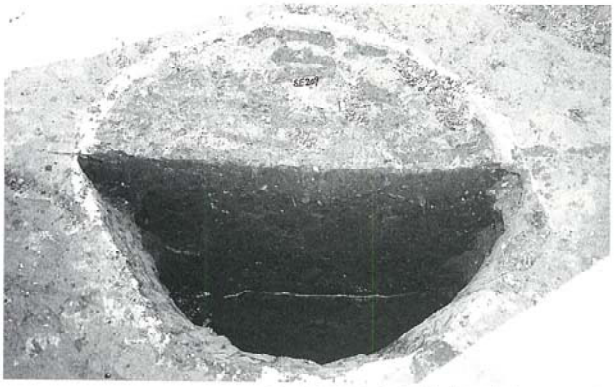
ＳＥ59土層断面(南から)



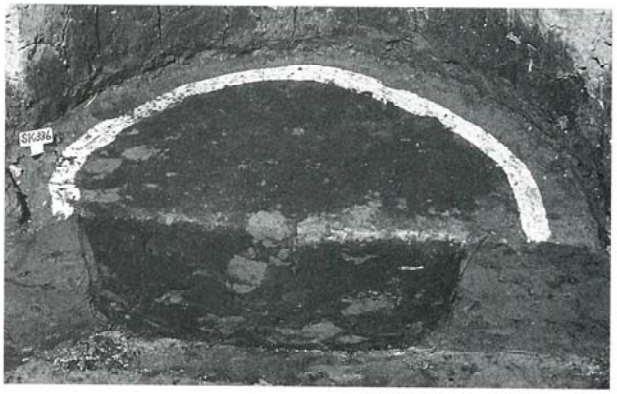
ＳＥ199土層断面(南から)



ＳＥ208土層断面(南から)



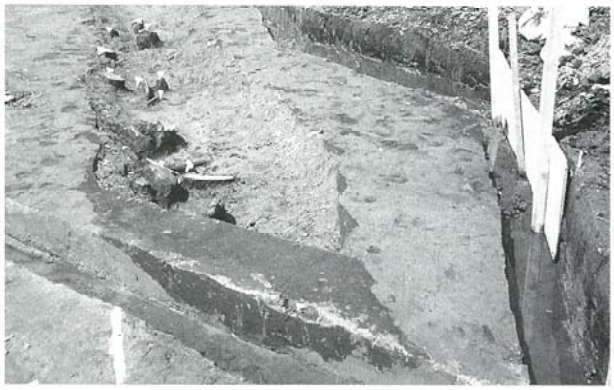
ＳＥ209土層断面(南から)



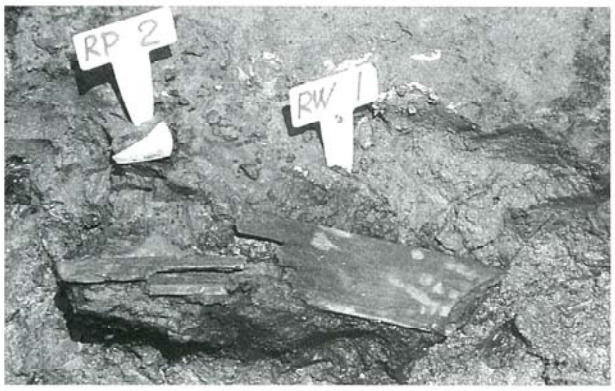
ＳＫ336断面(西から)

図版19

ＳＤ４ａ－ａ′ 土層断面(東から)



ＳＤ４ｃ－ｃ′ 土層断面(南から)



ＳＤ４青磁碗破片出土状況(南から)

ＳＤ４扇骨出土状況(西から)

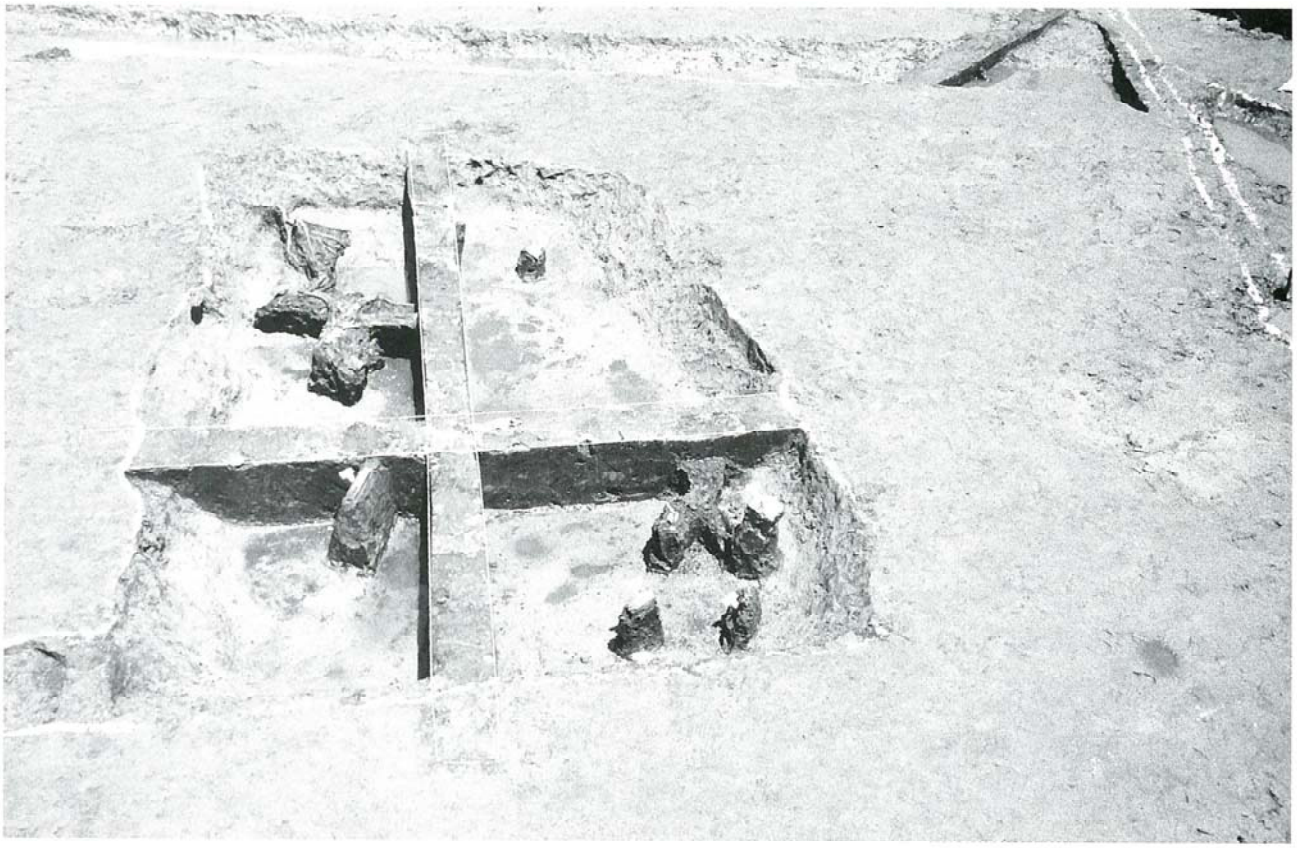
ＳＤ４漆刷毛出土状況(西から)

ＳＤ４刀鞘出土状況(南西から)

ＳＤ４青磁碗破片出土状況(北東から)

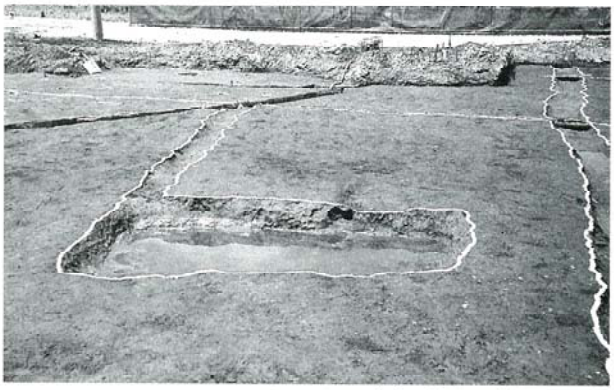
ＳＤ４出土状況(北から)

図版20



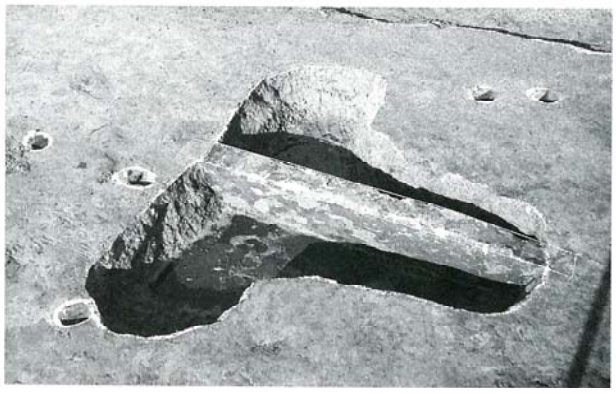
ＳＸ342(南から)

ＳＸ342東西土層断面(南から)

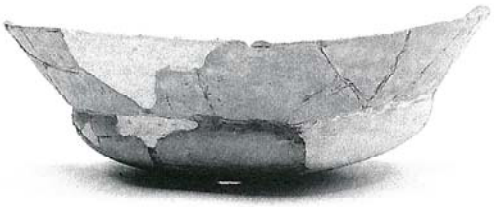


ＳＸ342完掘状況(東から)

ＳＸ342人骨出土状況(東から)



ＳＸ195土層断面(西から)



1

2

3

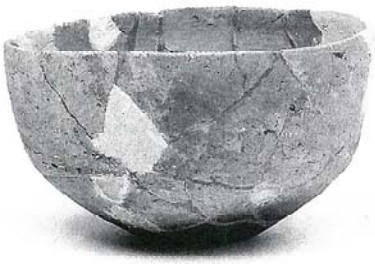
4

5

6

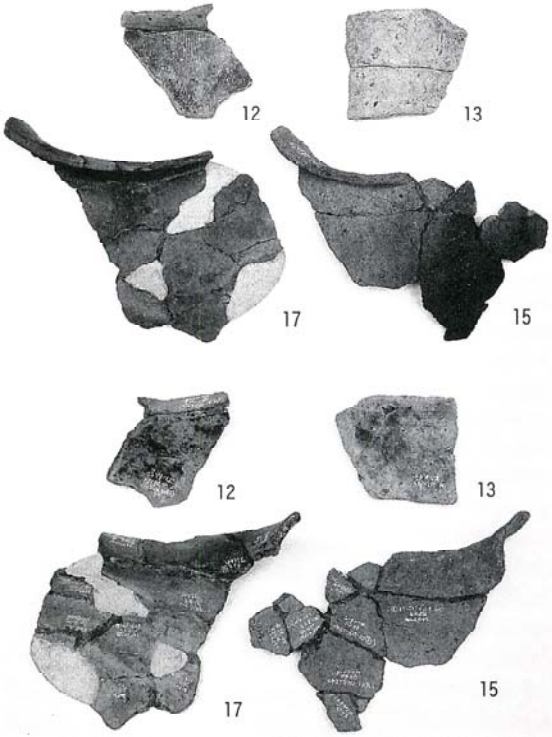
7

8



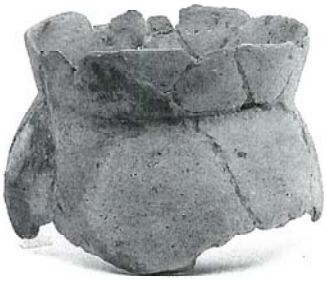
9

10



出土遺物（１）

図版22



11

16

18

14

20

19

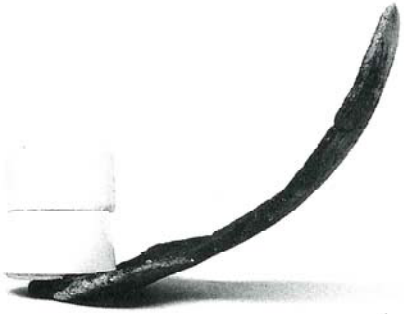
21

22

26

23

24



25

出土遺物（２）

27

28

31

34

35

29

33

30

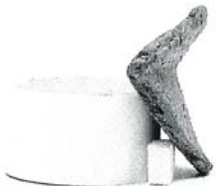
32

37

36

出土遺物（３）

図版24


38

43

44

45

43

44

45

39

48

41

48

41

42

49

40

49

40

46

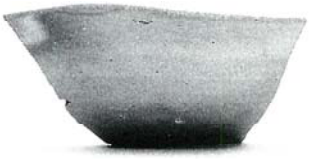
47

50

51

52

52

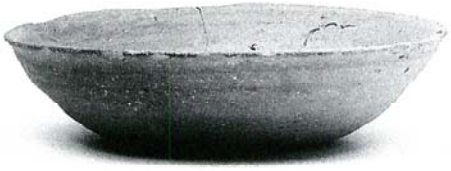

55

出土遺物（４）

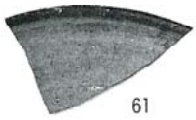
53

54

56



57

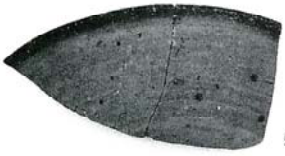


61

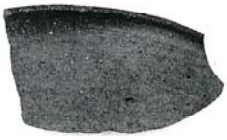
60

61

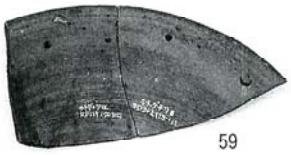
60



59



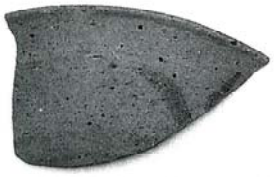
63



59

63

58



62

64

出土遺物（５）

図版26

65

66

67

68

69

70

71

73

78

72

78

72

81

82

81

82

80

79

80

79

83

87

出土遺物（６）

74

77

84

75

76

85

89

86

89

86

92

91

90

92

91

90

88

93

94

出土遺物（７）

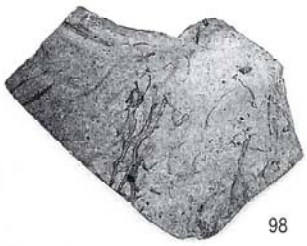
図版28

94

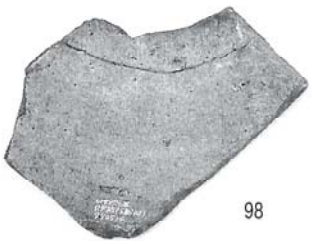
96

94

96


98

97


98

97

95

101

100

101

100

102

103

99

104

105

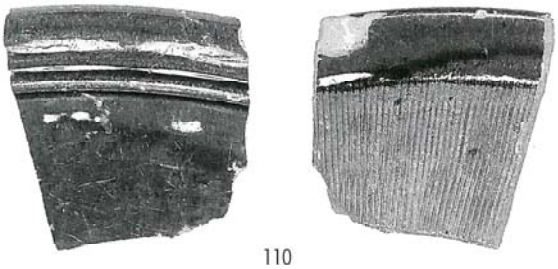
106

108

109

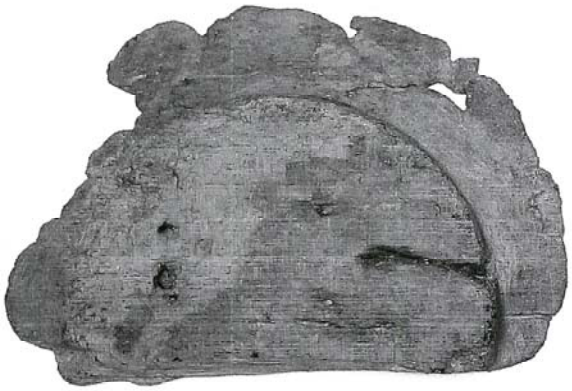
出土遺物（８）

107

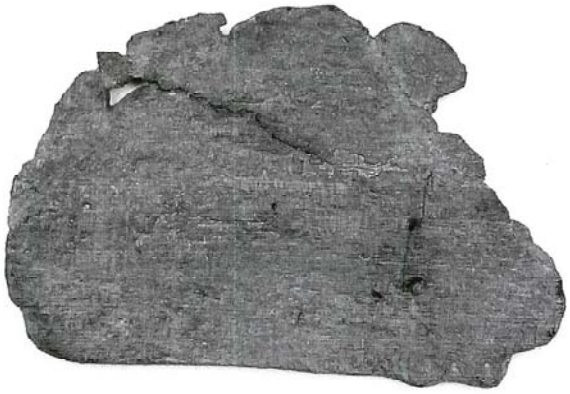


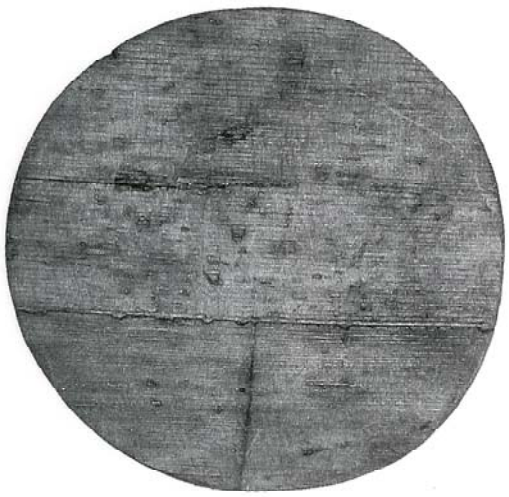
110

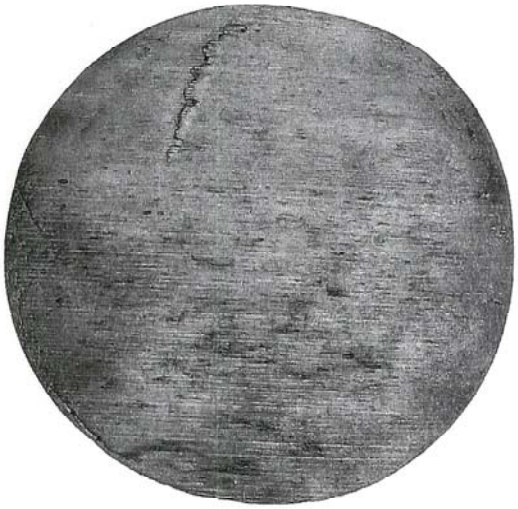
111



112



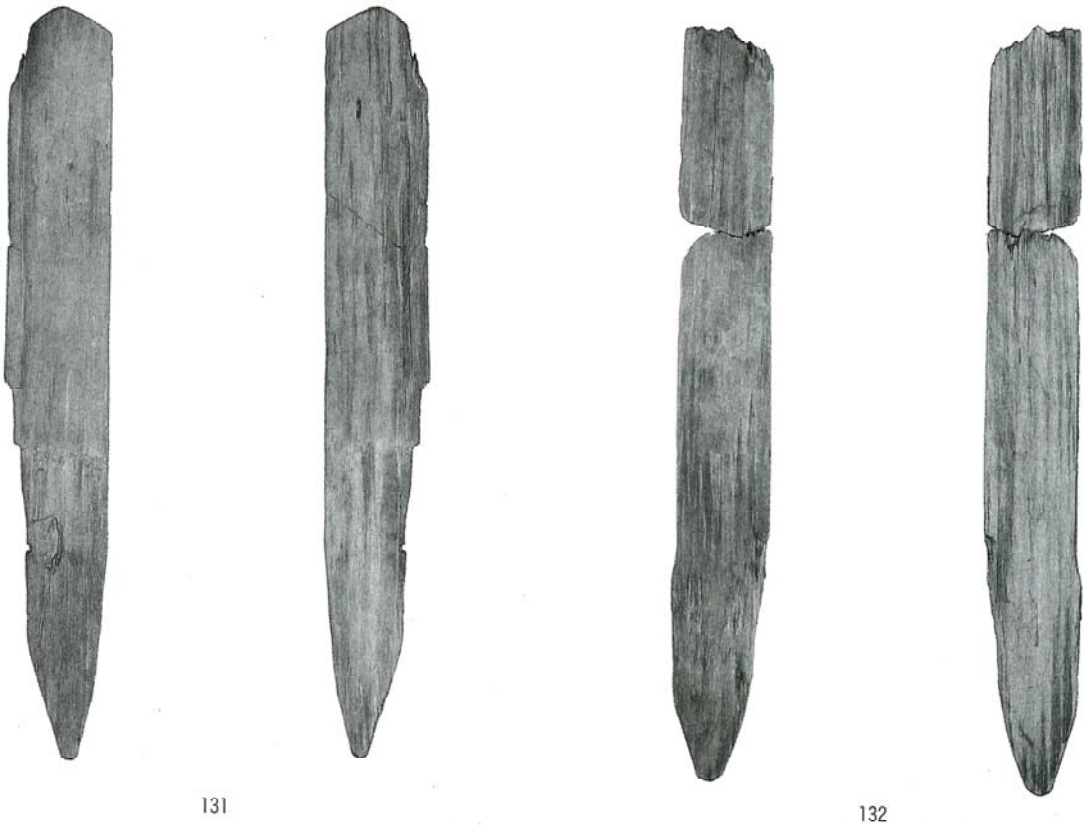




113

図版32

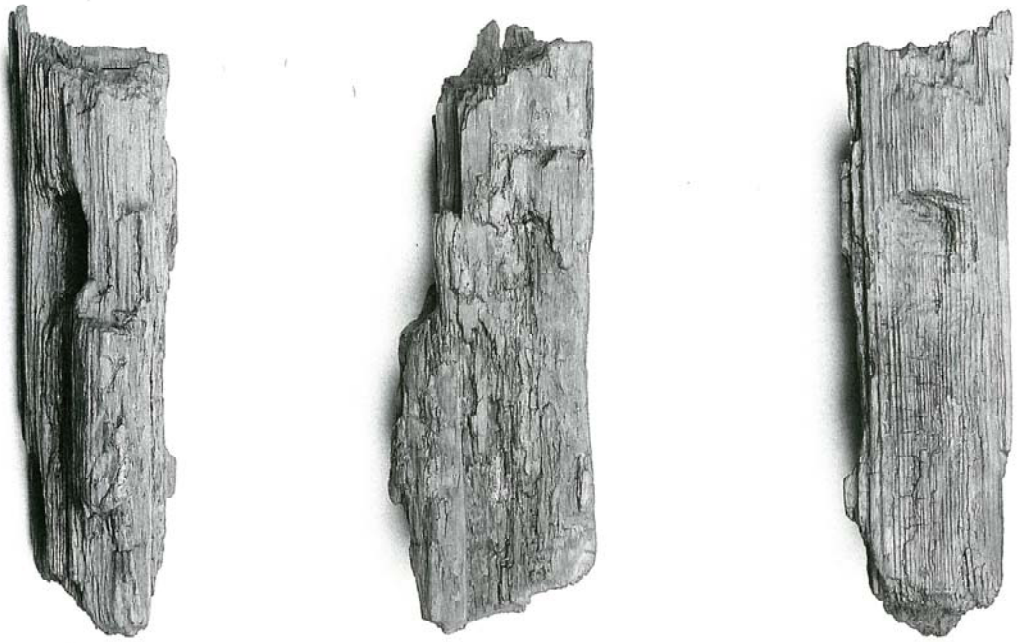
129　130



131　132

出土遺物（12）

133　　134



135

137　136　137　136　137　136

出土遺物（13）

図版34

138

140

141

142

144

145

143

146

139

147

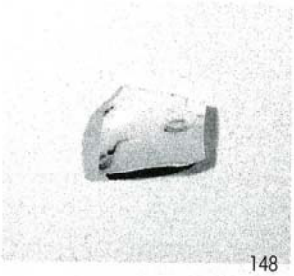
144

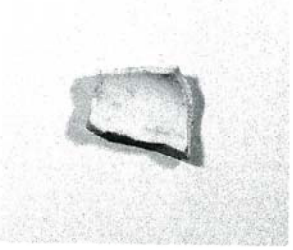
145

143

146

139


148



出土遺物（14）

付　　編

志戸田縄遺跡から出土した骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志戸田縄遺跡では、鎌倉時代の集落跡が検出されている。このうち、性格不明遺構（３次調査ＳＸ342）からは、焼骨片が出土している。これらの焼骨片は、火葬人骨か食用残渣の獣骨である可能性が考えられている。

今回は、これらの焼骨の種類や部位を明らかにし、遺構の性格に関わる情報を得ることにした。

１．試料

試料は、性格不明遺構（ＳＸ342）から出土した焼骨片４点である。各試料の詳細は、同定結果とともに表１に記した。

２．方法

ルーペなどを用いて、試料の形態的特徴を観察し、種類を同定する。同定は、早稲田大学金子宏昌先生にお願いした。

３．結果

同定結果を表１に示す。焼骨片は全てヒトで、確認された部位は大腿骨、橈骨または尺骨、および四肢骨片である。いずれも破片化が著しいため、性別、年齢などの詳細は不明である。

表１　ＳＸ342から出土した骨の種類・部位

番号	種名	部　位	左右	備　考
1	ヒト	橈骨or尺骨	不明	破片、焼骨
2	ヒト	橈骨or尺骨	不明	破片、焼骨
3	ヒト	大　腿　骨	不明	破片、焼骨
なし	ヒト	不明（四肢骨）	不明	破片（２点）、焼骨

４．まとめ

今回同定を行った焼骨片は、いずれも人骨であった。したがって、これらの骨が出土したＳＸ342は、埋葬に関連した施設の可能性がある。ただし、今回の同定試料はいずれも破片で数が少なく、また確認された部位が限られていることから、別の場所で火葬された人骨の一部がこの遺構内に埋葬されたことや、この遺構内で火葬された人骨のうち大部分が別の場所に移されたことなどが想定される。この点については、遺構覆土の堆積状況や含有物（焼土・炭化物等）に関する情報を加え、改めて検討したい。

山形県志戸田縄遺跡出土木製品の樹種調査結果（１）

㈱吉田生物研究所　汐見　　真
京都造形芸術大学　岡田　文男

１．試料

試料は志戸田縄遺跡から出土した工具１点、農具２点、武器１点、服飾具８点、容器３点、祭祀具５、部材１点、不明１点の合計22点である。ただし服飾具の下駄については本体と歯の両方を調査した。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面)、柾目（放射断面)、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果(針葉樹１種、広葉樹３種)の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ(Cryptomeria japonica D.Don)

(遺物NO.133,130,124,122,135,125,134,131,132,36,113)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）ブナ科ブナ属(Fagus sp.)

(遺物NO.46)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110μm)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、２～３列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、２～３列、広放射組織の３種類がある。広放射組織は肉眼でも１～３mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部)、本州、四国、九州に分布する。

３）ニレ科ケヤキ属ケヤキ(Zelkova serrata Makino)

(遺物NO.126,112,49,52,53)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270μm)が１列で孔圏部を形成してい

る。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数のすじとして見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下の端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

４）モクレン科モクレン属(Magnolia sp.)

（遺物NO.37,49,50,13,52,53）

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110μm)が単独ないし２～４個複合して多数分布する。軸方向柔細胞は１～２層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からな流同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～700μmとなっている。モクレン属はモクレン、ホオノキ、コブシ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東　隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊東　隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

島地　謙・須藤　彰司・原田　浩「木材の組織」森北出版株式会社（1982）

伊東　隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅳ」京都大学木質科学研究所（1995～）

北村　四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

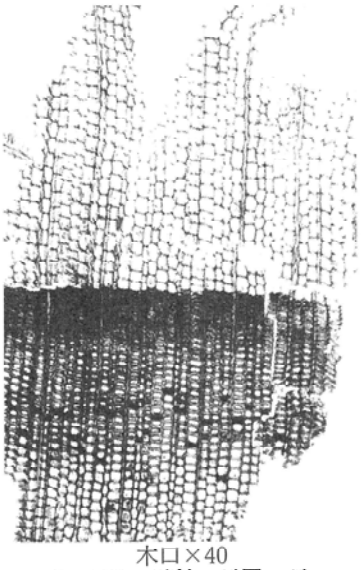
◆使用顕微鏡◆

Nikon

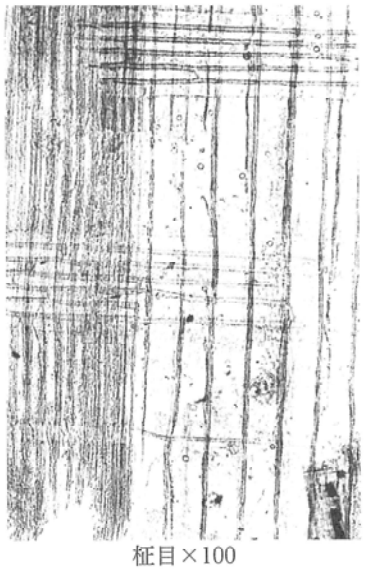
MICROFLEEX UFX-DX Type 115

山形県志戸田縄遺跡出土木製品樹種同定表

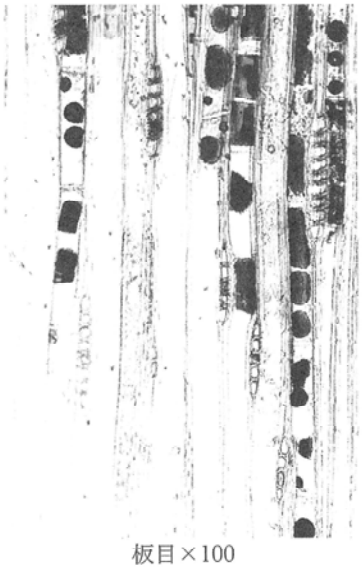
	No.	品　名	樹　種
第3次調査	133	塔婆	スギ科スギ属スギ
	130	塔婆	スギ科スギ属スギ
	124	漆刷毛	スギ科スギ属スギ
	122	桧扇	スギ科スギ属スギ
	126	下駄	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	135	部材	スギ科スギ属スギ
	125	刀鞘	スギ科スギ属スギ
	134	塔婆	スギ科スギ属スギ
	131	塔婆	スギ科スギ属スギ
	132	塔婆	スギ科スギ属スギ
	36	板状製品	スギ科スギ属スギ
	113	曲物の底	スギ科スギ属スギ
	37	農具	モクレン科モクレン属
	37	農具	モクレン科モクレン属
	112	大盤	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
第2次調査	46	漆器椀	ブナ科ブナ属
	49	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	49	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	50	下駄	モクレン科モクレン属
	13	下駄	モクレン科モクレン属
	52	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	52	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	48	下駄（本体）	モクレン科モクレン属
	53	下駄（歯）	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	53	下駄	モクレン科モクレン属



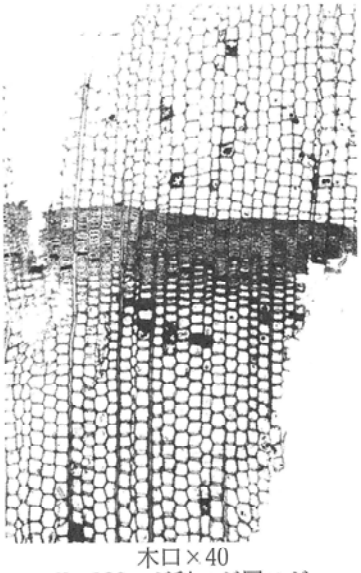
木口×40
No-133スギ科スギ属スギ



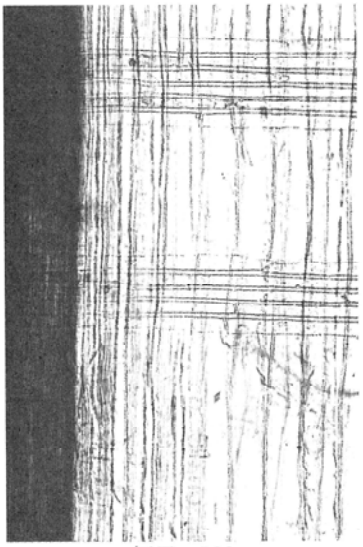
柾目×100



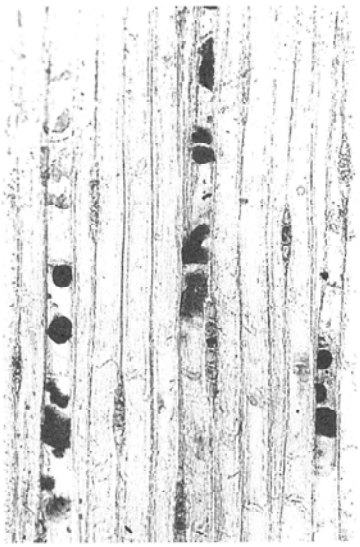
板目×100



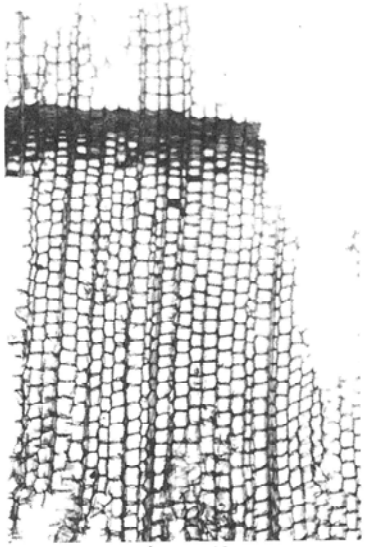
木口×40
No-130スギ科スギ属スギ



柾目×100

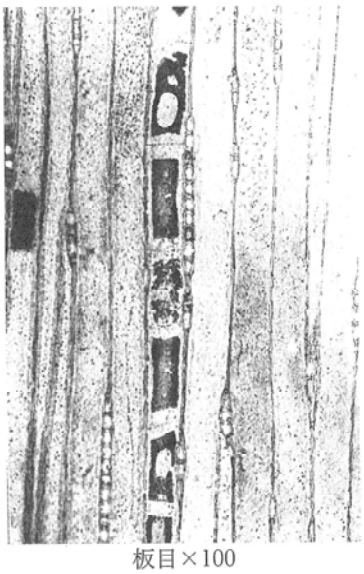


板目×100

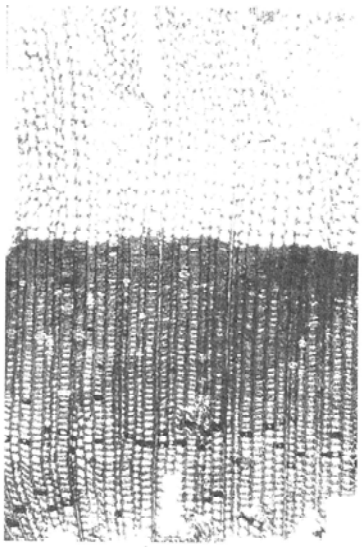


木口×40
No-124スギ科スギ属スギ

柾目×100



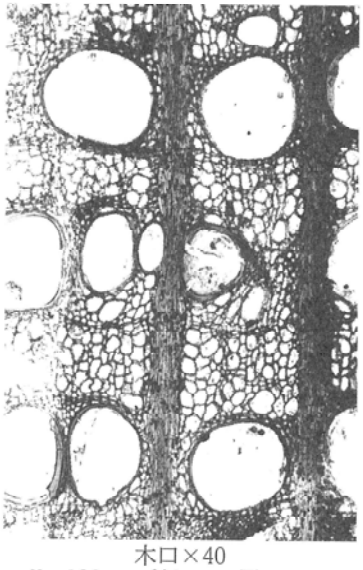
板目×100



木口×40
No-122スギ科スギ属スギ

柾目×100

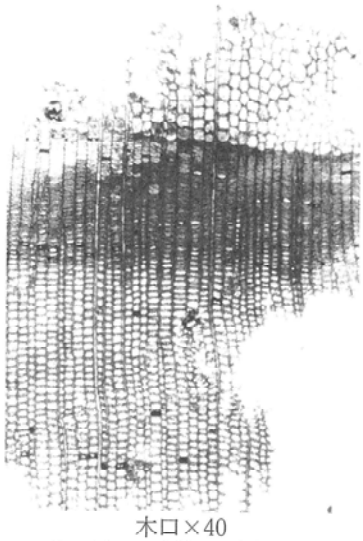
板目×100



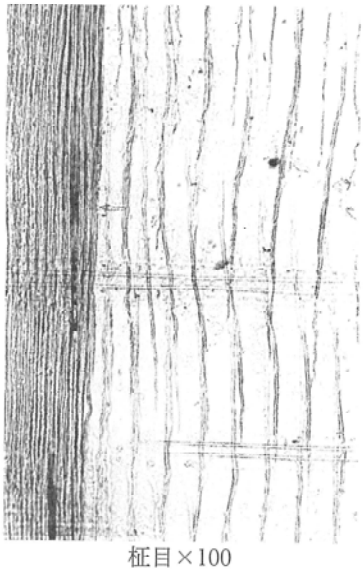
木口×40
No-126ニレ科ケヤキ属ケヤキ

柾目×40

板目×40

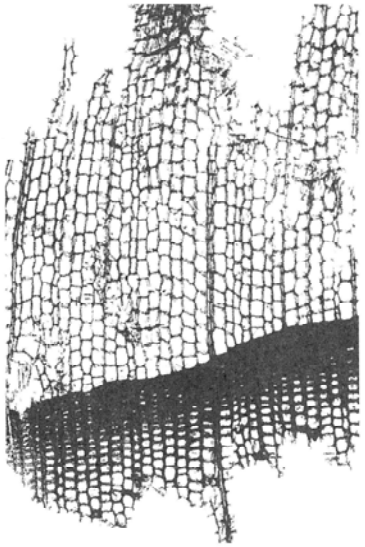


木口×40
No-135スギ科スギ属スギ

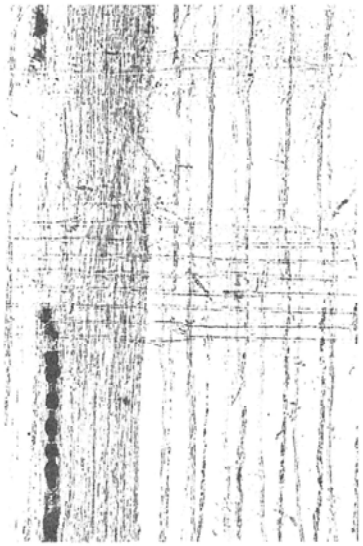


柾目×100

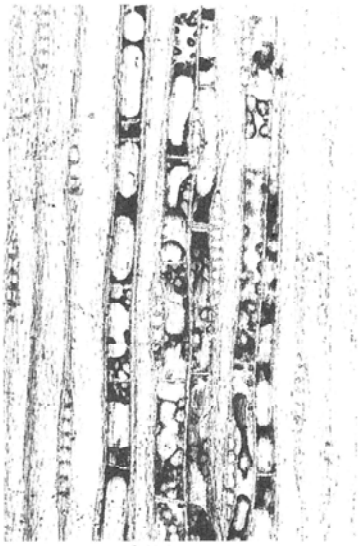
板目×40



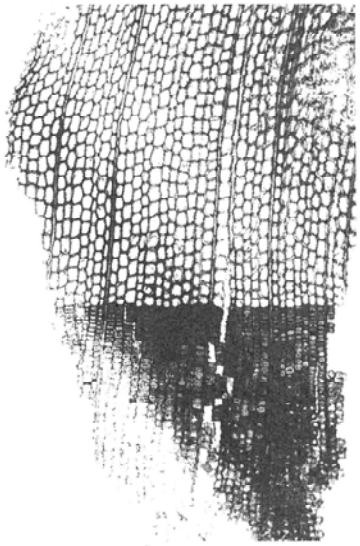
木口×40
No-125スギ科スギ属スギ



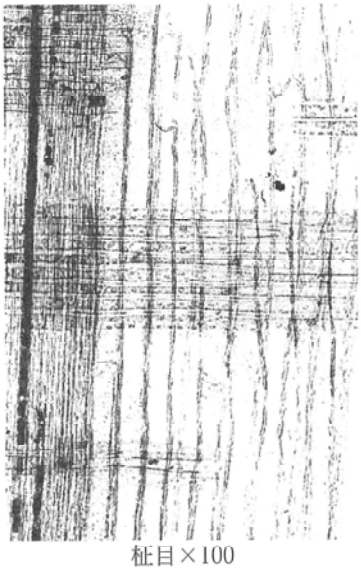
柾目×100



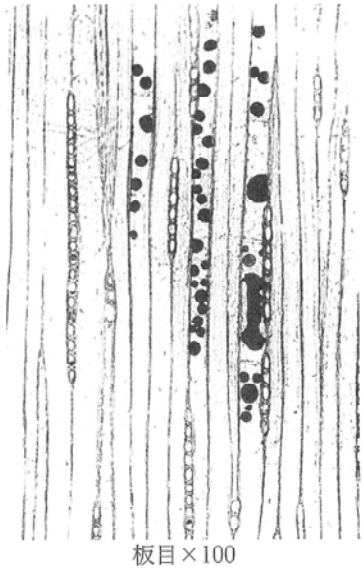
板目×100



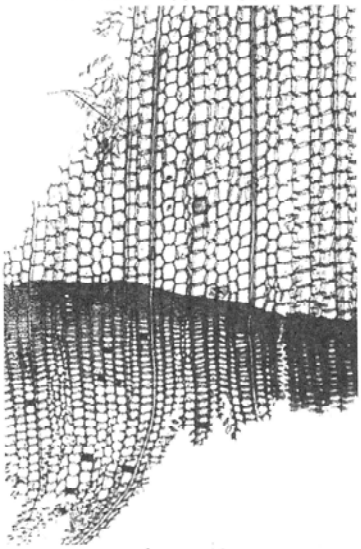
木口×40
No-134スギ科スギ属スギ



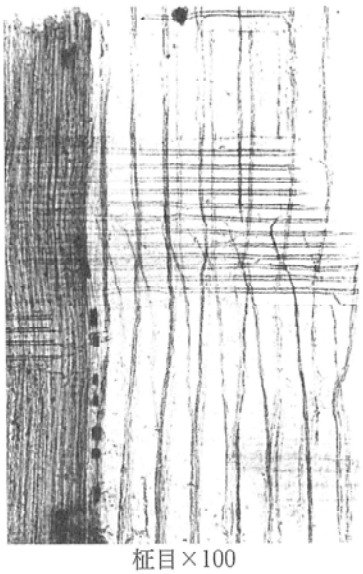
柾目×100



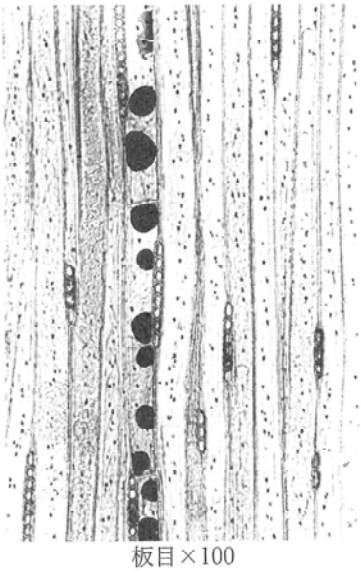
板目×100



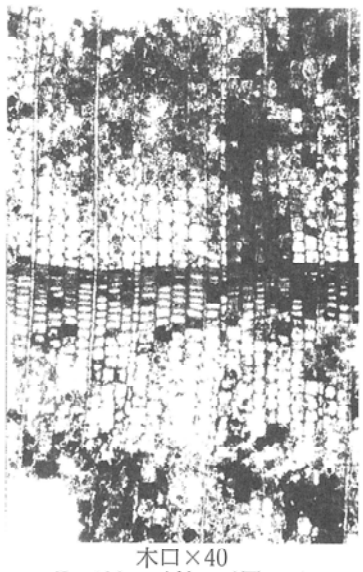
木口×40
No-131スギ科スギ属スギ



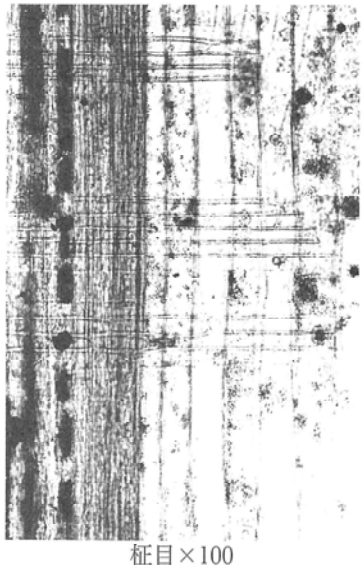
柾目×100



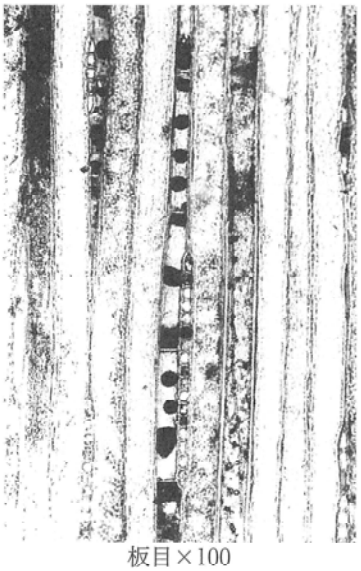
板目×100



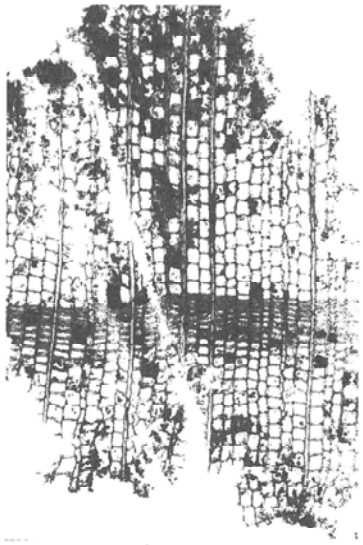
木口×40
No-132スギ科スギ属スギ



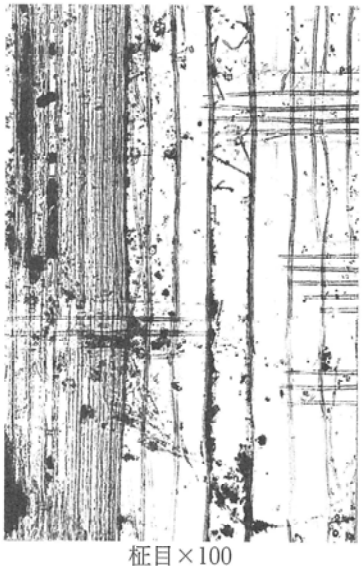
柾目×100



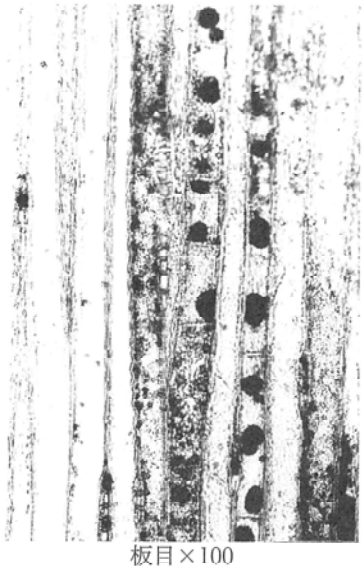
板目×100



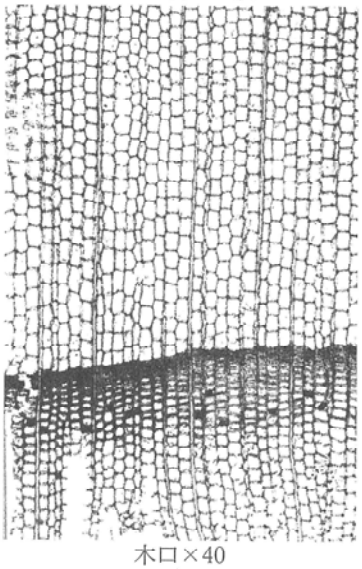
木口×40
No-36スギ科スギ属スギ



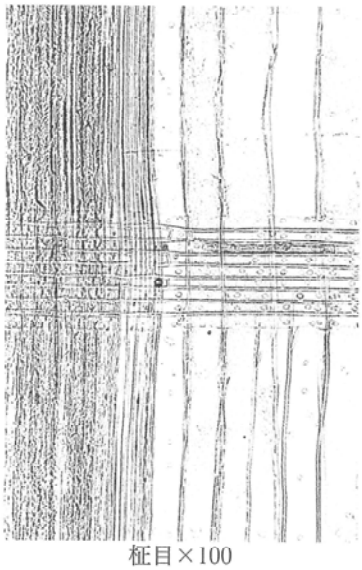
柾目×100



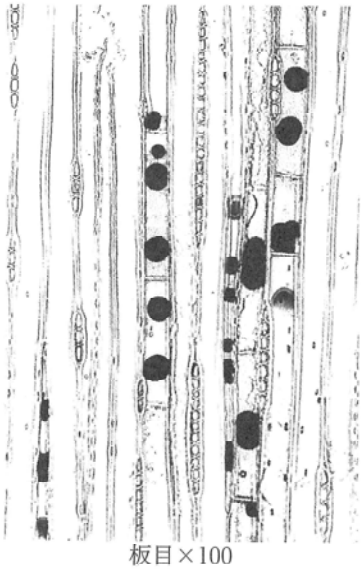
板目×100



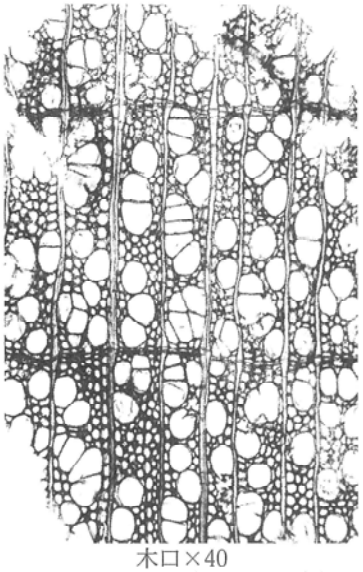
木口×40
No-113スギ科スギ属スギ



柾目×100

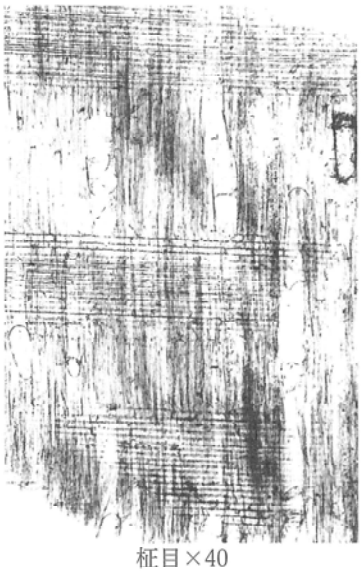


板目×100



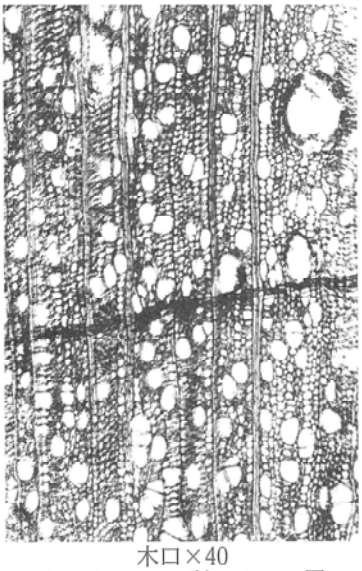
木口×40

No-37モクレン科モクレン属



柾目×40

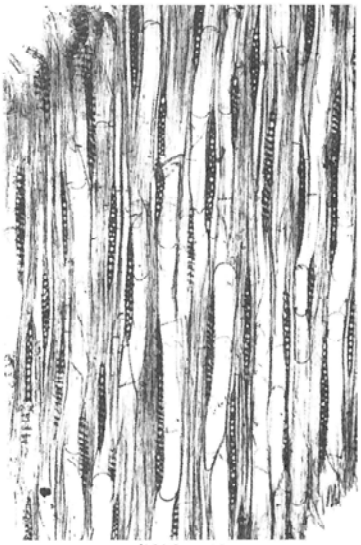
板目×40



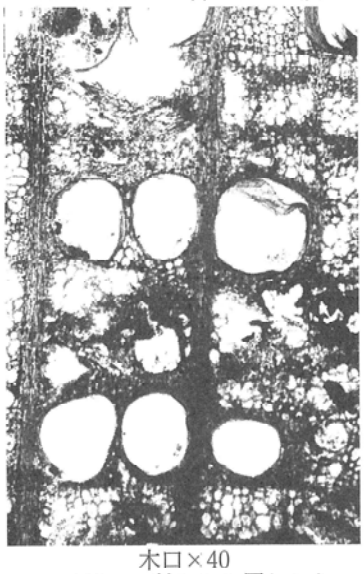
木口×40

No-37モクレン科モクレン属

柾目×40



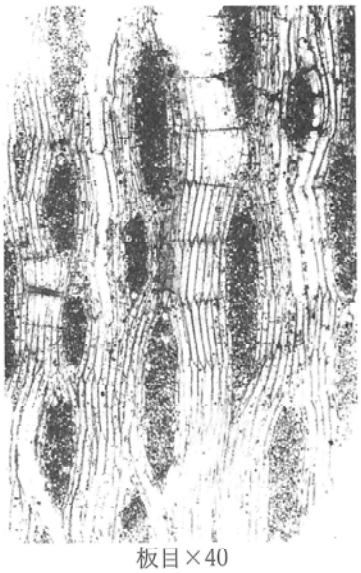
板目×40



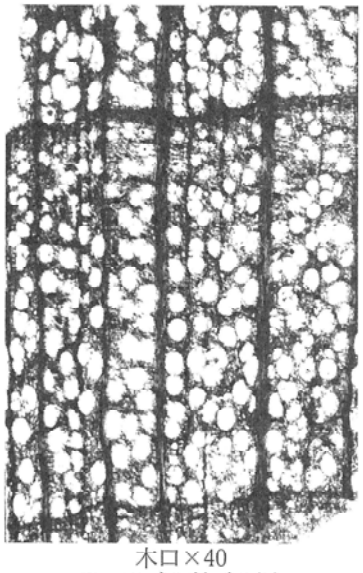
木口×40

No-112ニレ科ケヤキ属ケヤキ

柾目×40



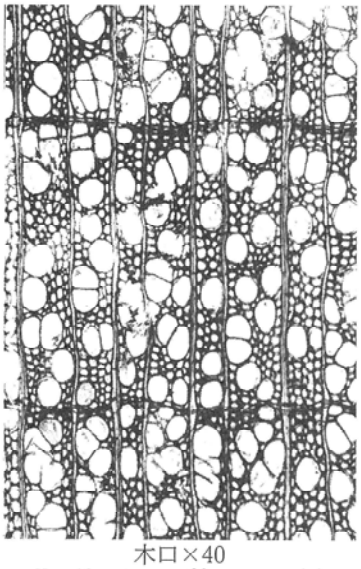
板目×40



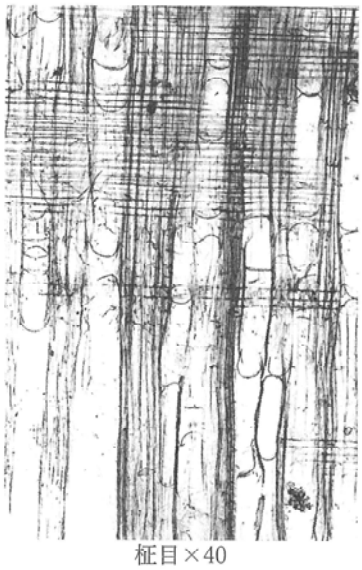
木口×40
No-46ブナ科ブナ属

柾目×40

板目×40

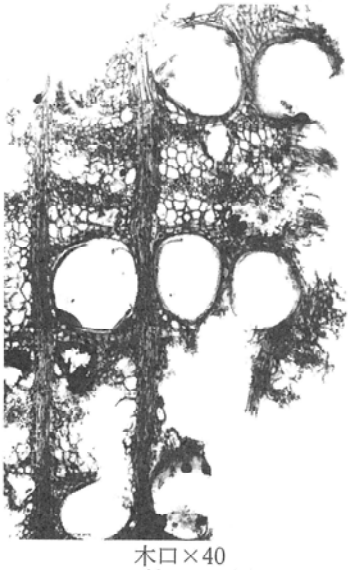


木口×40
No-49モクレン科モクレン属



柾目×40

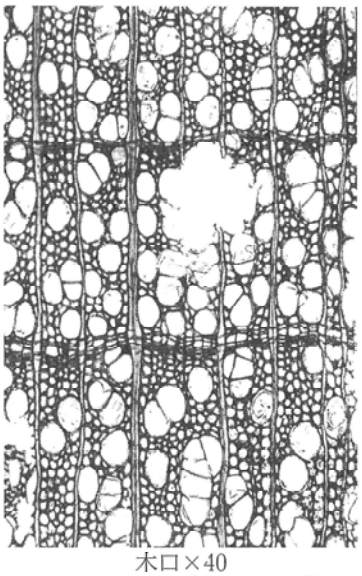
板目×40



木口×40
No-49ニレ科ケヤキ属ケヤキ

柾目×40

板目×40

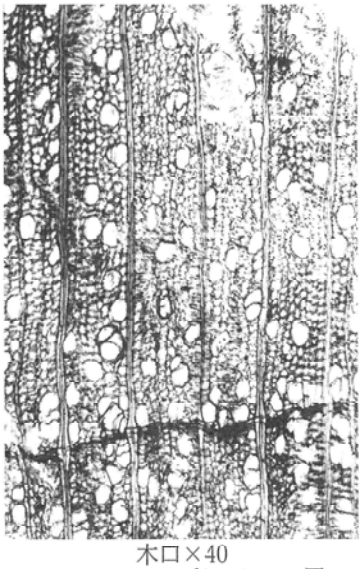


木口×40

No-50モクレン科モクレン属

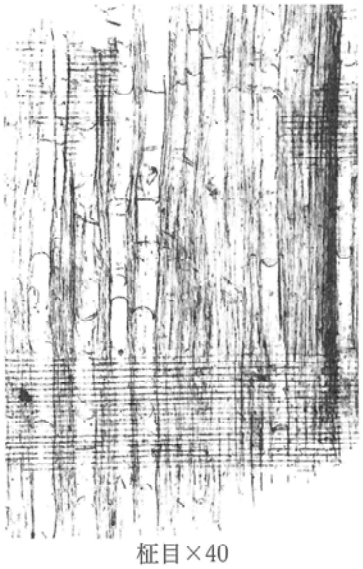
柾目×40

板目×40

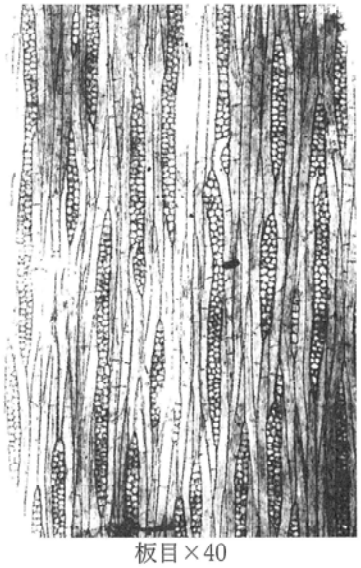


木口×40

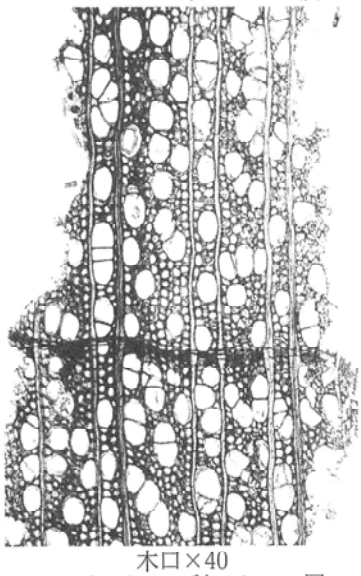
No-13モクレン科モクレン属



柾目×40

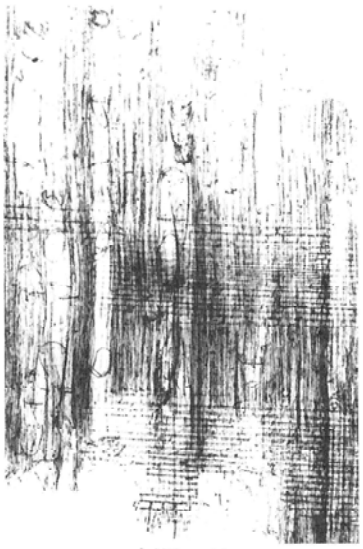


板目×40

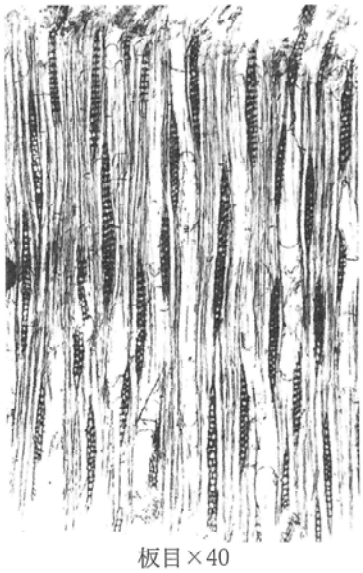


木口×40

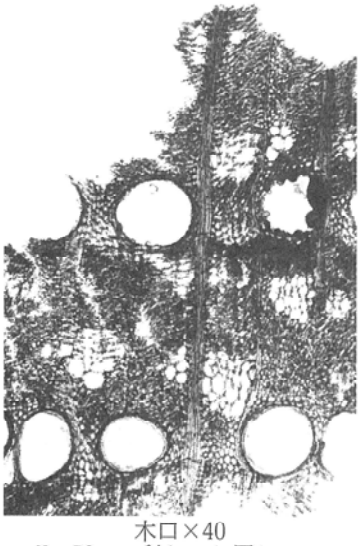
No-52モクレン科モクレン属



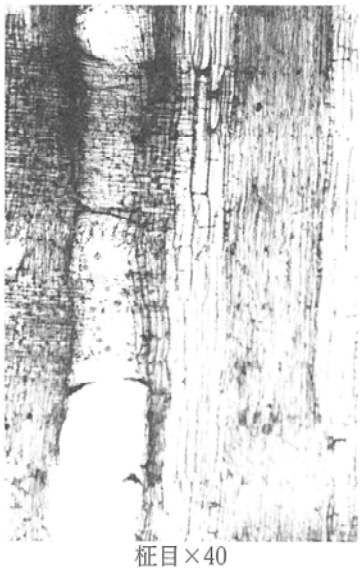
柾目×40



板目×40

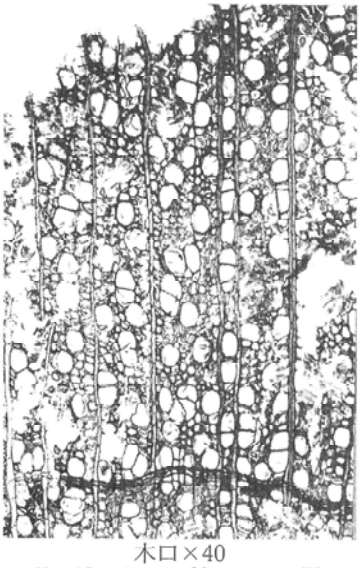


木口×40
No-52ニレ科ケヤキ属ケヤキ



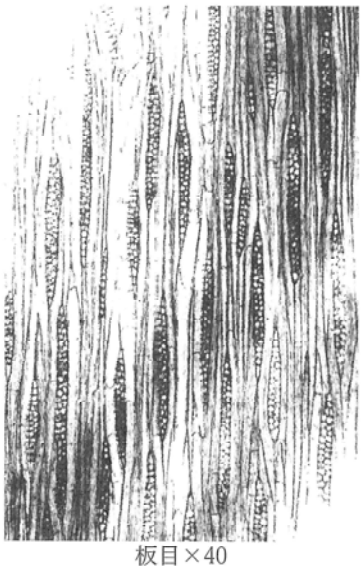
柾目×40

板目×40



木口×40
No-48モクレン科モクレン属

柾目×40

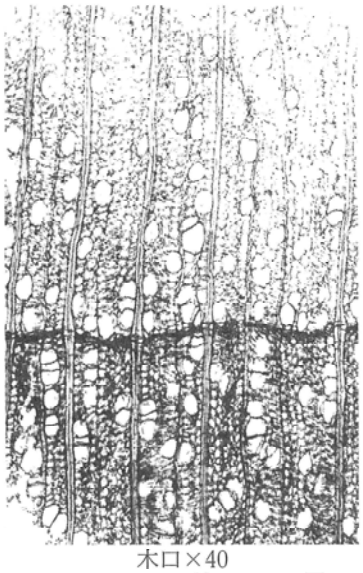


板目×40

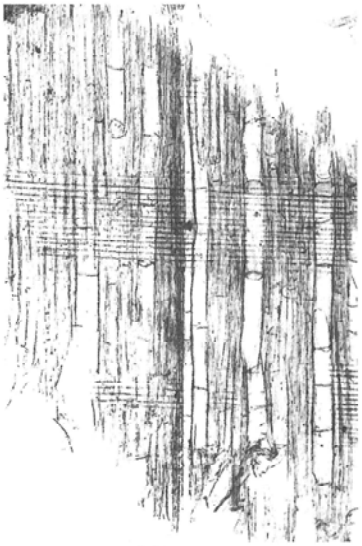
木口×40
No-53ニレ科ケヤキ属ケヤキ

柾目×40

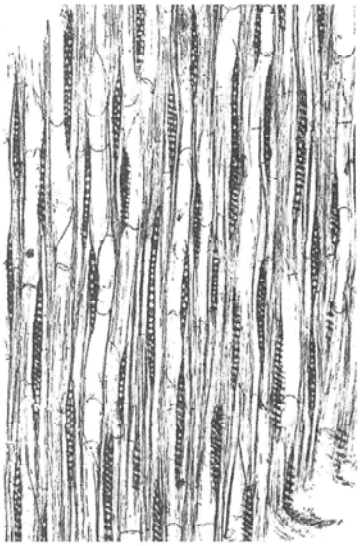
板目×40



木口×40
No-53モクレン科モクレン属



柾目×40



板目×40

山形県志戸田縄遺跡出土木製品の樹種調査結果（２）

㈱吉田生物研究所　汐見　　真
京都造形芸術大学　岡田　文男

１．試料

試料は志戸田縄遺跡から出土した農具１点、容器２点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹１種）の顕微鏡写真と表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ(Cryptomeria japonica D.Don)

（遺物No.127）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）ヒノキ科クロベ属クロベ(Thuja standishii Carr.)

（遺物No.128）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に２～６個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造(インデンチャー）ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

３）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect Prinus sp.)

（遺物No.129）

環孔材である。木口では大道管(～380μm)が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組

織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

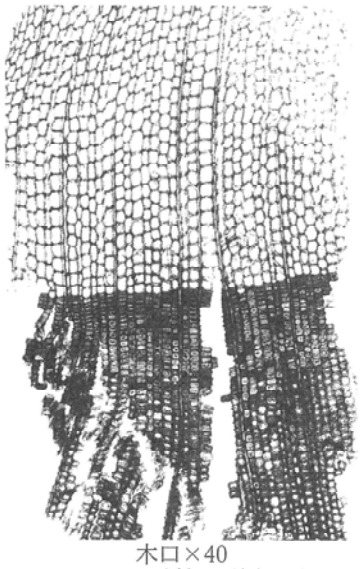
島地　謙・伊東　隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東　隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東　隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅳ」京都大学木質科学研究所（1995～）
北村　四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤　和三「樹体の解剖」海青社（1997）

◆使用顕微鏡◆

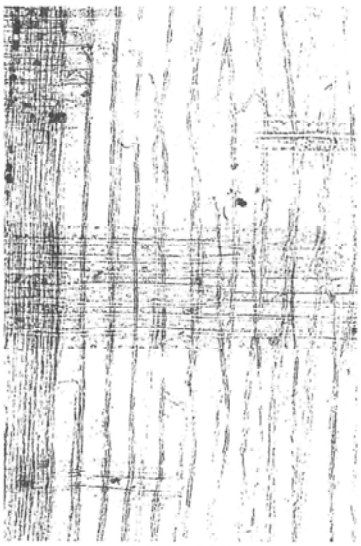
Nikon
MICROFLEEX UFX-DX Type 115

志戸田縄遺跡出土木製品樹種同定表

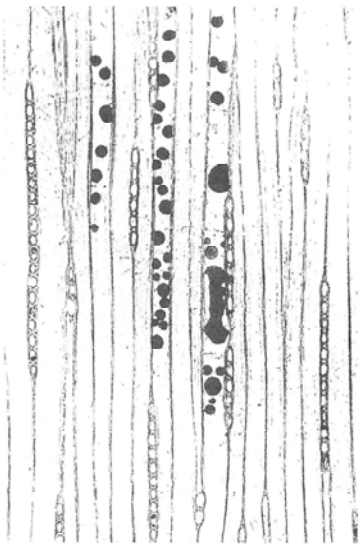
	No.	品　名	樹　　種
第3次調査	127	底板	スギ科スギ属スギ
	128	底板	ヒノキ科クロベ属クロベ
	129	鍬状木製品	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40

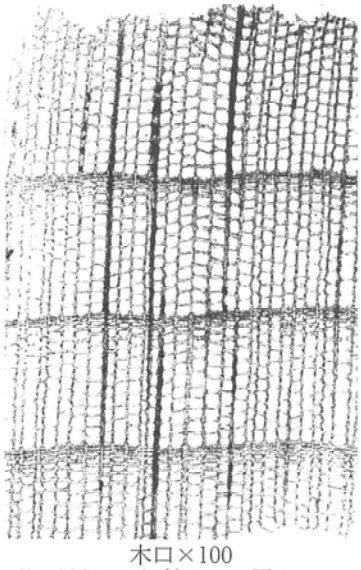


柾目×100

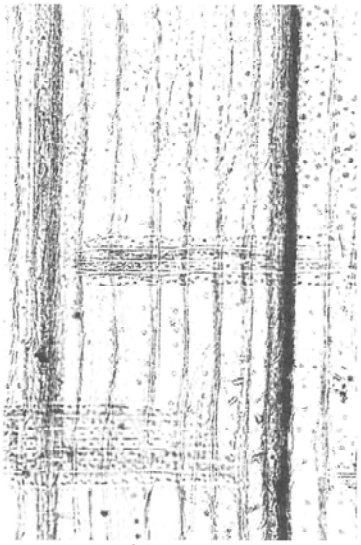


板目×100

No-127スギ科スギ属スギ



木口×100



柾目×200

板目×100

No-128ヒノキ科クロベ属クロベ

木口×40

柾目×40

板目×40

No-129ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

志戸田縄遺跡第２・３次発掘調査報告書

2001年10月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161
山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023-672-5301
印刷　藤庄印刷株式会社